## 吾妻町（あがつま）の百八灯

**名　称**　百八灯

**由来伝承**　新盆をむかえる家で墓地から自分の家までの間に、百八灯をつけてその火で霊魂をむかえようとする習俗は、形のうえでの仏説の百八煩悩に基づくもので、全国各地にみられるが、吾妻町の場合は、送り盆の時おこなう。

八月十三日に仏壇とは別に盆棚（精霊棚）を造る。十一日頃山からとってきた「ききょう、かるかや、おみなえし」などの盆花を若竹にさして飾り、きゅうり、なすで作った馬、果物、ボタモチなどを供え、十四・十五・十六日と祖先の霊をまつる行事がおこなわれる。十三日は門口で迎え火を焚いて精霊を迎え、十六日には送り火を焚いて送る。

盆棚の飾りを焼く（天神）

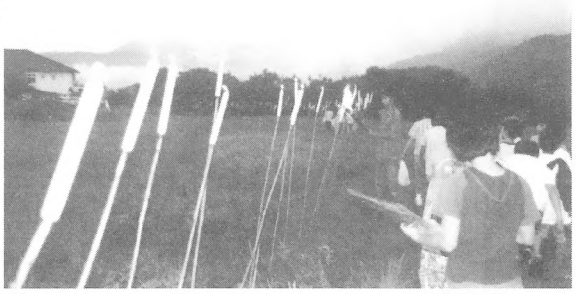
**実施期日**　八月十六日

**実施場所**　吾妻郡吾妻町大字矢倉　行沢
吾妻町大字岩下　天神
吾妻町大字岩下　姉山
吾妻町大字岩下　漆貝戸

**実施内容**　十六日に子供たちは各家の盆棚の飾りを集めて、一ヵ所に持ちより焼いて煙に乗せて精霊を送り、または川に流したりする。行沢は観音堂の参道、天神は田圃の畦道、姉山・漆貝戸は道路と人々の見やすい所に篠竹の先に立てたロウソクに火をともし、精霊への施しの献灯としているが、これを百八灯という。夕闇せまるころ盆棚の飾りを焼いた精霊送りの火をロウソクに移して、たてておいたロウソクに次々にともしていく。昔は子供たちは山へ出掛け松のヒデをとってきておく。当日所々にヒデがあかあかと燃え、大麻の特産地とあって篠竹でなくオガラの先にコウガンジロウソクをさし、火をともした。

参考文献「岩島村誌」

（丸山不二夫）



ロウソクに火がつけられる（天神）

## 赤岩の川施餓鬼

**名　称**　千代田の祭　川せがき

**由来伝承**　盆行事の一つで、川に燈籠を流して精霊を送る。明治十年に赤岩の豆腐店「かぶと屋」の奉公人が利根川にあやまって水死し、店の主人がこれを哀れみ、同十五年に赤岩の光恩寺の住職に供養してもらったのが始まりといわれる。おもに水難に遭った人を供養するのが目的であるが、現在では町をあげての祭りとなっている。

**実施期日**　八月十八日（水死した奉公人の寺の盆明けの日といわれている）

**実施場所**　邑楽郡千代田町赤岩　第一区公民館～赤岩宿通り～利根川地先

**組　織**　千代田町川せがき実施委員会及び保存会

**実施内容**　かつては赤岩宿の人々が行事を支えてきたが、昭和四十七年より千代田村と共催となり「千代田村川せがき納涼祭」と改称、更に町制施行後の平成六年から現在の名称となった。

祭りの当日、午後六時半ころから、実施委員会と保存会の人たちと町内の寺の住職六名が千代田町の第一区公民館に集まる。保存会は第一区（赤岩の中宿と上宿地区）の人たち二三名で構成される。第一区には一三組の隣保班があり、毎年一三組が交替で行う。午後七時から保存会の役員と住職たちが行列をつくり、赤岩宿通りを通って利根川に向かう。かつては、光恩寺の住職だけだったが、平成六年から町内にある六つの寺の住職全員が祭りに参加している。

行列は、保存会の役員のうち道案内一名、提灯二名、錫杖（チャリンコ）二名、ミョウハチ一名、太鼓一名が並び、その後に住職たちが続く。住職の中から、その年の導師を選び、導師がお経を唱えながら、鉦を鳴らす。鉦の「チン」という音に続き、その後に太鼓をたたき、ミョウハチを鳴らすことから、行列のことを「チン・ドン・シャン」ともいう。

利根川の堤防上に到着した住職たちは仮設の読経所に入り、午後七時四十分から、午後八時まで読経を行う。その間、利根川では一艘の船から先祖の霊を乗せた燈籠約五〇〇個が保存会の人たちによって次々に流される。読経が終わると、住職たちは川べりに降

利根川に向かう住職たちの行列

り川に米を流す。これは餓鬼にご飯を与えるためという。これが終了すると、再び行列を組み、第一区公民館に戻って行事は終了する。

流す燈籠は、現在では水に溶けやすい固形アルコールを使ったものを使う。最後に流す燈籠は、ダンボールをまとめて燃やす。かつては、ワラを束ねたものを燃やした。また四、五年前までは、長さ九尺くらいあるワラの軍艦を作り、マストから舳先にかけて新盆の提灯を飾り、最後に流した。川に流した燈籠は今は利根大堰が下流にできたため、その手前で回収する。

川施餓鬼は、水難者供養としての盆行事の一つであるが、現在は千代田町の祭りとして、この他に盛大な仕掛けの花火や民踊流し、舞台では八木節なども行われる。また、赤岩宿通りや利根川堤防上には多くの露天商が出店し、町内はもとより近在から約四万人の人で賑わい、対岸の埼玉県側にも露天商が出て賑わう。

（岡屋紀子）

利根川に流される燈籠

利根川堤防上の仮設の読経所

## 大島の火祭り

**名　称**　ヒャクハットウ

**由来伝承**　奈良時代に大島を治め、朝廷に謀反の疑いで討たれた羊太夫の霊を弔うために始められたという伝承がある。

**実施時期**　毎年八月十六日

**実施場所**　富岡市大島の城山の北面中腹

**組　織**　大島火祭り保存会（大島地区各世帯によって構成され、代表は区長が務めている。）

**実施内容**　十六日の夕方、大島地区の各世帯から一名ずつが城山の中腹に集まり、火文字を作る場所の草を払う。その場で協議して文字を決め、縄を文字の形に張る。張った縄にあわせて、石油を浸した布を入れた金属製の容器を立て、一斉に点火して山を下りる。点火に使ったタイマツは、火をつけたまま集落まで持ってきて消す。

点火具を立てる

点火用具は以前は各戸から持ち寄った麦藁を竹の串に結わえたものだったが、燃焼時間が短かったことから、昭和三十七年からは竹筒に布を入れて用いるようになり、さらに昭和四十七年からは金属製の容器に変わった。

大島の百八燈は、盆の時期に行われる共同の行事であり、その年の平穏を祈願するものとなっている。そして、その年に因んだことや願いごとから、毎年、作る火文字を選ぶことに特徴がある。

平成十一年には、明るい年になるようにという願いを込めて「明」であった。なお、平成六年から十年は順に、雨・災・水・正・直であった。富岡市内では大島のほか、神農原、上丹生で盆時期に村行事として百八燈が行われているが、これらはいずれも文字ではなく、山の上で、百八つの灯りを灯すこととなっている。

（渋澤克枝）

## 二〇　節供に行われる特色ある祭礼・行事

### 乙父（おっち）のおひながゆ

**名　称**　おひながゆ。方言おひなぎゃあ。

**由来伝承**　昔、神流川上流からお姫様が流されてきたのを村人が助け、いとしがって（かわいそうに思って）おかい（粥）を煮てもてなした。

また、都落ちしてきたお姫様を河原にシロを築いて住まわせ、おかいを煮て食べさせた、との両説がある。

八歳から中学生くらいまでの子供たちが河原にシロという石垣を丸く築き、薪でおかい（粥）を煮て、シロの中でおかいを食べる。

**実施期日**　四月三日　地域のお節供の日

**実施場所**　多野郡上野村乙父の神流川右岸の河原

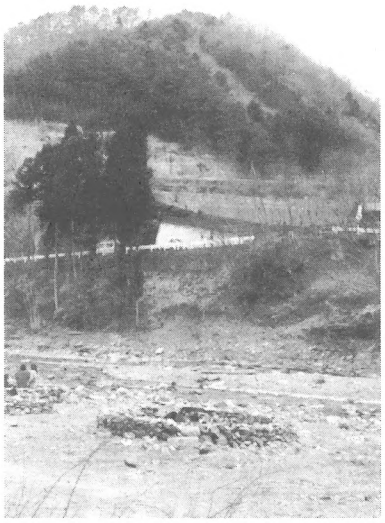
**組　織**　おひながゆ保存会、子供会育成会がある。

平成十年十二月一日、記録作成等の措置を講ずるべきものとして国に選択された。

**実施内容**　わが国では古くから春を待ち兼ねて野外に出て一日遊び、共同飲食をする習俗が、広く行われていた。今はほとんど見られないが、乙父のおひながいは、共同飲食をした春の野遊びと雛祭りが結び付いたものとみられる。

大正末から昭和初期のおひながい

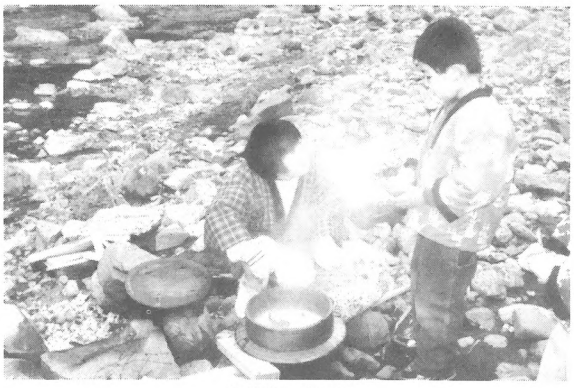
子供たちはおひながいをとても楽しみにしていた。春休みになると、水汲みや、弟妹の子守、そのほかに家の仕事を手伝ってから河原へとんでって、てんでんに（めいめいに）シロの石垣を積んだ。石はビャートリガチ（奪った者が勝ち）で取りっこになることもある。石を抱きかかえたり、でかいのは、転がしたりしてシロの回りに石を運び集める。石垣の高さ三～四〇（センチ）・石垣の内径一（メートル）余りから大きくも小さくもいい。一人で一つシロを作った。仲間が幾人かで一つのシロを作ることもある。出入り口をあけて、中小の石を突っかって石を積む。


川原沿いのシロ

出入り口の反対側の奥に、平らな石を棚のように工夫して、小さな天神様を飾る場所を作った。

おかいを煮るかまどは丁度よげな石をコの字型に置いてナベをのせ、火を燃やしておかいを煮る。

四月三日、おひながいの日、どこの家でもお節供だから座敷にお雛様を飾り、キミ餅、アワ餅、モチグサ餅など搗いて、菱形に切って進ぜてある。子供は嬉しくて早起きして、着物の上に綿入れの半天（纏）を着て、足袋を履いて身支度をした。米を入れたナベ、お椀に箸、杓子、おかいのおかずにオコーコ（沢庵）、葱味噌（刻んだ生ネギと味噌をまぜたもの）かカツブシ味噌、煮物など、家にあるものをお弁当箱に入れて行く。焚き付けに杉っぱを、燃しものにカズガラ（蒸して皮を剥き紙をすいた楮の芯棒）一わ、ムシロ、ツケギ（マッチの代用）も忘れず籠にでも入れ、家で焼いた炭も背負ってった。


お粥を煮る

雛壇の素焼きの小さい天神様も着物の懐に入れ、近所の子を呼ばって河原へ行く。四月とはいえまだ川風が寒い。河原の自分のシロに荷を置いて、まず川の水でおかいの米をといだ。水が冷たい。棚に天神様を飾って、そのあとカマドに杉っぱを置き、火を燃やす。その間にも友達のシロをのぞいたり、おしゃべりしたり、ままごとの延長のようで面白かった。

遊びに夢中で火が消えたり、吹きこぼれて火が消えたりする。その度に、火に顔を近付けてぷーぷー口で吹いて燃やす。水が減って焦げそうになったらお椀で水を汲んできて入れたりした。

シロの真ん中を少し掘って回りを石で囲って、おこした炭を置き、枯れ木をめっけてきて石の上に渡してその上に半天を脱いで掛けてこたつの真似ごとをした。やっとおかいが煮えると、天神様に進ぜる。シロの中のごろごろする大きい石をどかして、ムシロをすいて座って、お椀におかいを盛って、持ってきたおかずをセーテ（添えて）食べた。ふだんはわずかな米にひき割りを混ぜて煮た、ひき割り飯を食べたが、この日は割りを入れない米のおかいだからうれしい。特別ご馳走はないけれどうんまかった。おかいを煮るのに手間取って腹が減ってるから余計うんまかった。

そのあとはみんなとカルタや、すごろく、オヒート（お手玉）なんかして遊んだ。小遣いで鉄砲玉や駄菓子を買ってってみんなと食べた。家からさつまいもの切

シロの中で食事

り干しや、カチグリ（干して皮を剥いたクリ）なんか持ってきた子もいた。弟や妹がくるとおかいを盛ってやって食べさせて面倒をみた。お昼にも残ったおかいを食べて、なから夕方まで遊んで、片付けて帰った。

昭和初期から四十五年ころまでのおひながい

シロを作る。

子供たちは河原の氷が解け始める三月十日ころから気のあった仲間五～六人でシロ作りを始めた。なるべく手頃な石の多い場所を選ぶ。まず直径二㍍ほどの円を描き、その円の外側を深さ二〇㌢、幅五〇㌢くらい掘る。みんなで石を運び集め、大きな石を選び出入り口から積み始める。ここは大事なので念入りにする。石は内側と外側と二重に積み、隙間には適当な石をあてがって積み上げる。うまく積むと中学生の背丈ほども積める。その上に竹や木を渡して、不用になった雨戸などのせ、さらにムシロをのせた。出入り口にもムシロを下げて中が見えないようにした組もある。シロの真ん中に炉を作り回りにはムシロをすいて仕上がりだが、日数は大きさによって違うが、だいたい七日から十日くらいだった。

棚にお雛様を飾る

シロはだいぶ前から作り始め、十日くらい前に出来上がる。学校から帰ると川へとんでってカジカをとったり、焼いて食べたり、シロで遊んだ子もいる。

女の子のシロはかわいそうだった。石を持っていかれないように印をしといた。石垣も低く、現在のものに近かった。男の子はおかいがうまく煮られないからおかいを分けてもらった。女の子のシロには小さい子がいた。近くの子供がやってきた。子守っこや、子供をおぶってくる子もいた。石がなくなるとシロの中を掘った。こうすると天井は高くなるが、河原だから水が溜まることもあった。

近くのシロへ遊びに行ったりシロ同士の交流があったという。

当日持っていくもの

米一合、茶碗、箸は各自持つ。焚き付け、薪、ナベ、まな板、包丁、お雛様か天神様、供え餅、コタツなどは分担して持って行く。おかずはタクアンやイワシの缶詰などを持ってった。また小遣いを出し合って魚の缶詰や、メザシなどを買った。醤油飯を煮たこともある。

服装

普段着だがまだ寒いので洋服の上に綿入れの半天姿だった。いまは軽くて暖かいジャンパーの子もいる。

お雛様

シロの入り口の奥に作った石の棚に、天神様かお雛様を飾る（飾らないシロもある）。梅の花か菜の花でもあれば空き瓶にでも入れて飾る。シロの入り口を天神様に向けて開けておくといわれるが、そうすると雛も天神様の方を向くわけである。

炭焼き

昭和三十年代には、男の子が本ものの炭焼き窯を真似て、小型の炭窯を作って炭焼きをした。このシロを作るのと同じ河原で、小さな炭窯を築いて、枯れ木を拾い集めて焼いた炭でおかいを煮たり、こたつに入れた。

その他

おひながゆ保存会

上野村乙父七区・十一区区長が交替で会長をする。地区の班長も名を連ねる。

会長　黒沢久男氏　十一区

おひながゆの名を消滅させないよう協力活動する。

会員数　六〇名

予算額　年間九万円（村からの補助金）

子供会育成会　おひながゆに参加する子供の親たちが入って子供の面倒を見る。

活動　両会ともおひながゆの伝承、継続のため活動する。

かっては上野村西部の各集落でも行われていたが昭和二十年代にほとんど消滅した。昭和三十五年ごろから、マスコミに注目されて取材にくるようになる。このころは子供の数も多かった。だが子供は減り、石積みの技術も低下するので、行政も地区の子供会育成会に協力を要請して対応する状況となる。

大水が出るとシロは流失するので、育成会は昭和五十年代後半に内径四㍍ほどの大きなシロ三基を築き、おかいは母親たちが作って面倒を見る。しかし、平成十一年八月の出水で流された。

補助金は当日の費用に当てる。おかいの米、副食、豆炭などを買い、カメラマンにもおかいや味噌汁を振る舞う。

資料「乙父のおひながゆ」

埼玉県小鹿野町の河原沢川で「おひなげえ」をやる。乙父と同じように円形に石垣を積んで、その中で幼稚園から小学生がおかいを食べる。今年は二〇人程参加した。薪を燃やして保存会の親たちがおけえ（粥）を煮て面倒を見る。おひなげえをなぜするのか、特に伝承はないという。

（土屋政江）

## 二一　太鼓を祭具とする祭り・行事

### 中之条町の鳥追い

**名　称**　鳥追い祭り

**由来伝承**　この鳥追い祭りは昔は五穀豊穣祈願の予祝行事の「鳥追い」であったが、近年になって「祭り」の二字を加えて呼ぶようになった。

この予祝行事は道祖神をまつって悪霊、悪病、災難を排除し、作物を荒す害虫、害鳥獣を追いはらって、五穀豊穣、厄よけを願う行事であったが、町が商業町化したので商売繁昌を加えるようになった。以前は町内の子どもが、松の内がすむと、正月の松かざりなどで道祖神の近くに小屋をつくり、餅などの食糧を持ちこんで何日も泊まりこみ十四日の朝を迎えるのである。十四日の朝四時、一番鳥の鳴く頃になると子どもたちは町内を「どうろくじんがもえだすぞ」と大声で叫びながらまわる。これで町の人は目をさまし「繭玉」などを用意する。五時、二番鳥の鳴く頃になるとまた同じことをする。町内の人はこの声で道祖神の小屋へと向かい、一同が集まると、小屋に火がつけられて「どんどん焼き」がはじまる。子供の「書きぞめ」をもやし、もえかすが高くあがると字がじょうずになるなどと言い、持っていった木の枝にさした繭玉を焼いてたべると風邪をひかないなどの言い伝えがあった。「どんどん焼き」が終わってそれぞれ家に帰り、ひと休みして「鳥追い」をはじめたのだという。このようなならわしであったが太平洋戦争中、戦争後、松かざりをしなくなってから、どんどん焼きから鳥追いへの行事はなくなり、鳥追いだけの行事となった。

言い伝えによれば、この行事は慶長九年（一六〇四）にはじめられたといわれているがどのように行われたかわかっていない。文政八年（一八二五）から中之条町は、九代将軍家重の二男「清水大納言」（旗本）が領主となり善政を行った名君であった。当時農村は疲弊し、享保の頃二八五〇人だった人口も六〇〇人に減少し、それに加えて続く「ききん」で生活はおびやかされていた。清水卿はこれを深く心配して、人口増殖を計るため、種々の施策を施し、五穀豊穣を祈願し農民の心を鼓舞するために鳥追いを再興したと伝えられる。

当時の町の大庄屋、町田重兵衛は非常に太鼓ずきな人で、町を上と下の二町にわけ競争で大きな太鼓をつくらせたので年々大きな太鼓になったといわれる。鳥追いの日には太鼓の音が二〇キロも離れた大道峠、暮坂峠はては前橋や三国峠にまで聞こえたといわれるが、その頃は「バチ」の長さを制限しなかったので二メートルもの長いのを使ったためといわれ、毎年皮の張り替えをするので費用がかさみ、ついに明治三十年（一八九七）から中断し大正七年（一九一八）まで行われなかった。大正八年好景気の波にのって町の有志によって再興された。その時に「バチ」の長さも一尺八寸（五四センチ）と規定され現在も守り続けられている。（太平洋戦争中六年間休んだ）。昭和五八年（一九八三）太鼓十一個が群馬県指定重要有形民俗文化財に指定された。太鼓の大きさ、制作年代などは次のようである。

一号太鼓の胴の内側の墨書銘

常陸国真壁郡本木村、武蔵屋庄蔵作之
御太鼓師　高橋又左衛門重政製之
慶応三丁卯十二月吉日　江戸浅草新町
西御丸御用、御櫓御太鼓師、大阪屋三治郎張之
世話人　杉本角造、大森武平、剣持亀太郎
　鹿野佐七、田村龍太郎、高橋国平
　高橋長十郎

二号以下の墨書銘は略す

太鼓を打つ

中之条町の近村の鳥追いは子どもが主体で行うのが多いが、中之条町はむかしから成年男子が行うめずらしいものである。最近になってショー的色彩がこくなってきているが伝統を受けつぐ貴重なものである。

**実施期日**　一月十三日

**実施場所**　吾妻郡中之条町大字中之条町地内に、一部西中之条を含めている。

**組　織**　氏子総代、祭長、祭典幹事（神事、みかんなど投げるときのおはらい等々）

太鼓の運行は、上之町、中之町、下之町、堅町、王子町、宮本町、田町、小川町、の八つの町にわかれ、各町内に頭、副頭、若頭、若世話（町内により多少異なる）などの役が置かれ、頭は毎年交代で当番頭が全体を統率する。

**実施内容**　一月十三日朝九時、各町内から頭、など五人出て、太鼓を出し、飾りつけなどをして町の中心地に並べる。この時から誰でもたたけるようにし、夜は町内の家にあずける。

十四日当日、午前中から町中で諸準備が行われ、外商組合の店もはられる。

午後一時頃、町の氏神伊勢宮に集まり神事

| 名　称 | 直径（張皮面） | 胴周囲（中央） | 胴　長 | 材　質 | 製作年代（西暦） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1　号 | 103 | 397 | 115 | ケヤキ　牛皮 | 慶応３年（1867） |
| 2　号 | 103 | 382 | 111 | 〃 | 文久元年（1861） |
| 3　号 | 97 | 372 | 100 | 〃 | 慶応３年（1867） |
| 4　号 | 75 | 311 | 90 | 〃 | 安政２年（1855） |
| 5　号 | 67 | 275 | 75 | 〃 | 安政５年（1858） |
| 6　号 | 62 | 255 | 70 | 〃 | 天保11年（1840） |
| 7　号 | 63 | 234 | 62 | 〃 | 宝暦13年（1763） |
| 8　号 | 54 | 230 | 60 | 〃 | 天保12年（1841） |
| 9　号 | 51 | 216 | 58 | 〃 | 弘化３年（1846） |
| 10　号 | 44 | 185 | 54 | 〃 | 寛政４年（1792） |
| 11　号 | 39 | 153 | 43 | 〃 | 不　詳 |

太鼓の寸法・材質及び製作年代

（祝詞奏上、玉串奉奠）を執行、太鼓のお祓いを行って町内へ太鼓の運行がはじまる。

伊勢宮を出た太鼓は小川町、田町、上之町、中之町、下之町、堅町、王子町、宮本町と太鼓をたたきながら運行する。

太鼓の運行をする町内毎に、商売繁昌、厄年の人の厄払い（厄おとし）に、みかんその他の品物を投げる。中之条町商店会に入会している町内は二回（昼は商店会で一回、夜は商売繁昌、厄おとしの一回）、商店会に入っていない町内は昼の運行時に一回行うことになっている。昼は、小川町公民館、上之町駐車場、中之町吉田屋、群馬銀行前、下之町亀屋前、堅町田中商店前、王子町法務局前、田島病院前、宮元町樋田家前、田町公民館まで行ったところで夕食休憩をとる。夕食後は上之町中之町、下之町、堅町と店と厄落しの人たちの品物投げで終了する。

みかんや品物を投げるとき、一斉に太鼓を打ち鳴らす。この時につぎの唄がとなえられる。

セッセッセー
追いもうせ追いもうせ　唐土（とっと）の鳥を追いもうせ（三回くり返す）、セッセッセー（たたく人も大きい声を出す）（三回くりかえす）

そのあと、神社の祭長のお祓いがおこなわれ、投げる品物を出した人の紹介があってから、品物を投げる。みかんに貼られたシールによって温泉招待などがある。

中之条鳥追い

集まった人たちは、袋などを持って投げたものをひろう。近郷近在から集まる人が多くにぎやかである。

太鼓の運行は、当番長（頭の長）の町が九号と十号太鼓、前年当番長の町が一号を担当する太鼓の順が決められている。みかん投げが夜九時頃堅町を最後に終わると、町の中ほどに太鼓と若衆全部が集まり、手拍子高らかに「しめ」を行い鳥追いを終了する。

平成十年十一月六日、地域文化功労者として、祭長剣持和夫氏、当番長高橋文夫氏が文部大臣表彰を受けた。

（奈良秀重）

## 小雨（こさめ）・生須（なます）の鳥追い

**名　称**　鳥追い

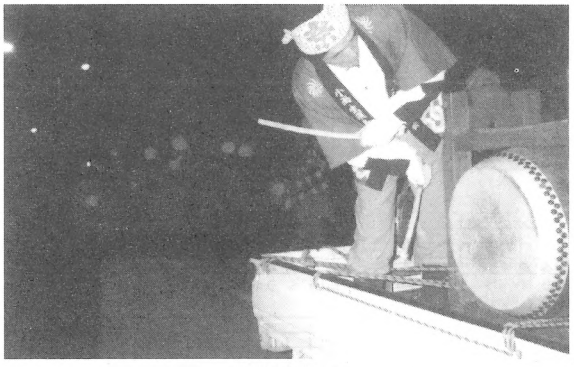
**由来伝承**　江戸初期から行われているという、この鳥追いは、吾妻川の支流「須川」の右岸と左岸に向かい合った集落で行われてきた。以前は両集落の青年（若人会）と中学校（尋常高等小学校）の高学年とで行われてきたもので、午後三時頃から、太鼓と鉦をたたき唄をうたいながら、何人か大きな袋をかついで、村中の家を一軒残らずまわり、夜食のだんごを集めた。各家では「ヒエ」「きび」「米」などのだんごを一升ますか重箱にひとつ出した。家によっては「モチ」や金を出す家もあったという。袋がいっぱいになると「長夜（ちょうや）」へ置きに行って集めた。この時各家の厄年の人はみかんなどを投げて厄落としをした。長夜に集められただんごは夕刻になると村中の家からそのだんごをもらいに行った。その量は両手をさし出して持てる程度であった。これを家に持ち帰り食べると一年中風邪をひかないといわれた。村中の人にやった残りは若衆と子どもが長夜で食べながら談らんをし夜を過した。朝三時頃になると、小雨と生須の両集落の人たちは、相対して川にそって並び鳥追いがはじまる。太鼓と鉦の音に合せて歌をうたい歌が終わると「ホーイ、ホイ、ホーイ、ホイ」と大声をあげながら提灯を高くあげる。小雨方も生須方も互いに負けじとこれを何回となく繰り返し行われた。

一時間か一時間半くらいで終了し、参加した人たちは家に帰る。若衆と子供は長夜へもどって残りのだんごを食べて夜明けをまった。

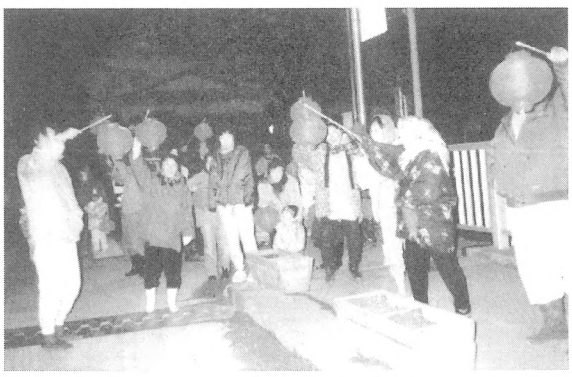
長夜は神社の境内にあり、集会所と社務所を兼ねたもので大きさは三間角（約五．四五㍍）で、まん中に、六尺角（約二㍍）ぐらいの囲炉裏がつくられ、天井はふきぬけになっていて大火が燃やせるようにできていた。

十五日の午後四時頃になると前日十四日に作っておいた、どんどん焼きをした。若衆頭が、火をつけて燃やした。以前は、大小ふたつのどんどん焼きを作ったが松の木が少なくなって今は一つ（小雨はまだ二つ）になっている。

**実施時期**　一月十四日から十五日



太鼓を打つ



ホーイホーイの声に合わせて提灯を上げる

どんどん焼き

**実施場所**　吾妻郡六合村小雨・生須の両集落地内

**組　織**　小雨、生須鳥追い保存会（会長黒岩勇、副会長市川高蔵、会員小雨五四人、生須一八人）区長と伍長（隣組の班長）が中心になって実行される。

**実施内容**

一　今は夜食だんごは集めない。（各家でだんごも作らない）

二　鳥追い

小雨は夕刻から長夜（公民館）を出発し鉦と太鼓をたたきながら村中をまわる。

その途中にあらかじめ決めておいた場所五～六ヶ所で止まり、鉦と太鼓に合せて鳥追いの歌をうたう。

村中まわり終ると、小雨、生須両村の集まる吾嬬橋へ行くのである。

生須は午後七時頃から鉦と太鼓を鳴らしながら村中をまわる。途中にあらかじめ決めてある場所で鉦と太鼓にあわせて、小雨と同じ歌をうたう。村中まわり終ると吾嬬橋へ向うのである。

小雨、生須両集落から午後八時半頃に吾嬬橋に集まると、小雨、生須の鉦、太鼓が向かい合ってならぶ、参加者には、子供、おとな全員に菓子などが配られる。区長の合図で、鉦と太鼓に合せて、鳥追いの歌をうたう。ホーイホイの声に合わせて提灯を高くあげる。これが何回となくくりかえされ、両集落とも競争でたたくありさまは勇壮である。

三　役落とし（厄年の人の厄払い）

小雨は鳥追い終了後、長夜（公民館）の庭で大火を燃やし、世話人、厄年の人は酒を飲みながら、みかん投げをする。

生須では、太鼓が村中をまわる前の午後七時頃に長夜（公民館）の庭で、みかんなどを投げて厄落としを行う。

四　どんどん焼き

小雨では、十四日の午前に、松そのほかの木の枝で、大小ふたつの「どんどん焼き」がつくられる。十五日の午後四時頃、区長の合図でこの「どんどん焼き」に火がつけられる。

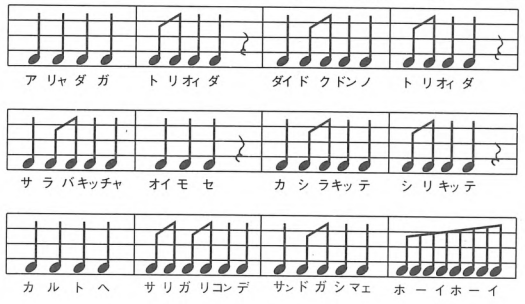
村の人たちは、木（ミズブサ）などにさした「繭玉」をこの火で焼いて食べる。これを食べると一年中風邪を引かないとの俗信がある。

生須ではむかしは、二つの「どんどん焼き」を作ったが、近年になって十四日に一つだけ作るようになった。十五日の午後四時頃に区長の合図で火がつけられる。その火で「繭玉」を焼いて食べる。これで、鳥追いからどんどん焼きの一連の行事を終るのである。

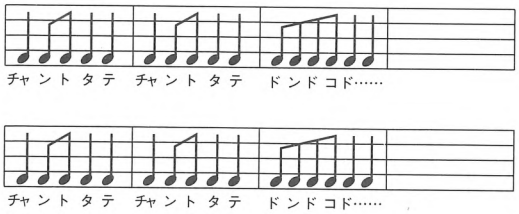
（奈良秀重）

鳥追い太鼓

小雨・生須鳥追太鼓保存会　黒岩　勇




どんどん焼き




## 新寺（にいでら）の鳥追い

**名　称**　新寺の鳥追い

**由来伝承**　信越線磯部駅西南方から安中市上磯部新寺で行われる正月の年中行事。土地の人は江戸時代中期から引き継がれて実施しているといっている。

**実施期日**　毎年一月十四日の夕方。

**実施場所**　安中市上磯部字新寺

**組　織**　安中市上磯部新寺の子供だけの行事。小学校三年生から中学二年生までの男子だけで行う。親方は中学二年生。鳥追い行事はすべて、この親方の指図で決まり、指図をする。獅子は中学一年生、さん俵二枚を組み合わせて作った獅子に唐草模様の一反風呂敷をつないで仕上げ、これを二人でかぶって二人立ちの獅子となる。新年踊り子は小学五・六年生がなり、古だるまの底をくり抜いて目をつけ、かぶったり、だるまの面をかぶってほほかぶりをする。悪魔払いは小学五・六年生で、さん俵に古いオンベロなどをつけて背負う。千俵万俵は小学五・六年生。小さい俵を作り俵の上下に御幣をつけ、中央に長い細縄をつけ、家々の座敷にころがして祝福する。金銀メはハッコメ。小学三・四年生で、葉のついた樫の枝の長いものを持つ。下駄そろえは一番下の低学年の子が座敷へ上がった先輩（親方や獅子）の履き物をそろえる。太鼓は中学一年生と小学六年生の二人が組んで青竹で大太鼓をかつぎ、太鼓打ちがたたく。近年はリヤカーでひきまわす。

**実施内容**　準備は親方を中心にして七草頃から始まり、一月十三日までには古達磨などで趣向をこらした準備を済ませる。当日（一月十四日）の夕方、日が西へ傾きかけると新寺の南の田んぼに集まり、松飾りなどを焼いてから、親方の指図で行列をつくり鳥追いに

出発する。太鼓をたたきながら、「鳥追いだ、鳥追いだ、ぢんどこどんの鳥追いだ」と声をあげながら、行進し、ムラ一番西の家から廻り始める。人家の前までくると、親方は「乗り込め、乗り込め」と表戸を開けて家の中に入り込む。獅子は座敷に上り、家の中で舞うようにして家の中に待機している人の頭や具合の悪い所を噛むようなしぐさをして疫病神を払う。せんだろ、まんだろ（千俵万俵）は台所で「一とっころがし千俵、二っころがし万俵」と俵を投げる。この俵にはヒモがついていて投げた俵は手元へ引き寄せたあと、もう一度ころがして祝福する。金銀は玄関で、樫の枝を使って「金銀珊瑚ぞはっこめはっこめ」といって、掃きこむまねをして皆で祝福する。家の人は若干の祝儀を包んだりお菓子やみかんを係の人に渡してくれる。最初の家が済むと一同で、ムラの反対の家の方を向いて「シイッ、シイッ」と鳥を追うまねをする。この「シイッ」は途中と最後と三回し、その度に太鼓を乱打する。ムラのあとは、磯部温泉の旅館街の方まで廻るのでかなり時間がかかる。

だるまやねこが玄関へ

田んぼで松飾りを焼く

最近は子供の人数も少なくなって方法も変ってきている。ご祝儀は、昔からのしきたりで、親方（年長者）が多くもらい、下級生は少ない。

馬場・水口の鳥追い　同じ安中市内下磯部の馬場と水口（隣接地）の鳥追いも、新寺と似ている子供組の行事。もともと大八車に大太鼓と打ち手が乗り、梶棒を持つ者、引き綱を引く組がいて、「今日はどこの鳥追いだ、ディとバーの鳥追いだ。頭切って尻切って、佐渡ヶ島へつん流せ」と大声をあげながら、部落内を威勢よく走り回る。回り終ると水口との境界辺りへ行って「渡したゾ」とみんなで大声で叫ぶと、待っていた水口組が「受け取った」と叫ぶ。これで行事は終了するわけだが、真暗闇の中で小石を投げあってけんかをしてくるのが決まりとなった。数年間中断のあと、戦後昭和二十三年に復活したが、昭和三十四年に馬場地区で共同のスケート場が碓氷川原に開場し、また中断したが、昭和六十年に子ども会育成会によって復活。発電器で提灯と万灯花をつけた山車を出すようになった。

家人のうしろへ

獅子が頭をかじるしぐさ

鷺宮宮本の鳥追い　一月十四日の夕方、夕食が済むと、咲前神社に一戸一人ずつの大人と子供が、朝道祖神のどんどん焼きの時に上げておいた旗（「道祖神まつり」と書いたものを篠につるしたもの）を持って集まる。参集した所で（祭り提灯を持った）年番（コグチという）が先導して神社に参拝し、太鼓を鳴らしながら時計回りで拝殿を一回りし、鳥居をくぐって道路に出て、太鼓に合わせて、「鳥追いだ、鳥追いだ、ありゃどこの鳥追いだ、地頭どんの鳥追いだ、頭切って、尻切って、佐渡が島へホーイホイ」「道祖神の馬鹿が一枚紙を惜しがって　コンブでケツ（尻）ぬぐったワーイワイ」などと鳥追いの歌を歌いながら村中を行進する。この行列が村の中を通り、南の村境まで来ると、旗を集めて燃やして、ワーワーッと声をあげて火のあとしまつをすると終わり。静かに帰宅する。昔は隣の下平の人が待ち受けていて鳥追いを引き継いで東の方の尾崎まで追っていった。（写真は安中市提供）

千俵、万俵をころがす

（参照『安中市史』第三巻民俗編、平成十年。『資料安

中市の文化財』平成元年。『磯部誌』平成二年。）

（森田秀策）

## 原市（はらいち）の鳥追い祭り

**名　称**　トリオイマツリ

**由来伝承**　創始年代は明らかではないが、嘉永六（一八五三）年の記録があることから、江戸時代後期にはすでに行われていたことがわかる。農作物の害鳥を追い払い、五穀豊穣を祈願する行事である。

**実施期日**　昭和三十八年以前は一月十四日・十五日だったが、以後中断した。昭和五十二年に復活してからは隔年で一月十五日に行うこととなった。平成十二年は祝日の改正により、一月十六日の日曜日に行われた。

**実施場所**　安中市原市の旧中山道

**組　織**　原市一区（下町）、二区（中町）、三区甲（上町）、三区乙（末広町）が行っている。

**実施内容**　下町・中町・上町・末広町の四地区が、一台ずつ屋台を引き出し、お囃子を奏でながら原市の旧中山道を練り歩く。屋台は、薄い色紙で作ったハナや、張り子の達磨や猫、「商売繁盛」「五穀豊穣」などと書かれた短冊で華やかに飾られる。養蚕が盛んであったころは、縁起物として養蚕用具のザルやフルイが飾られ、祭りの終わりにこれらを投げたという。祭りの当日ご祝儀を貰うと、縁起物を付けたハナを返す。現在ではこれを予め各地区ごとに準備しておくが、もとは屋台に飾ってあったハナを折って渡したものだという。末広町では地区で祀る絹笠神社の祭礼を鳥追い祭りと同時におこなっていて、返礼のハナに絹笠神社のお札が付けられていたことから、近在の養蚕家に喜ばれていた。（絹笠神社の祭礼は昭和三十八年以来中断していたが、平成十二年は行われた。）近年ではハナ返しの縁起物は各地区とも養蚕具ではなく、台所用品や日用品になっている。

鳥追い祭の屋台

お囃子は大太鼓・締太鼓・鉦・笛で、屋台の動きに合わせて変わる。お囃子が変わるときの音頭は大太鼓が行う。平らな道を行くときにはサンテコ、下り坂ではヒトツトヤ、上り坂ではヤタイバヤシ、屋台を回転させるときにはヤタイマワシなどである。これらのお囃子は鬼石から伝わったという。

（渋澤克枝）

## 二二　若衆・子供による祭り・行事

# 倉淵村のどんどん焼き

**名　称**　どんどん焼き

道祖神焼きのことで、一般的にはどんどん焼きとかドウロクジンヤキなどと呼ぶ。

**由来伝承**　年の初めに無病息災、家内安全を願ってどんどん焼きを始めたといわれている。どんどん焼きのどんどんは、ドントドンドンという囃子言葉からきていると言ったり、火がどんどんと燃える様からきていると言ったりする。

**実施期日**　本来倉淵村の多くの地区は、一月十四日の早朝に実施していた。ただ倉淵村北部の川浦地区などは、一月十四日の夕方に実施している。これは今も昔も変わりがない。しかし十四日の早朝行うと、その日の学校の授業に差し障りがあるので、休日の成人の日にするようになった。成人の日は、平成十二年より十五日から変更になったため、どんどん焼きを行う日も変わった。

**実施場所**　倉淵村全域

平成十一年にどんどん焼きを行ったのは六九地区、そのうち小屋を作ったのが六一地区であった。

十二年は、どんどん焼きを行った地区の数は変わらないが、小屋を作る地区が一地区増え六二地区であった。

**組　織**　各地区の子供会等

組織は男の子だけで作り、どんどん焼きをやっていた。中学二～三年生くらいの男の子が親方になり、下級生を指導しながらやっていた。子供の人数も減ってきたため、子供たちだけでは小屋を作ることができず、どんどん焼きができなくなってきた。また小学校の中学年の児童が親方をやるような地域も出てきた。そこで子供たちを支える形で大人が加わるようになり、各地で復活した。村ではどんどん焼きが子供育成に必要と考え、教育委員会が中心となり、どんどん焼きを行うように呼びかけた。平成十二年には小・中学生がいなくても、大人が小屋を作り、どんどん焼きを実施した地区もあった。

**実施内容**　倉淵村三ノ倉下宿のどんどん焼きの内容を主に報告し、他地区のどんどん焼きは異なる点を中心に報告する。

どんどん焼きの準備は、学校が冬休みに入るとすぐに枯れ杉葉集めから始まる。子供たちは山には入り、背負い籠いっぱいに杉の葉をつめて、どんどん焼きの小屋場まで運んでくる。子供たちは他の地区の小屋よりも大きなものを作ろうとして、たくさんの葉っぱを集めてきた。子供たちは杉の木に上って枝を自由勝手に伐るので、暮れになると大人が必要ない枝を伐っておく。杉葉集めが終わると竹や藁を集めた。

竹は、太さ直径一〇㌢くらい、長さ七㍍くらいのもので、八～一二本くらい使った。これも大人に伐ってもらい、運ぶのは子供たちがした。竹は先の方の枝を少し残して下の枝を取る。

戦前は子供たちだけで小屋を建てたので、材料が集まるとすぐに小屋作りに取りかかった。暮れからやっても燃す前日くらいまでかかった。今は地区中の大人が集まって作る。時間は慣れた大人がするので二時間くらいでできてしまう。集まる日は、正月二日の仕事始めであったが、最近は日曜日になった。

小屋の位置は、本来三本辻に立てると言うが、下宿では家に近すぎて火事になる恐れがあるので、川に近い田圃に立てた。

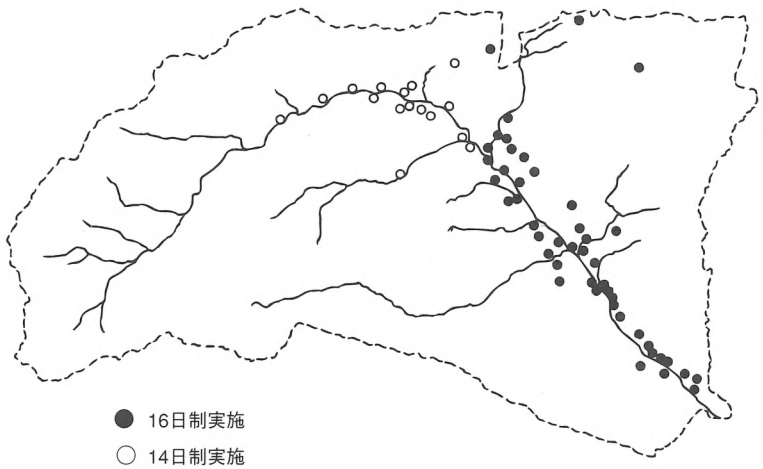
まず竹を束ねて、先の方を縄で何重にも縛る。途中に竹を引っ張るための縄も巻き込んで縛る。縛り終えたら小屋を作る田圃に半径一・五㍍位の円を描き、竹の根元が円の中心にくるように運び入れる。縄を引っ張る者、竹を押さえる者などに分かれて、縄を四方から引っ張りながら竹の束を立てる。立てたら束の竹を少しずつ開き、開いた竹を円上に打ちつけたおいた杭に縛り付け、竹の柱ができる。

次に竹を二つに割り、柱の竹に帯状に巻き付けた、胴締と呼ばれるものを作る。この胴締で、藁・ススキの枯れ草・杉葉が落ちないように止める。胴締と胴締の間隔は、松飾りの松の長さを考えて五〇～六〇㌢である。なお一番地面に近い胴締だけは、入口の部分には竹を巻かずにあけておく。

最後に胴締と胴締の間に、外から青い杉葉をさし、内側は枯れ杉葉をつめる。さらに七草にはずした正月の松飾り・だるまなどを杉葉のところに刺したりして小屋を完成させる。この松や竹は、子供たちは地区内の各家庭を一軒一軒回り集めてくる。

小屋の近くに小さな小屋を作る。これをダマガシ小屋と呼んだ。どんどん焼きの当日は、まずダマガシ小屋から先に燃やし、人が大勢集まってきたときに大きい小屋を燃やす。

完成すると昔は子供たちが、他の地域の子供に小屋




倉淵村のどんどん焼き分布図

を壊されないように見張るために、そこで寝泊まりした。このとき小屋の中に炉を作り、餅を焼いたり、しるこを作ったりして食べた。今は危ないので、村では小屋で寝泊まりも火も使わせないように呼びかけている。

どんどん焼きの前日には、オボシメシのお返しとオゴリを行う。

オボシメシとは、どんどん焼きをするときに集める寄付のことである。下宿では、ここ二十年くらいはやらなかったが、平成十二年は一月四日頃に回った。オボシメシは、松飾りを集めてくるときにもらうこともあった。オボシメシで回るとき、松飾りをしない喪中の家には行かない。オボシメシで集めたお金で、どんどん焼きの時に食べる菓子やお返しの品物などを買った。

オボシメシのお返しは、夕方午後四～五時に行われ、半紙に書いた「福の神　下宿」の札にお返しの品物を添えて配った。この品は、みかんやマッチ、最近ではティッシュなどが使われた。配るときに、これらを持って子供たちは各家の前に立ち、太鼓の「ドンドンドン」を合図に、戸を開け、「福の神舞い込め」と唱えて、玄関に札と品物を置くと、福の神が逃げないうちにすぐに戸を閉めた。オボシメシの額に応じて、品物の数を変えたりするが、これは親方の裁量で決める。配られた札は神棚などに上げておく。

お返しが済んでから、オゴリをやる。オゴリとは、親方の家を宿にして五日ご飯を会食することである。地域によってはオゴリを小屋でするところもあった。その後、小学六年生と中学生は、十時くらいまで太鼓をたたいて地域内を回った。昔は十二時近くまで太鼓をたたいていた。

当日の日も上がらない早朝に、子供たちは再び宿にあつまって来て太鼓をたたく。太鼓は燃やすまでに三回たたく。一番太鼓は、午前四時に始まり、「道祖神が燃えますよ、早く起きねえと、みな燃える」と囃しながら地域内を一回りする。二番太鼓は、五時で囃し言葉は一番太鼓と同じ。三番太鼓は、六時前で「道祖神に火がついた、早くこないと、みな燃える、繭玉焼きに、お出しなさい」と太鼓をたたきながら囃して回る。この太鼓を合図に人が小屋場に集まってくる。昭和四十年くらいまでは、一番太鼓は二時、二番太鼓は四時にたたいた。

太鼓の練習は、冬休みになると始めた。太鼓の叩き方は地区によって違うので、親方などが小さい子供に教えた。今は親方が知らなかったりするので、大人が教えている。特に遊びのなかった昔は、太鼓の練習が子供の遊びの中心になった。

どんどん焼きの火入れは午前六時に行う。川浦地区など夕方に行う地域を除き、一斉に火入れを行う。親方の父親が火入れをすることが多かったが、今は消防団員が行っている。

亀沢地区では、以前どんどん焼きの時に道祖神の石像を投げ込んで焼くので、石が削れてぼろぼろになってしまった。そこで大正十三年一月に子供のない親二人で新しい道祖神を建立した。

各家では繭玉を刺した木を担いで持ってくる。繭玉は白だけの家もあるが、紅白にする家もある。火の近くで焼くのは熱いので、みかんやするめを木に刺して焼いた。これを食べれば風邪を引かないという。権田地区では、繭玉を食べれば虫歯にならないという。長井地区では、どんどん焼きの火であぶったイカを食べれば、目が悪くならないといった。

厄年の人は、みかんやお酒を持ってきて、集まってきた人に振る舞い、厄落としをした。川浦地区では、男は酒、女はみかんを持ち、道祖神に供えたあとそれを投げ、みながそれを拾った。押平地区では厄年の人が豆をまいた。

またヌルデの木刀を持ってくる人もいる。これをキッポウとかヤットウとか呼んだ。これは、藤のツルかヌルデの皮をヌルデの木に巻き、どんどん焼きの火でいぶして跡をつける。これを神棚に上げたり、軒下にあげたりして悪霊退散を祈る。苗床作りの時に、これを水口に立て豊作を祈る。

権田地区では、どんどん焼きで焼いた刀をヤットウという。この刀を山に行くときに持っていくと、蛇などがそのにおいを嫌って出てこないという。またその刀で味噌をかき回すと腐らないという。小正月に小豆粥を作り、これを家の周りにまくときに、ヤットウを差して回る。

川浦地区ではどんどん焼きは十四日の夕方に燃す。このとき各家から繭玉、餅、書き初め、女子の落ち毛、キッポウなどを持ってきて燃やす。書き初めは、長い竹の棒にさして高くかかげながら焼き、遠くへ舞っていくほど腕が上がるといった。女子の落ち毛は、髪をとかしたときに落ちる毛で、一年分紙の袋に入れておく。これを紙の袋に入れたまま燃す。煙にまかせて燃え切ると頭が痛くならないという。

（田口智彦）

## 入山引沼のオンベーヤ

**名　称**　オンベーヤ（どんどん焼き）

どんどん焼きの別称である。吾妻郡東部各地で行われているのは、正月かざりの松で円錐形の小屋を作るのであるが、入山、特に引沼では「アケの山本」と言って門松を立てない家が多く、松かざりをしないので、モミの枝を主に使うのである。「オンベーヤ」と呼ぶが語源はわからない。

**由来伝承**　このオンベーヤは「道陸神」（道祖神）まつりである。

道ろく神という人は「一枚紙を惜しがって指でけつをぬぐった」と言ってはやしたてたという。それは、道ろく神は貧乏で結婚したが借金が返せず、次の日に家を燃やして、借金を返せない言いわけをしたという。そのため道ろく神は、自分の家を建てても、自分の家には一晩しか泊まれなかったということである。それで小屋をつくってその日に燃やすのだ。

**実施期日**　一月一五日

朝九時には村中（集落）毎戸一人が出て、夜八時～九時頃まで（オンベーヤが終わるまで）。

**実施場所**　吾妻郡六合村引沼集落のうちの適宜の場所

を、お頭と区長が相談して決定する。今年は、めずらしく雪が全く無かったので、火の粉がとんで野火や家屋が心配なので、広い場所を選び危険のないような場所で行った。

**組　織**　この行事は大字入沢の八集落の中の引沼集落で行われるもので、引沼に小集落が清水（六戸）打越（一三戸）中組（八戸）新屋（一一戸）双子（五戸）下出（五戸）の六ツがあり、この集落から小頭と呼ぶ世話人が出る。小頭の互選で「お頭」がきまる。今年のお頭は、山本、機、小頭、山本嘉光、山本茂、山本宗晴、山本谷五郎、関ユキ江、山本良昭の六人、七福神は若衆から選ばれた七人、この外、「祭事実行委員会」が参画する。

**実施内容**　オンベヤ作り、朝九時、引沼四八戸の毎戸一人ずつ出て、「モミ」の木の枝を取るために思い思いの所へ出かけ、小型トラックなどで運んでくる。お頭と区長が相談して建てる場所が決まると、モミの木の枝（この日だけはどこの木の枝を取っても何も言われない）ボヤ（枯木の枝を束ねたもの）エグサ、モミガラ、センクズ（メンパ、シャモジを作る時のくず）豆ガラ、ダルマ、正月かざりなどが集められる。

オンベーヤは、親オンベと子オンベの二つがつくられる。親オンベは高さ一〇メートルぐらい、子オンベは高さ五メートルぐらいである（今年は雪が全くないので、親オンベ高さ七メートル、子オンベ高さ親オンベの半分ぐらい）に作られた。

畑（冬なので何も作付けされていないが選ばれると持主は無条件で承諾する）が決まると、まず、心棒を立てる所に穴を掘り、目通り直径二〇センチぐらいのモミの木の末を切り落とさないものを立て、根元に横木を結びつけ、横木と心棒にスジカエを結びつける。心棒の根元から、エグサ、センクズ、豆がら、モミがらなどをつけ火のつきやすいように、また、根元が広くなるようにたくさんつける。その上にモミの枝のモトを心棒につけ枝の先が下をむくように重ねてつけて全体が円すい状になるように作る。

全体の形ができると、頂上にわら縄の長いものを四本結びつけ、四人がその縄のはしを持ち、オンベの上に二人が乗り、四人が右まわりにまわり、上の二人が、ゆるまないように約二〇～三〇センチの間隔で満身の力でしばりつける。この縄は火をつけた時「せいの神」を取りにのぼるための足場となるものである。「子オンベ」は大きさが半分ぐらいで作り方は親オンベと同じ要領で作る。

親オンベ

子オンベ

**七福神まわり**

若者七人が福徳の神七福神の衣装をまとい、昼すぎ（昔はオンベーヤが終わってから）から村中毎戸をまわりあるき、大黒天が福俵を持って座敷にあがり「めでたい、めでたいな、七福神が舞いこんだ、夷、大黒、毘沙門天、布袋、福禄、寿老人、弁財天が舞いこんだ、めでたい、めでたい、めでたいな」また「めでたい、めでたいな、福の神が舞いこんだ、家内安全めでたいな、無病息災めでたいな、五穀豊穣めでたいな、めでたい、めでたいや、めでたいや、あきの方より、大黒様の福俵、だんなしばらく土足ばごめん、だんなさまの前にひところがし、奥様の前にひところがし、ひところがしが千俵、ふたころがしが二千俵、三ころがしが万々俵、さてこの俵どこに納めましょうか、東の倉に積みましょうか、東の倉にはお金がどっさり、西の倉に積みましょうか、西の倉にはお金がどっさり、一俵残りしは、来年まで穂まち俵としてお預かりいたします」

このような口上を述べて「お祝い」の金をもらう。この金はお頭に預け、春まつりの福引きなどの費用に使う。

七福神まわり

オンベーヤ　親オンベ、子オンベとも午前中にはできあがり、全員が集会所に集まり、酒食を共にして夕刻をまつ。

夕刻、鐘や太鼓の音が鳴ると村中の人たちは、三三五五オンベーヤの所へ集まる。お頭を先頭にして「たいまつ」を持った役員が集会所からオンベヤに向かい、集まった人々に迎えられる。まず子オンベに点火され、しばらくすると、親オンベに点火される。親オンベの火の大きく勢いが強くなったころ若者が親オンベの燃えさかる上にのぼって歓声をあげる。（昔は、オンベの頂上にある「セイノ神」のとりっこをし、良縁を望んだという）。また、親オンベが燃えさかる頃、厄年の人

がみかんを投げたりお金を投げたりして厄払い（厄おとし）をする。この頃オンベーヤの火は最高潮となる。

昔は、オンベーヤの火が下火になると、心棒を倒し引っぱり出す。その時手についた炭をあたりかまわずまわりの人の顔にぬりつけたというが今は見られない。

またその心棒をかついで村中の家をまわり、心棒を鋸で輪切りにして配った。もらった家では神棚に供え、翌十六日の朝にもやし湯を沸かしてお茶をたて神様に供え、飲んだというが、「いろり」のない生活になったのでこの行事もなくなった。

（奈良秀重）

燃える親オンベ

## 箱石の地蔵かつぎ

**名　称**　地蔵かつぎ

**由来伝承**　玉村町箱石地区内の地蔵かつぎは明治時代から行われていたという。安産と子供の成長を祈願する祭りである。

**実施期日**　二月二十三日
七月二十三日の年二回行われている。

**実施場所**　佐波郡玉村町箱石　養命寺境内

**組　織**　養命寺檀家燈籠番と箱石の子供

**実施内容**　二月二十三日と七月二十三日の午後、燈籠番五名と箱石地区の小学校三年生以上の男子が集合する。

燈籠番は昔から箱石で生活していた家の人で、その各班から選出された五名が当番となる。

地蔵かつぎの本尊の地蔵菩薩は、養命寺境内の北向の地蔵堂に安置されている石製のお地蔵様で黒墨で目、鼻、口を描き頭に真っ赤な頭巾をのせ、真っ赤な前掛をかけた姿である。

お地蔵様を収納するものを長持様とよび、長持様は片開きでお地蔵様の全身を拝めるようになっている。下段は引き出しになっていて中の半分程は思召しのお金を入れる賽銭箱になっている。

隣の半分には線香と、ろうそくが入れられ、お地蔵様の前には線香立が供えられている。長持様の上部には金具が取り付けられ金具に角棒を通し前後二人で担ぐようになっている。

お地蔵様

地蔵様をかつぐ

一切の準備が整うと地蔵堂に当番と子供が全員集合し当番代表から、お話しと注意を聞く。終わると長持様にお地蔵様を収納し、前後二人ずつで担ぎ、大勢で「地蔵様ワッショイ、地蔵様ワッショイ」と大声で叫びながら、箱石地区中をねり歩く。行列には二名の役員が付き添う。

家々では戸口に地蔵様を迎えて、線香を供え思召しを奉納して、安産と子供の成長を祈念する。

ちなみに戸数は約百戸を数え廻り終えると夕刻になってしまう。

奉納された思召しは当番から子供たちに分配される。

平成十一年の燈籠番は山口一郎、金子直人、狩野得助、加藤信一の皆さんだった。

（川村勝保）

## 江田町の地蔵かつぎ

**名　称**　地蔵かつぎ

**由来伝承**　今から三百年ほど前のこと、当時箕輪城下であった江田に疫病が流行し、疫病によって多くの子供が亡くなった。そこで箕輪城主が地蔵菩薩を子育て地蔵信仰として、かつぎ地蔵を始めたと伝えられている。

江田町でのかつぎ地蔵は今から百年余り前から江田地蔵祭りとして定着し、地蔵堂をかつぐ祭りとなった。

**実施期日**　八月十四日

**実施場所**　前橋市江田町

**組　織**　江田町子供会及び男女小中学生

**実施内容**　八月十四日の盆迎えの前から長栄寺に子供達が集まって地蔵和讃の練習をする。昔は町内の地蔵っ子と呼ばれる十歳から十五歳の男子（一軒一人、次男以下参加できず）が世話人の下で練習をし行事を盛り上げていたが、今では子供会が世話役となり、子供会に入会している役員と女子を含めた子供全員が参加している。八月十四日午前六時江田町公民館前に集合、前日迄に地蔵堂（神輿型のもの）を公民館内に安置し

地蔵堂を車にのせて引く

ておいたのを、運び出し担ぐことなく車に乗せて引き町内の辻々で線香を上げてもらっている。

かつては地蔵堂を二人で担ぎ、鉦、太鼓に合わせ和讃を唱えながら、村内一戸残らず歩いて線香を上げ、子供の無病息災を祈ってもらい金銭や米穀などの寄進を受け、祭りが終わると子供達は年齢相応に金や菓子を分配されるのが楽しみだったという。地蔵堂を二人で担ぐことから車へと替わったが、今でも豆絞りの手拭いを肩に、かわいい口をいっぱいに開け、和讃を唱えながら歩く姿が見られた。

（川村勝保）

## 芦田町の出歩き地蔵

**名　称**　出歩き地蔵

地蔵尊の縁日に本尊の石地蔵立像を車に乗せ町内を巡回して祭る行事。榛名山南麓から高崎南部にかけて盛んな地蔵盆行事の地蔵回しの南限の形と見られる。

**由来伝承**　戦国時代末の天正十八年に藤岡領主となった芦田康真が信州芦田から藤岡に移住した際に光徳寺と共に移したという石地蔵が城南の芦田町の地蔵堂に祭られる。

**実施期日**　九月二十四日

地蔵盆の一月遅れ。市街地北部の宮本町地蔵堂にも同じ由来伝承の地蔵尊が祭られ地蔵盆の八月二十四日が縁日で一月ずらせて祭る。

**実施場所**　藤岡市藤岡芦田町　地蔵堂（公会堂兼）及び芦田町内

**組　織**　区長一　区長代理二　部長四　区役員一〇　青年会員二〇　光徳寺住職一、芦田町内は旧芦田城跡の南一帯に広がり約八六〇戸が六九班に分かれる。町内の行事として地蔵祭りを行う。

**実施内容**

祭り当日

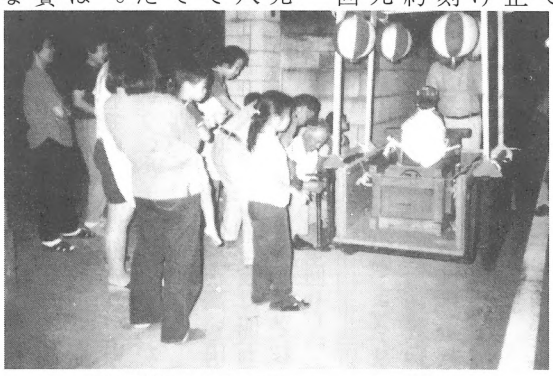
午前九時より役員が地蔵堂に集まり祭場作り・念仏玉（菓子袋）作りなどの諸準備を行い、地蔵尊をお開帳して参拝者を受け付ける。

幼稚園児・保育園児も団体で参拝に来る外、念仏講も催され光徳寺住職の読経があり、三々五々訪れる参拝者で賑わう。

夕方五時半ごろ青年会員が来て地蔵尊の出歩く準備を整える。以前は石地蔵立像（高さ八四㌢重さ約二五貫）を丈夫な枠に固定し二本棒を渡して四人で担いだが、現在は車（リヤカー）に後ろ向きに載せて引き回す。夕方六時ごろ出発するが、地蔵様の町内巡回コースは地図ができていて五二ヵ所で止まって参拝を受けるように予定時刻も場所も示され約三時間かけて夜九時ごろまで引き回される。

地蔵様が回る先触れに鉦（径二八㌢）を棒に吊して若衆二人が担いでカーンカーンとたたいて先導する。辻々で待つ人々は地蔵様が来ると賽銭をあげ身体をなでて拝み健康を祈る。夜遅くまで巡回して堂に帰ると、待ち受けた役員たちと若衆との慰労会が催され町内の交流と懇親が深められる。

（関口正己）


地蔵様が町内を回り、人々が拝む

二三　富士浅間信仰

# 富士嶽神社の初山大祭

**名　称**　初山祭（ペッタンコ祭・浅間様のお祭り）

**由来伝承**　富士浅間信仰の一つ。「初山参り」と称し、両親や祖父母に連れられた一歳未満の初山を迎える子供が参拝し、その子供の額に御神印（朱印）を押す。初詣り、初登山を意味し、子供の成長を祈願する。

**実施期日**　大祭は六月一日（本社の富士浅間神社の山開きに合わせる。宵祭りは五月三十一日）

**実施場所**　館林市富士原町　富士嶽神社

**組　織**　富士嶽神社氏子

**実施内容**　五月中旬に総代全員で一日がかりでお札作りを行う。五月三十一日が宵祭りで、午前中から総代と各区長十人ずつの準備委員が祭りの準備を始め、午後から参拝者を迎える。六月一日は午前十一時に祈祷祭が行われ、区長、総代のほか有志たち約三〇人ほどがお祓いを受ける。

参拝者は市内をはじめ県内、近県から集まる。中には、遠方に嫁いだ娘が生まれた子供を連れて里帰りをして参拝する人もいる。参拝者の中心は、一歳未満の子供を連れた両親や祖父母などで、本殿に登る前に初穂料を納め、お札、破魔矢、供物などを受け取ったあと、本殿のある山頂まで登り、そこでお祓いをしたあと、子供の額に朱の御神印を押してもらう。子供の額に御神印を押すのは、白装束をつけた区長と総代が交替で行う。御神印は一つで小槌形をして、槌の両端に文字が刻まれ、それに朱肉を付けて子供の額に押す。押す面は直径約七㌢の円形で、両端に刻まれている文字はそれぞれ異なり、粗い文字の方が男児、細かい文字の方が女児と、区別して押している。

初山参りの子供の額に朱印を押す

神社の本殿と拝殿は、富士山を模した小高い山（古墳を利用）の頂上にあり、山頂に登る階段は四五段あり、途中に一合目から八合目まで高さが表示されている。参拝が終わると、本殿の周りをひと回りし、別の下り階段で降りる。

二十年頃前までは、「初山着物（はつやまぎもん）」「初山の着物」といって、里親が子供に夏用の着物（浴衣）を作ってくれて、それを参拝する子供に着せておいに行く家もあった。初山参りをした家では、親戚などを呼んで赤飯を炊き、お祝いを行った。

朱印を額に押した子供

また、境内には約一〇〇軒の露天商が出てにぎわうが、本殿に近い参道には、館林市内の玩具店がうちわの露店を二軒出している。これは、初山を迎えた家で参拝した後にうちわを買って、その裏に子供の名前を入れ、それを二本ずつ親戚や近所などに配る風習があるためである。

うちわは災難を吹き飛ばすという意味があり、二本配るのはお祝い事が重なるようにといわれるが、最近では一本の家もある。うちわの表の絵柄は毎年変わり、子供向けの漫画風の絵柄が多い。裏は富士山の図の中に「初山」と文字が書かれ、その右下に子供の名前を書く欄がある。うちわを販売している玩具店では、富士嶽神社以外にもこの近辺の浅間神社の初山祭りでうちわの販売を行っている。

この富士嶽神社の初山祭は、初山を迎える子供を持つ家以外にも多くの参拝者が詣で、その数は約一万人にのぼる。境内の神楽殿では、昼は神楽、夜はカラオケなどの芸能が行われ、露天商や参拝客の数も多く、初山祭りとしてはこの近辺最大のお祭りといえる。

境内にあるうちわの露店

初山祭りの行事は富士浅間信仰によるもので、浅間神社を中心に広まっている。館林市内では他に花山町の富士嶽神社（大祭が五月一日、宵祭りが四月三十日）でも行っている。また、邑楽町中野藤原地区の浅間神社（六月一日）、大泉町富士越地区の浅間神社（六月一日）、太田市長手地区の金山浅間神社（七月二十三日夜～二十四日）、同市岩瀬川地区の浅間神社（七月二十四日）、足利市田中町の浅間神社（六月一日）などでも同様に行われ、東毛地域とその周辺特有の風習と見られる。なお、板倉町海老瀬の一峯神社でも、九月一日（八月三十一日は宵祭り、現在は八月最終週の日曜日）に例大祭が行われ、境内末社の富士浅間社で生まれて一歳未満の子供の額に朱印を押す風習がある。本来は六月の一日に行われるものであるが、一峯神社の例大祭にあわせて初山祭りを行っている。

（岡屋紀子）

## 長手金山浅間神社の初山

**名　称**　初山（付・岩瀬川浅間神社初山）

**由来伝承**　長手は、十二世紀後半の古文書にその名が出ているほどの古い地域である。ここに金山浅間神社が祀られている。同社は、長手の鎮守様で、旧社格は村社。祭神は大山祇命、木花咲耶比売命、磐長比売命である。この神社の夏祭り（七月二十四日）の日に、初山の行事が行われている。

　ここの初山の行事の由来は不明であるが、天正十七年六月一日付「北條家朱印状」（島根県桜井文書）に、長手郷における「富士参詣者」に対する「押買狼藉」を停止する旨の禁制が記されている。この文面が、北条氏直から長手郷領主桜井肥前守に対して出された所領経営のための指示であるとすれば、この「富士参詣者」は長手の富士浅間社への参詣者とみることができる。（『太田市史』通史編・中世参照）このことから、長手の浅間神社は中世にまで遡ることができることになる。しかし、このことと、初山の行事との直接の結びつきについては、不明である。

　いずれにしても、初山信仰の下地は古くからあったことが考えられるといえよう。

**実施期日**　七月二十四日

**実施場所**　太田市長手町　金山浅間神社

**組　織**　金山浅間神社氏子総代

神印を押す（太田市教委提供）

**実施内容**　この日参拝に来る者はこの年一年以内に生まれた子供である。以前は、母親の里でつくってくれた初山きもんを着て、親に連れられお参りに来た。浅間神社の社頭で氏子総代（世話人）に同社の神印をひたいとが着物の帯に押してもらう。こうすることによってその子供の無事成長が叶えられるという信仰にもとづく。

　長手の浅間様へのお参りは早朝からはじまる。そのために、長手の浅間様の初山参りは「朝浅間」といわれている。かつては、長手の浅間様のお参りに行ってその足で、同市の岩瀬川の浅間様へまわって同じ初山参りをした。

　なお、浅間様の本殿は浅間山の頂上に祀られ、拝殿はその麓にある。

（井田安雄）

## 下津（しもづ）のお富士参り

**名　称**　お富士参り

**由来伝承**　この行事の由来伝承は不明である。現在八十歳台の人達も七歳のときにお富士参りをしたというから、古くから行われてきた行事であると考えられるが、文献資料を欠くのではっきりしたことはわからない。下津の竹改戸の中に富士山があり、竹改戸の中の小地名に富士山があるので、古くからの富士信仰を暗示していると考えられる。この信仰を基にしたお富士参りの行事は、利根・沼田地区（特に沼田市近辺）において行われてきた行事とされる。現在では、下津の浅間神社にお参りする人は、二、三人であるという。

**実施期日**　十一月十五日。古くは旧暦六月十五日、後に七月十五日となり、最近では、七五三の行事と同じく、十一月十五日に行われるようになった。

**実施場所**　利根郡月夜野町下津の富士山と里宮（富士山の山頂に浅間神社の石宮あり）

**組　織**　個人ごとに行われていたので、特に組織なし。もとは、地元の法印が子供を富士山の浅間様へ連れていったという。

**実施内容**　十一月十五日に、七歳の子供に新しく作ってくれた着物を着せて、家人が浅間様にお参りに連れて行った。このとき、竹筒二本に甘酒を入れて、水引で結わえて浅間様へ上げてきた。今では、お参りの人も少ない。浅間神社の里宮の近くの世話役の人がお参りの人に「富士浅間神社神璽」というお札を渡している。なお、この日、近所の人や親戚の人がお祝いを持ってきてくれた。近所や親戚の家へは、甘酒を配ったという。また、呼ばれてきた人には、甘酒や赤飯を振舞った。お祝いをくれた人には、お返しに団扇（沼田で買った）に本人の名前を書いて配った。子供の無事成長を祈っての行事であるという。今は、七五三の祝いに変わって、お参りの人もごくわずかという。

（井田安雄）

富士浅間神社里宮（下津）

## 二四　念仏

# 下増田の天道念仏

下増田町は、須永・阿久津・奥原・中屋敷の四つの組に分れており、かつてはそれぞれの組で天道念仏を行っていたが、現在は須永・阿久津の両組でのみ行われている。

**①須永組**

**名　称**　天道念仏

**由来伝承**　いつ頃から行われたかは不明。古い資料は昭和二十二年の水害で失われた。

天道を祀る行事で、太陽の恵みをたたえるものという。

**実施期日**　かつては春（彼岸の中日）、秋（十月十日）の年二回行っていた。秋も彼岸の中日にした時期もあったが、養蚕が盛んだった頃、鉦を叩くと蚕が騒ぐといって嫌ったため十月になったという。昭和五十一～二年頃より、春のみの年一回に変った。

当番の家で行った頃は、日の出から日の入りまでであったが、会場を使うようになってからは、午前中に準備をして昼頃から始めて一～二時間程度で切り上げるようになった。

**実施場所**　前橋市下増田町須永　以前は当番の家で行っていたが、昭和四十六年春より須永会議所で行うようになり、昭和五十二年に新しい公民館が落成したため昭和五十三年春から現在まで須永公民館で行っている。

**組　織**　須永組の役員である組長・協議員各一名と班長十名で準備をして、全戸に連絡する。以前はほとんど毎戸からの参加があったが、現在は年寄りが中心で七～八名が集まるのみである。

全戸をあげての行事のため、以前は全戸でクジをひき、当番の順番を決め、一回交代で行った。昭和三十一年に六七軒でクジをひいたが、これが最後のクジとなった。クジで決まった順番に従って、昭和四十五年までは会場も準備も当番の家で行われていたが、昭和四十六年以降会場が会議所や公民館に変ってからは、準備だけが当番の仕事になり、そして平成四年からは準備も当番に替って組の役員がするようになった。

当番がなくなってからは、組内への連絡も回覧板で済ますようになったが、それまでは当番が全戸に廻状を回した。念仏の日の一ヵ月程前に回し始める。組内をまん中で西と東に分け、それぞれに一本ずつ廻状を作る。各家はそれを見ると、自分の家の名前に印をつけて次へ回すのである。

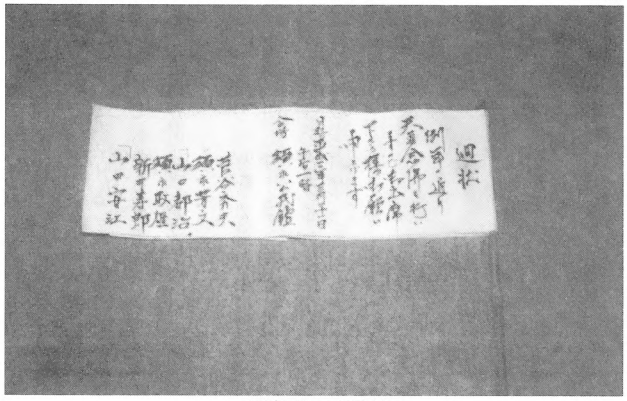
当日は準備が大変なので、当番の家の隣保班が手伝いをしたものだった。

**実施内容**　組内の竹藪から長さ二㍍位の竹を四本切り出す。組長が予め左撚りの縄を四～五〇㍍程用意しておく。会場の四角に竹を立て、この縄をふた回り巡らし、縄には四方に四本ずつ幣束を下げる。

供え物は、線香・赤飯・酒一升・煮物・漬け物・果物などである。もとは当番が一升モチを搗いて供え、行事の終わりに細かく切り分けて配ったものだった。これを食べると病気にならないといった。そのモチの名残で現在は菓子を配っている。

毎戸に配るお札用と、八丁ジメの竹に縛るお札用との二本の版木があり、当日墨で刷って用意する。

念仏の唱え言は「ナムアミダブツ」で、三遍ゲエシ（かえし）といって三度唱えたら三度鉦を叩き、これを繰り返す。現在は念仏をテープで流し、それに合わせて鉦・太鼓を叩くのみである。線香を一本立てて始め、燃え尽きたら交代する。



須永組の廻状

お天道様を拝むのだからと、かつては縁側に祭壇をつくり外に向かって念仏を唱えたが、現在は会場の中で行っている。

念仏が終わると、部屋に巡らしたシメ縄の四辺のまん中を切り、その縄で竹にお札を縛り付ける。この竹を須永組の入り口四ヵ所に立てる。ムラ（組）の中に災いが入ってくるのを防ぐためにするもので、これを八丁ジメと呼んでいる。

参加者は、漬け物や菓子などを食べながら供え物の酒を飲み、おわりにお札と菓子をもらって帰る。

須永組の八丁ジメ

**②阿久津組**

**名　称**　天道念仏

**実施期日**　年一回、春の彼岸の中日に行う。現存する會所連名帳によれば、かつては年二回行われていた。明治三十年代から春はほぼ彼岸中日近辺に決まっていたようだが、それ以前は、三月下旬から四月十日前後の日付の記載がみられる。また二度めについては、明治三十二年から四十二年までは七月十二日から二十九日までの間のいずれかの日に行われている。明治四十四年からは九月もしくは十月に行うようになり、そして昭和十四年を最後に、春のみの年一回に変わってい

る。

**実施場所**　前橋市下増田町阿久津　もとは当番の家で行っていたが、現在は阿久津研修センターで行う。

**組　織**　組長と、班長の中から互選で決まった一名とが中心となって段取りをし、細かい世話を当番がしている。

当番は毎年二軒交代でなり、天道念仏の他、組内の祭りや下増田町全体の祭りなどの世話もしている。天道念仏に関する書き物が入った箱（チョウ箱）と大日如来の掛軸を預かり、終わると次の人へ渡す。

天道念仏會所連名帳によると、当番は會所世話人・世話係などと呼ばれ、宿を提供し、二軒一組で一回ごとに交代していたようである。

**実施内容**　研修センターの部屋の中に東向きに大日如来の掛軸を掛け、その前に祭壇をつくる。祭壇には線香・ロウソク・お札・花・果物の他、大徳利に入った酒が二本供えられる。掛軸の掛けられた側にはシメ縄を張る。

鉦二つと太鼓を三人が同時に打ち鳴らし、その音頭に合わせて大日如来に向かって念仏を唱える。一通りの念仏を唱えると今度は、祭壇を南に向け天道様に向かって、唱え言の異なる念仏を申す。現在は組内の古老が唱える念仏を録音し、それに合わせて鉦・太鼓を叩いている。

念仏が終わると、祭壇に供えられていた大徳利を下げて酒を飲むのだが、徳利の口に手の平を当ててそのまま逆さにし、戻してその手についた酒をペロリとなめるのである。参加者全員に徳利を回す。

最後にシメ縄をはずして切り、この縄で竹にお札を縛りつける。竹は六本、予め用意しておく。お札は当番が版木で刷る。二本ある版木のうち、小さい方を赤い紙に刷り、これを半紙でくるんでその上からもう一本の版木で刷って仕上げる。

お札のついたこの竹をムラ（組）境ハヵ所にたてて、組内に災いが入り込むのを防ぐ。これを八丁ジメという。ムラ（組）境に近い人が帰りがけに預かっていって立てる。

**その他**　大日如来の掛軸を入れる箱の蓋の内側には、次の銘がある。

文政元年　下増田村
如来様御箱施主
細野甚右衛門
卯　正月吉日

また、かつて天道念仏の時に使っていた花立てには、天保十年と記されている。

會所世話人の名前を記した「會所連名帳」の他、金銭出納については「天道念佛入用帳」が、明治初め頃のものから残っている。

**③隣接地域での伝承**

下増田町に接する上増田町では、大塚田という地域でやはり天道念仏が行われている。

ここでは、大塚田全体を四つの組に分け、一年交代に当番組が念仏を行う。実施日は、三月十七日（彼岸の入り）。もとは寮と呼ばれた大塚田公民館の座敷に薬師様が祀ってあり、その前で行う。

集まった人たちが交代で念仏を唱えるのだが、この時叩いた鉦の数を数え、全部終わるとその数を紙に書いて薬師様のところに貼り付ける。鉦を叩く人が二名、数を数える人一名で、全員が順に交代していく。

数えるために木で作った「駒」という数札が用いられる。もとは、「天道念仏南無阿弥陀」の唱え言を三回唱えると鉦ひとつ駒ひとつだったが、今は唱え言に合わせて鉦を三つ叩き、鉦三つで駒ひとつと数えている。五万四千回が標準念仏だという。百八回の念仏を五百回という計算である。これを目標に、かつては日の出から日の入りまで行ったものだった。

版木が二種類あり、二枚を一組にして全戸に配る。念仏をあげている最中に、男の人たちが色紙に墨で刷り上げる。

なお、一つの版木の裏には、「文化七庚子年三月」（一八一〇）と記されている。

供え物として、もとはモチを二段重ねにして進ぜたものだったが、現在はしていない。

また、ここでは八丁ジメは行われない。

（藤井弘美）

阿久津組入用帳

阿久津組会所連名帳

阿久津組　念仏を唱える

大塚田　念仏を唱える

## 上大島の天道念仏

**名　称**　天道念仏

**由来伝承**　お天道様に感謝する日、または日照祈願といわれる。いつ頃から行われたかは不明。

**実施期日**　三月十五日、七月十五日の年二回行う。もとは日の出から日没まで（朝四時半頃から夜七時頃まで）行われていたが、終戦後は、朝九時頃に集まり、皆で食事を食べて午後三時頃には終了するように変わり、現在もこのように行われている。

**実施場所**　前橋市上大島町　町内にある観音堂の堂内

**組　織**　以前は町内の七十歳過ぎの年寄り有志が一四、五人で行っていた。その中から一人親方が決まり、親方を中心に行ったが、十五年程前に観音親交会ができてからは、観音堂にかかわる行事は全てこの組織が取り行っている。親交会には、老人会加入者のうち七十歳を過ぎた年長の者が入る。現在八〇名近くの加入者があるが、実際参加するのは五、六〇名前後である。

**実施内容**　当日の朝、観音堂の庭に六㍍程の幟旗を二本立てる。観音堂の座敷に南に向けて祭壇を作り、中央に幣束を立てて灯明・線香・花・果物・野菜等が供えられる。

　祭壇の前に大小二つの鉦、太鼓が置かれ、三人一組でこれらを同時に早いテンポで打ち鳴らす。唱え言は特にない。打ち出す前にまず線香を二本立てる。以前は線香が燃え尽きるごとに交代していたが、現在は五分の砂時計を用意してそれを合図に交代して、参加者全員が祭壇の前に座って打つ。念仏の間は線香は決して絶やさないようにする。また、鉦・太鼓も途切れることなく打ち鳴らすため、食事も交代でとる。

　戦前までは、三月の天道念仏の日にお札を刷り。町内の人達が家族の人数分のお金（一人あたり一銭くらい）を持って来て、このお札一枚と人数分の木の葉の形をした菓子をもらって帰ったものだったが、現在は行われていない。お札も節分の時に配るのみである。

**その他**　以前は、七月の天道念仏の日にはムギダチをした。醤油・味噌など麦を使ったものは一切食べず、モチを搗いて食べた。そうすると病気にならないといったものだった。また、人によっては三月にムギダチをして、七月にコメダチをしたという話もあった。

（藤井弘美）

天道念仏祭壇（南向きに作られる）

3人で鉦、太鼓を打ち鳴らす

## 上大島の十六日念仏

**名　称**　十六日念仏・オネンブツ

**由来伝承**　いつ頃から始まったかは不明。観音様を信仰していると安らかに最期が迎えられる、最期は観音様にすがるといわれる。

**実施期日**　年十二回、毎月十六日に行う。午後一時頃から二時頃まで。

**実施場所**　前橋市上大島町　町内にある観音堂の座敷で行われる。

**組　織**　観音親交会が行っている。この親交会には、老人会加入者のうち年長の者が入っている。十五年程前に親交会ができるまでは、町内の老人の有志が行っていた。現在は観音堂に係る行事はすべて親交会が中心で行われ、年会費一〇〇〇円で運営されている。

**実施内容**　観音堂内部中央に百体観音が祀られており、その前面に十三仏の掛軸をかけて祭壇をつくる。十三仏の掛軸の左右には秩父三十四番、坂東三十三番、西国三十三番の掛軸が並んでかけられる。

　祭壇には、灯

声を合わせて念仏を唱える

祭壇

明・花・線香を供え、祭壇の右に大太鼓、左に小太鼓、中央の祭壇前に鉦が置かれる。

午後一時前から集まり始め、各自お参りをして、当番がいれるお茶を飲みながら開始を待つ。お茶入れ当番は、その年の役員の女の人が偶数月、奇数月交代で行う。

「そろそろ始めましょう」という会長の声で念仏が始まる。鉦一名、太鼓二名、線香を立てる係一名が前に座って行うが、この線香を立てる係が唱えた念仏の回数を数える。

まず線香を一本立て、鉦・太鼓に合わせて全員で念仏を唱える。一項目唱え終わるごとに線香を立てていく。鉦を叩く人のことをドートリ（音頭取り）という。現在は会長が鉦の係をすることになっている。鉦をつくきまりは特にないが、唱えやすいように心がけているという。鉦が中心で太鼓はこれに合わせて打つ。

念仏は全部で十三項目あり、一項目五回ずつ唱える。最後に般若心経を全員で唱えて、終わる。なお、最後に般若心経を唱えるようになったのは、十数年前からのことで、それ以前はしなかった。

念仏が終了すると再びお茶をもらって飲んで解散となる。

古老によると、六十数年前に、念仏を唱える人達のまん中で踊りを踊っていたのを見た事があるそうだが、詳細は不明。

（藤井弘美）

## 大友町の百万遍

**名　称**　百万遍

**由来伝承**　疫病退散・悪魔払いの意味で行われる。雨乞い・虫封じの意味もある。

この地で始まったのは、近世初頭と伝えられるが詳細は不明。長見寺境内に、寛保二年（一七四二）の銘のある供養塔があるが、これはこの行事をしなかったために村内に疫病が流行り、死者が出たことから建立されたものと伝えられる。また、大正十五年にも、やはり実施できなかったため赤痢が流行り、数名の死者が出たという。それ以後は途絶えることなく続けられている。

**実施期日**　かつては毎年七月十七日に行われていたが、より多くの人が参加できるようにと、現在は七月十七日に最も近い日曜日に実施されている。

**実施場所**　前橋市大友町　長尾山長見寺境内で祈祷を行った後、大友神社に参り、そのまま町内を回って辻々で百万遍を唱える。（順路は地図参照）

**組　織**　百万遍保存会（会長長尾昭司氏）によって行われている。会員は町内の成人七五名程である。保存会ができたのは、二十五年程前である。それ以前は、三十五歳までの青年会が中心となった時期もあったが、参加者が減り、一時自治会が主体で行ったこともあった。しかし行事を守るためには、しっかりした組織がほしいということで保存会をつくることになった。

**実施内容**　長見寺境内にぐるりと注連縄をめぐらす。これには三六枚の幣束が下げられている。新しい竹を一五本用意してお札をくくりつけ、二本が供養塔の両隣りに、残り一三本が八丁ジメとして地区の境に立てられる。

昼頃、太鼓・鉦を打ち鳴らし、行事の始まりのフレを出す。町内の人達は金一封を持ってやって来て、「光明真言十千万遍」のお札とネギ一束（三本）をもらって帰る。お札はアクマッパライ（疫神除け）なので、家の中に貼っておく。

保存会の人達は、揃いのハッピ姿で集まって来る。二時頃、竹や祭壇の準備が整うとまず半鐘が打ち鳴らされる。供養塔の前の祭壇に集まり、住職がホラ貝を吹いて祈祷が始まる。祈祷が終わるといよいよ数珠を回すわけだが、数珠を持つ人はハッピを脱ぎ上半身裸で、白足袋姿となる。もとは裸足に褌一丁であったという。始める前の浄めとして酒が出される。生ネギに味噌をつけてそのままかじり、酒を飲む。お互いに酒を吹き掛け合ったり数珠に吹き掛けたりして浄める。桐製の巨大な数珠を持ち、大きな輪になってしゃがんで、太鼓・鉦に合わせて「ナンマイダー、ナンマイダー」と大声で唱えながら右回りに数珠を回していく。太鼓が止まると力強く数珠の引っ張り合いをし、頭の上にかかげる。その数珠の下を見物の人たちがくぐる。これを数回繰り返すのである。この引っ張り合いで勢いあまって転んだり倒れたりするものも出る。

境内での数珠回しが終わると、提灯を先頭に、太鼓・鉦を担ぎ数珠を手に持って、ワッショイワッショイの掛け声とともに走り出していく。まず初めに大友神社に入り参拝して数珠を回す。その後辻々で何度も数珠回しをして、ぐるっと町内を走って一周するのだが、辻々には数珠の下をくぐろうと町内の人々が待ち構えている。

最後に西川（小川原関）の所を通り、長見寺へ戻る

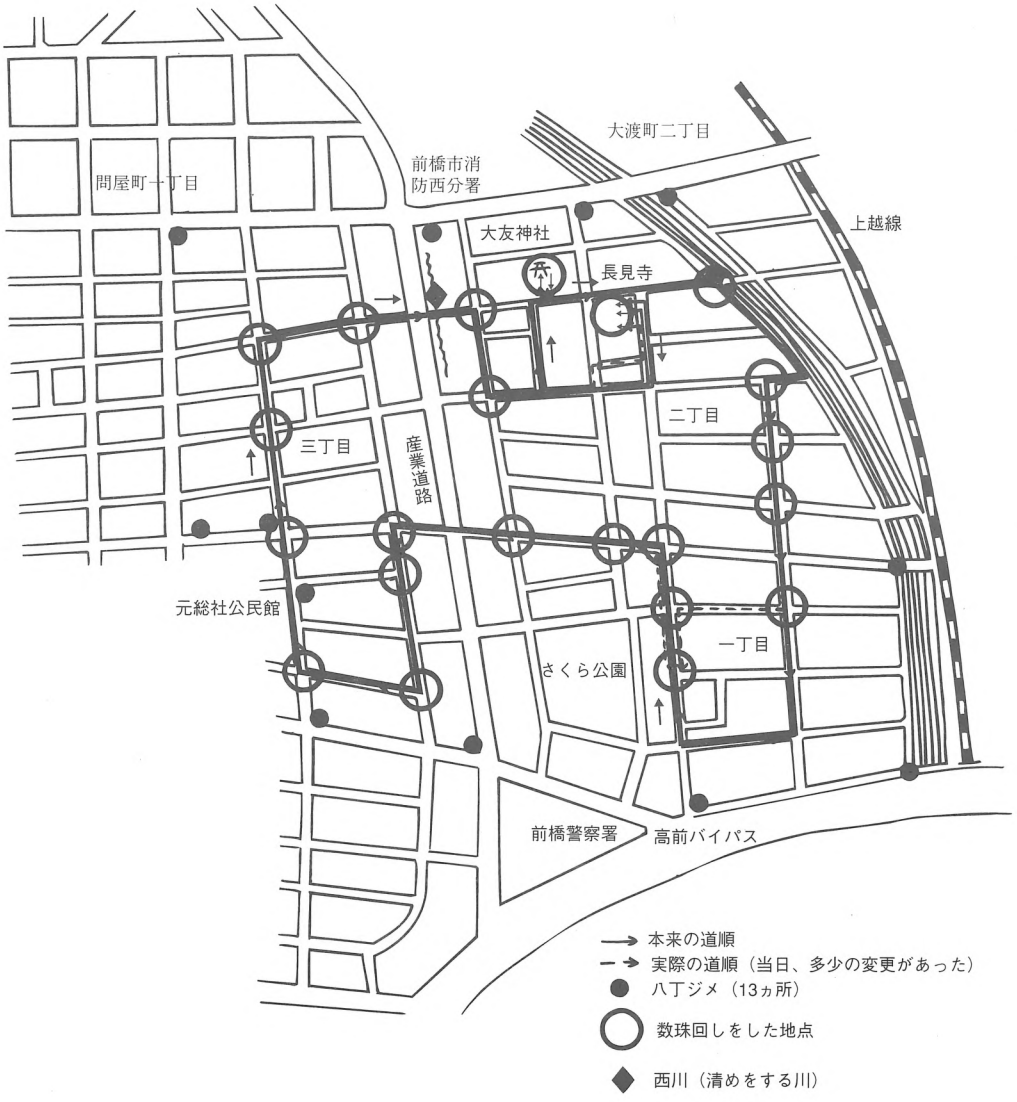
生ネギに味噌をつけかじりながら酒をのむ

鉦・太鼓に合わせて大数珠を回す

が、もとはこの西川で、すべての道具を投げ入れ、人々も飛び込んで浄めたものだった。また初めて参加した人は川に投げ込まれたなどという話もある。長見寺境内でもう一度数珠を回して終了となる。現在はこの後直会をしている。

なお、八丁ジメの竹は、車の荷台に積んで、百万遍の数珠が町内に出て行くのと同時に出発し、地区の境一三ヵ所に立てられる。この仕事は自治会の人たちの担当である。

（藤井弘美）




大友町百万遍まつり町内巡行経路図（H11.7/18PM2：00～5：00）

## 海老瀬の十九夜講

**名　称**　十九夜様

**由来伝承**　コウチ内の女性たちが女人講を組織し、安産、子育てなどの祈願を行う。守護本尊は如意輪観音。十九日を祭りの日としていることから、十九夜様と呼ばれ、念仏を唱えて祈願する。地域により、毎月行う地区や年に数回行う地区などがある。

**実施期日**　三月十九日と十一月十九日

**実施場所**　邑楽郡板倉町大字海老瀬字頼母子（県内では東毛地域で広く実施、松井田町周辺にもあり）

**組　織**　十九夜講

**実施内容**　板倉町海老瀬地区の頼母子会館（薬師堂隣り）では、三月と十一月の十九日（現在は十九日に近い日曜日）に十九夜講を行っている。この日、コウチ内の女性たちが頼母子会館に集まる。このうち、若い嫁たちが十九夜講を組織し、嫁が十九夜講に入った年配の姑たちはオハンデと呼ばれる。現在、集まる女性は三〇人くらいで、そのうちオハンデは一〇人くらいである。もともとオハンデは念仏講のことで、十九日以前の十六夜の時に行い、十九夜講とは別々に行っていたが、今は一緒に行っている。地区の女性は、結婚して嫁に来て、それまで十九夜講に入っていた自分の家の姑がオハンデの仲間に入ると、十九夜講の仲間入りができる。

頼母子の十九夜講

当日は、頼母子会館の中に十九夜様（如意輪観音）の掛軸を掛け、十九夜講とオハンデの人たちが集まって昼食をともにする。オハンデは昼間だけで、夕方六時頃からは十九夜講の女性たちが集まって安産祈願や無事お産が済んだ家ではそのお礼をする。祈願をするのはおもに里親や姑たちで、子供が生まれる娘のお産が無事済むように祈る。その間、掛軸の前に祈願をする人数分のロウソクを立てて火を灯し、線香を焚く。祈願が終わると、燃え残りのロウソクとお供えしたオサゴ（米）を祈願した里親や姑が持ち帰る。持ち帰ったロウソクは、娘のお産の時に火を灯すと、その火が消えないうちに無事お産が済むという。持ち帰るロウソクが短ければ短いほど、お産が軽く済むというので、燃え残りのロウソクは短いほうが喜ばれる。当番の人は早めにロウソクに火を灯してできるだけ短くなるようにしておく。祈願をしてもらう家では、あらかじめ当番の人に連絡しておく。戦前は十九夜念仏をあげていたが、現在では念仏はあげていない。

十九夜講の当番は四名で、一年交替となる。当番の人は十時半ころ集まると昼食を作り、みんなに振舞う。昔は五目ごはんを作ったが、今は寿司が多く、それを十九夜様にお供えする。夕方の安産祈願が終わると、現在は別のところで食事をする。

なお、オハンデという呼び方は板倉町海老瀬の峰地区でも使われているが、十九夜講で若い嫁たちが集まることをオハンデ（十九夜オハンデ）と言い、姑になるとオハンデから抜ける。オハンデの日は若い嫁たちが家事や育児から解放される日で、地区の観音堂（現在は集会所）に集まり、「嫁の遊び日」として一日楽しんだ。この地区では念仏は行わず、十九夜様の掛軸を掛け、その前に各人がロウソクを持ち寄り、その前に立てた。当番（サシバン）は三人ずつ交替で一年間行う。また、当番の人は研いだ生米一合を十九夜様に供え、その後、半紙に少しずつ分けて各人に配り、翌朝その米を混ぜてご飯を炊いた。

この他、館林市上三林町では毎月十九日に地区内の十九夜堂で念仏を行っている。ここでは、三人の年配の女性が念仏をあげている。安産祈願に来る女性は、ロウソクをもらう他に、腹帯を借りて帰る。この時、男児が欲しい時は白の腹帯を、女児が欲しい時は赤の腹帯を借りて帰り、それを腹に巻く。無事にお産が済むと、借りた腹帯を倍にして返し、お礼参りをする。

また、板倉町除川地区では、毎年三月上旬に十九夜講を行い、ここでも祈願に訪れた人に白や赤の鉢巻を渡し、持ち帰った人はそれを腹帯に縫い付ける。無事に出産が終わると翌年の十九夜様の時に新しい鉢巻を返しお礼をする。

十九夜講は女性たちが家事から解放される日でもあり、昔はこの日を心待ちにしている女性が多かった。県内でも東毛地域を中心に十九夜講は江戸時代から盛んに行われ、各地に十九夜塔が多く残されている。板倉町海老瀬の東源寺墓地には、万延元年（一八六〇）に建立された高さ約二七〇㌢の十九夜塔がある。この塔には、「上野国邑楽郡佐貫庄海老瀬村／日影東西腹太小橋／女人講中九十九人」とあり、「東腹太源右衛門女三人／要蔵女二人（下略）」など四地区の女性の人数が家ごとに記され、江戸時代から十九夜講が盛んだったことを知ることができる。

東源寺墓地の十九夜塔

（岡屋紀子）

## 菱町の地蔵盆百万遍念仏

**名　称**　地蔵さま。祖父入（じがいり）地区の地蔵盆百万遍念仏。〔地蔵さま〕もしくは〔甘い団子〕と呼ばれる伝統行事であったが、県教委の「民俗芸能調査」で、内容と実態から表記の名称とさせていただき、文化財指定に際し、桐生市教委で、慣例から地域名を冠した。

**由来伝承**　盆に帰らずとも、決まって里帰りする肉親と家族が、地域の人達とも仲良く達者で暮らしている情況を先祖に観ていただく。

**実施時期**　八月二十四日、午後六時半より八時まで。

**実施場所**　桐生市菱町祖父入地区山中の共同墓地。

**組　織**　地蔵尊北泉会。およびゆかりの人達。

**実施内容**　実施日は地蔵盆の日で盆行事最終日にあたる。この日の夕闇迫るころ、山中の共同墓地には無数の裸ローソクが灯され、心地よい沢風が仄かに揺らす幽玄な趣のなか、達者で幸せな暮らしを満喫している姿を、先祖に観て戴く目的で、桐材の超大型母珠を多用した手作りで素朴な、百万遍念珠を繰りながら、鉦太鼓が乾いたリズムを刻み、「ナムアミダンブツナムアミダァー　アーマイダンゴ　ショッパイダンゴ　ソレソレソォレェッ」と、囃したてながらの陽気で豪快な数珠繰りである。

浄土往生を期待して、南無阿弥陀仏の名号六字を称念する念仏も、より確かな功徳を求めて遍数を競い、次第に呪文化して百万遍念仏となり、呪術的要素が色濃い百万遍念珠が伴うにおよんで、悪疫退散を願う民俗的伝統行事に発展した。

地蔵盆百万遍念仏は、江戸後期から始まったとされ、一般的な悪疫退散の要素は痕跡も認められず、純真な先祖供養とともに、家族肉親が日々平穏に、隣近所とも仲良く暮らしている状況を、ご先祖に観ていただくことを唯一の目的としている。

悪疫退散は究極的には自己救済である。祖父入地区では、家族肉親の労りと絆や、近隣住民どうしの思いやりと、地域愛や相互扶助の再認識が主であり、今日的で高尚な目的は他に類例がない希有な習俗であり、

誇りをもって、次代に継承したい貴重な伝統行事である。

同じ目的意識を持つ地域の老若男女が、こぞっての参加で得られることは、人として最も大切な思いやりと労り。尊び敬う心までもが、教えごとではなく、幼少期から実感できることが貴重である。

各年齢層に応じての役割分担と、団体行動に於ける果たすべき各自の責任、地域社会のルールまでもが自然に理解・納得できる年に一度の貴重な「場」は、心豊かな地域作りに直結し、先祖を介した伝統行事にセットで構成されている。

（平塚貞作）

地蔵盆百万遍念仏

## 沖之郷町のナイド（百万遍）

**名　称**　ナイド

**由来伝承**　この行事の開始の年代については不明である。地区の人の伝承によれば、むかし伝染病がはやって困ったことがあったので、疫病除けのため、また体が丈夫になるようにというのではじめた行事であるという。

この行事は、沖之郷の四つのコウチ（小字）ごとに行われている。このうち北ゴウチには葬式のときとナイドのときに使用する念仏鉦がある。それには次のような銘がある。

念仏講中　上州山田郡北沖之郷
干時正徳二壬辰年十一月吉日
江戸芝　木村吉右衛門作

また、東南ゴウチでナイドのときに使用している数珠の大玉（やく玉）のひとつに、明治十五年七月四日とある。

この行事の由来を知る資料である。

**実施期日**　七月の祇園勘定の日
**実施場所**　太田市沖之郷町（コウチごと）
**組　織**　沖之郷町山車保存会　同はやし保存会
**実施内容**　沖之郷では四つの組に分けてナイドを実施している。各コウチごとにそれぞれ年番（世話番）を選んで、年番を中心にこの行事を運営している。かつては、この行事は七月二十四日ときまっていた。この日は祇園後の道普請と祇園勘定を行う日であり、このあとに、ナイドを行っていた。

祇園については、もとの形は七月十八日からの準備等をへて、二十一日に行い、二十二日の後始末、休みのあと二十四日の午前中の道普請、午後の祇園勘定のあとに、各コウチごとのナイドとなる。現在はこの形が若干省略されて、七月二十三日に祇園勘定とナイドの実施という形になっている。

ナイドの形はコウチごとに若干のちがいがある。この行事の中心は以前は若衆であったが、現在は子供が中心の行事となっている。

はじめはコウチの広場で数珠をまわす（この唱えごとが「ナイド」である）。このあとコウチ内の各戸をまわる。このとき、大人が鉦と太鼓をたたきながら行列の先頭に立つ。

各家の庭で数珠をひっぱりあう。大きなやく玉がまわってくると、それをいただき、頭などにつけて、無病息災を祈る。各家庭ではおさい銭をあげてくれる。また、夏のことでナイドがまわってくると、水をかけた。

ナイドが終わるとこどもたちは川に入って水をあびた。おさい銭は行事のあと、子供たちに分け与えている。

（井田安雄）

ナイドの行列

数珠まわし

## 二五　オシシサマ

# 上福島のすみつけ祭り

**名　称**　すみつけ祭り

**由来伝承**　この祭りの起こりについて、村人たちはつぎのような話を伝えている。

今から三百年余り前のこと。上福島に悪疫が流行した。その時、武州騎西（埼玉県北埼玉郡騎西町）の玉敷神社から、御神体を借り受けて祭りをしたところ悪疫が鎮まったことから、以後つづけられてきたという。また、悪疫流行の時、ある名家の下女が鍋をさげてころび、顔にべっとりと鍋墨がついた。だが、その下女だけが病気にかからなかった。これに驚いた村人たちは、鍋墨に悪疫を近づけぬ力があることを信じ「墨つけ」が行われるようになったと伝えられている。また、この祭りは「悪魔っぱらい」ともいわれていたという。

以前の祭日は二月十五日で、御神体を安置する宿（やど）も、集落内各戸からの申し込みにより決めていた。当時は申込者が多く、一代に一回、宿が廻ってくればよいほうであったという。

**実施期日**　二月二十一日

**実施場所**　佐波郡玉村町大字上福島（祭典本部は同大字の研修所）

**組　織**　すみつけ祭り実行委員会（地元の「青友会」「子供会」関係者等によって組織）

**実施内容**　当日の早朝、祭典役員が埼玉県騎西町の玉敷神社に出向き、御神体、オシシ（御神面）、オサゴ櫃、御幣束などを借り受けてきて、祭典本部の祭壇に祀る（写真参照）。なお、御神体箱に納められた御神体は秘物とされ、まだ誰も見たことがないという。また、この祭りは神職が関与することなく、村人だけで行われることに特徴がある。

まず、村巡りの前に、大根を輪切りにした切口に、墨を塗りつけたものをたくさん用意する。墨は消炭の粉を水に溶いたものである。以前この墨は、鍋底や釜底についた墨を使ったが、その後は木炭や練炭の墨となり、現在では消炭を利用するようになったとのことである。

午前十時。まず、お互いの顔に墨をつけ合った係員たちは、行列を組み、各戸巡りが開始される。行列は太鼓を先頭に、シシ面をかぶり、ボンテンをかざした先達の人、次に御神体を奉持した人、つぎにオサゴ櫃を担いだ人や手に手に墨つけの大根を持った人たちがつづき、さらに数十人の子供たちがこれに合流する。子供たちも手に手に墨つけの大根を持ち、お互いの顔に墨をつけ合っての参列である。

この各戸巡りには順路があり、まず集落の一番下（東）の家からはじまり、次第に上へと向かって行く。順路の家の門口にくると子供たちは一斉に歓声をあげながら、屋敷内に走り込む。一方、役員の大人たちは「おめでとうございます」と声を掛け、御神体の入った箱を縁側に出迎えた家人の頭上にかざして無病息災を祈念する。家人はこれに対し、枡に入れたオサゴ（米）またはお賽銭の包みを供え、大根の墨を頬につけてもらう。

こうして昼食休み後も廻りつづけ、集落内の約二百戸余りを巡って、午後四時過ぎに、各戸巡りは終了した。

一同が祭典本部（上福島研修所）に帰ると、玉敷神社から借り受けた御神体等はその日のうちに当社に返還した。つまり、上福島地内に泊めてはいけない禁忌があったのである。その理由は、当地区民は玉村八幡宮の氏子で、他神を泊めることを

各戸巡りの巡行

シシ面（上）と御神体箱

頬に墨をつける

各戸巡り　御神体の入った箱を家人の頭上に

遠慮してのことという。今は玉敷神社まで自動車を使って日帰りしているが、鉄道使用の頃は、祭りの前夜、玉村町か福島に御神体を泊め、翌朝に上福島に運び入れたという。

さらに、祭りに伴う禁忌として各戸巡りの時、出産のあった家や死者の出た家をボクといって、その家に行列が侵入することを避けていた。また、その家は自家の門口に縄を張って祭りに参加することを遠慮した。ボクの期間は、死者の場合は三十五日か四十九日、出産はウブヤ（産屋）明けまでといわれている。

なお、以前の各戸巡りは、門口から「うおー」と呼び声をあげながら、土足のままで家の中を走りぬけたという。また、墨つけは路上の通行人はもちろん、バスまでも止めて中に乗り込み、乗客の顔に墨を塗りたくったというが、今はこうしたことは行われてはいない。

各戸巡りの子供たち

太鼓持ち

二月十二日

翌十二日は、研修所内で直会が行われ、この時に祭り勘定や祭典委員長と副委員長の改選と引継ぎがある。

当上福島地区は現在二八班の隣保班から成っていて、実行委員長と副委員長は、この日に隣保班長同士の互選によって決められる。任期は一年である。

また、この祭りの費用は、各戸からの負担金（平等割り）と勧進（村巡り）による収入や寄付金などによって賄われているが、年毎に全額を使用し、残金は零として引き継ぐのを恒例としている。これを「お祭り勘定」と呼んでいた。したがって、会計簿等の記録簿も引き継がれていないという。

また、祭壇に有志から供えられた重ね餅は、糯米三升から成る大きなもので、今回は八重ねほど奉納された。この重ね餅は十二日に上部を奉納者に返し、下部は細分して半紙に包み、「おみごく」として各戸に配布するのを恒例にしている。

類似例・その他

尾島町世良田八坂神社には、疫神除けの獅子頭が祀られている。この獅子は新年を迎えると大字世良田の九町内の各世話役によって、各町内ごとに各戸巡りをしている。家人は獅子頭を納めた木箱（長持）の下をくぐり抜ける。こうすると、この年は無病息災でいられると信じられていた。現在では略式化し、各町内の会議所などに獅子頭を安置し、村人たちの参詣を受ける方式に変わってきた。

墨をつけ合う子供たち

また、この獅子頭は戦前までは多くの他郡市からも借り受けにきた。当社の伝承によると、近年まで借り受けにきたのは、前橋、太田、伊勢崎、群馬郡内、埼玉の狭山、本庄などのうち、特に農村部の地区が多かったという。この場合は上福島のように「墨つけ」は伴っていない。

一方、墨つけを伴う例として、碓氷郡松井田町小柏では、一月十四日の道祖神焼きのあと、しばらく談笑しているうちに、若者と娘が追いつ追われつ、焼け残りの消炭を頬につけ合って興じ合ったという。また同町狐萱では同日に脇差（ぬるで）のこげた炭を手につけて、新しい嫁さんの顔に塗りつける慣習があった。前橋市国府や群馬町あたりでも、よほど前に、これに近いことが行われていたという。このように墨をつけると風邪をひかないなどと伝えている。墨には悪疫退散の呪力を持つものという俗信から生じている慣習と思われる。また獅子も一般に悪魔を退散させ、五穀の豊穣をもたらす強大な力を持つものと、古くから信じられてきた。上福島の場合は、墨と獅子との両者の組み合わせから形成されている祭りであり、特に墨つけが強調されていることに特徴がある。

（金子緯一郎）

## 大戸（おおど）の獅子舞

**名　称**　畔宇（くろ）治神社の獅子舞

**由来伝承**　獅子舞がいつ頃より始められたかは記録がはっきりしないが、文政四年（一八二一）の文書に「畔宇治大明神例年四月八日祭禮に獅子舞奉納」と記され、さらに「前々より」の一言が付記されている。もともと畔宇治神社で獅子諸道具があったかは不明であるが、現在は大戸地内の古賀良神社区域の上大戸で管理しているものを借用して行う。明治の神社合併によ

って獅子舞を秋の十一月十七日の畔宇治神社、十八日古賀良神社で奉納するようになったともいわれる。

口伝によれば、群馬郡榛名町斉渡の『北野神社奉納獅子舞』天明年間（一七八一～八八）の項に、「信州（長野県）より吾妻郡を経て群馬郡に伝わる。」このため古くから斉渡と吾妻郡の泉沢や古賀良神社の獅子組と舞の交流があったといわれている。

古賀良神社で獅子舞をする人は、村に居住する長男、または次男を主体として行い、舞を全部覚えるのに少なくとも三年、ササラを三年して獅子になるといわれ、指導者と振子は共に一体となって汗を流し真剣そのものであった。社前において「おおやれい」まで奉納していたが、後継者難という難題に直面して、遂に伝統ある獅子舞が中止せざるを得なくなってしまった。

其の後、「郷土芸能をたやさないように！祖先の遺産を大切にしよう！」と、浦野芳夫、黒岩進氏等が中心となって広く大戸区全域に呼びかけて、昭和六十二年に獅子舞保存会が結成され、実に十二年振りに復活をみたのである。

そして会則には、本会は大戸区民相互の協力により獅子舞を保存し、畔宇治神社に奉納する。大戸区の居住する畔宇治神社の氏子をもって組織する。

会　長　浦野芳夫
副会長　南保治郎
会　計　金子博一
運営委員　大戸地区より各一名づつ、任期は一～二年で参加する。

本会はその目的を達成するために次のことを行う。
①獅子舞をする人の選出・養成
②獅子舞の練習
③獅子舞の奉納
④獅子舞の維持・管理

**実施期日**　四月十一日・十一月十七日
**実施場所**　吾妻郡吾妻町大戸　畔宇治神社々前
**組　織**　大戸獅子舞保存会
**実施内容**　①面、持ち物　獅子頭は平成九年に新調され、上大戸区（古賀良神社）の財産であるので保存会が借用し、獅子舞を神社に奉納する。保管は上大戸公民館である。獅子頭三、狐面一、花笠一、カンカチ一、ササラ一、獅子舞の主役は振り子であって、男子青年と小・中学生、②振り子の服装　獅子の服装は上、下に分かれ、上体は一重の布でつくった筒袖を着る。下はタッツケ袴をはしから一部に密着する。手には必ず手甲をつけて二本の撥を持つ。野外で舞うために足に足袋をはき、わらじをはく。頭（かしら）の下顎に一枚の布を垂れ下げる。腰太鼓を一個腰に装着する。振り子はこの太鼓をうちならしながら踊るのである。③演出の曲目　十二年振りに復活をみせた獅子舞であるが予想外に子ども達の希望者が多く集まり、指導にあたる顧問と獅子舞研究部員が子ども達と真剣に取りくみ、驚くべき短期間に舞技を習得した。そして祭典に獅子舞が披露できるまでに至り、伝承態勢が維持されたことは喜びに堪えない。

こども組の舞

振り子の準備

平成二年五月の「広報あがつま」に子ども達の獅子舞について記している。

「大戸の畔宇治神社では、四月十一日の春の祭典で、獅子舞が行われ二〇〇人の人出で賑わいました。この獅子舞は、大戸獅子舞保存会が行っているもので、十二年ぶりに昭和六十二年から復活しました。祭りの当日は旧大戸小学校の庭で子供たちにより獅子舞が行われ、その後、神社において大勢の参拝者が見守る中、保存会の人たちにより舞が披露されました。」

舞はこども獅子三組と大人獅子一組からなり、こども獅子の低学年の部は、体格的に無理なこともあって、獅子頭は身につけず、祭りのハッピに面と小太鼓といった姿で舞う。

祭典当日　十二時　大戸公民館の前で、「宮振り」を舞って出発、「道行き」という行進隊形で信州・草津街道大戸宿を経て神社へ向かう。アンドン、カンカチ、前獅子、中獅子、後獅子、ササラ、そしてこども組と行列を組む。帰る時は「振込み」を舞い全部が終了する。

奉納する場所　宿の旧道より文政九年（一八二六）建立の立派な灯籠（町指定重要文化財）を左右に見て、石鳥居、石段を経て見城川沿いにある社に向かう。「五穀豊穣・家内安全」と書かれた大きな万灯が立ち、社

大人組の舞い

殿の広場で舞う。本殿西側に神楽殿がある。かって神楽が奉納されていた。舞は全部で一七あり、社殿を一周して社殿の広場で、こども組、ついで大人組が舞を奉納する。

前獅子（黒獅子）
中獅子（赤獅子で宝珠）
後獅子（黒獅子）
狐　カンカチ　ちゃんちゃんこにタッツケ袴
花笠　ササラ　頭に顔をすっぽり覆う花笠に赤布を垂らす。

舞座
①チャーリャウトウロウ――神前拝礼獅子
※②チーロリ
③ヒキヤ（ヒーリャリトヒャリ）
④振込み
⑤飛違い
⑥チャーリャウト
※⑦ヒキヤ
⑧宮振り
⑨岡崎
※⑩デンジ
⑪トヒャリ
⑫どじょう猫
⑬担ぎ（俵担ぎ）
⑭ヒーヒ
⑮家敷返り
⑯左ねじり
⑰おおやれい

※印は歌のでる舞
○印はこども獅子が舞える獅子

「おおやれい」は「雌獅子隠し」とよばれる。演目は、二頭の雄が一頭の雌を奪い合う恋愛劇で長時間舞う。獅子舞は無言劇であるから、すべて囃子方によって進行してゆき、全体をリードする。揃いの祭りハッピ姿の笛方が社前に並ぶ。笛の音色は神社の森の中から静かな哀調で郷愁をさそい、農民が切実に豊作を願う姿を偲ばせる曲であろう。舞の中で唄が出るのは、チーロリ・ヒキヤ・デンジの三つである。

**神歌**

一　この宮は　この宮は
　飛弾の匠が建てたげな
　楔一つで四方固めた
　楔一つで四方固めた

二　獅子の子は　獅子の子は
　京で生まれて伊勢育ち
　腰にさしたは伊勢のお払い
　腰にさしたは伊勢のお払い

三　ささらをば　ささらをば
　良くも悪しくもお褒めあれ
　今年はじめて習いてそろ
　今年はじめて習いてそろ

四　やまがらは　やまがらは
　山がおいとて里の出て
　この社で羽を休めた
　この社で羽を休めた

五　あの山で　あの山で
　けんけほろりと鳴く鳥は
　本の殿御の籠の飼い鳥
　本の殿御の籠の飼い鳥

六　神の社で　獅子振れば
　神も喜ぶ氏子繁盛と
　神も喜ぶ氏子繁盛と

七　白鷺は　白鷺は
　海のとなかに巣をかけて
　波にゆられてパッとたちそろ
　波にゆられてパッとたちそろ

最終歌
　雨が降るげで　雲が立つ
　いざや若衆　立ちや戻らん
　いざや若衆　立ちや戻らん

大人組の舞

（丸山不二夫）

## 二六　初午の行事

# 高山村の稲荷祭り

節分の過ぎた始めての午の日に稲荷様のお祭りをしたので「初午」といい稲荷祭りであったが、吾妻郡全体として二月十一日建国記念日（太平洋戦争以前は紀元節）に行われるようになったが、いつの頃にそのようになったかは詳かにすることはできなかった。

吾妻郡高山村には大字が中山と尻高で、その中に小集落が中山に五、尻高に五あるが、その中に一つの集落で祀っている稲荷は六、集落の中が、いくつかの集団になって祀っている稲荷は七で、一三の稲荷神社がある。そこでその個々のものについて記すこととする。

**①名　称**　ましも坂の稲荷様（原集落）

江戸時代に開かれた三国街道の中山峠にさしかかる三差路の道わきに在り、集落の入口で、大正六年（一九一七）国鉄上越線の開通以前は人通りも多く、参詣人も多かったといわれる。いつ勧請されたかはわかっていない。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　ましも坂稲荷神社境内

**組　織**　この集落の戸数は一二〇戸で、若者（二十歳～三十歳）が組織する「同盟会」の幹事六名が村の祭りや行事の世話をし運営にあたっている。幹事長（飯塚紀之）が責任者となってこの祭りの世話をする。

ましも坂の稲荷様

**実施内容**　村中から、米、小豆を集める。金を代わりに出す家もある。平等割りの金は一戸五〇〇円

また十日までには「お白狐」と呼ぶ小さな「きつね」のお姿とお札を用意する。幹事は十一日の朝早く集めた米、小豆で「おこわ」（赤飯）をつくりそれをおにぎりにする。

朝八時頃から参拝がはじまる。参拝する人には、お札、おにぎりをふるまう。

お白狐を一体借りて行き五穀豊穣（むかしは養蚕も含めて）を祈願するのである。願いがかなえられると翌年には二倍（二体）にしてお返しするならわしである。

**②名　称**　公達（きんたつ）稲荷（本宿集落上組）

**由来伝承**　享保十三年（一七二八）の石祀があり、その頃の創祀ではないかといわれる。蔵造りの立派なサヤ宮の中に木造のお宮が安置され、その中に安永三年（一七七四）宿甲子未九月節壬午之吉安座、正一位稲荷大明神安座、正四位下行筑後守〇宿称為勝と書かれた御神体があり、この時勧請し、お宮を造営したものと思われる。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　十二平公達稲荷

**組　織**　お祀りしている範囲は本宿のうち、十二平、日向、権現の四五戸である。隣組の班長が集まり、責任者を互選できめ、七人で祭りの世話をする。責任者、大木稔、世話人、平形誠一、大木喜三夫、大木一司、倉田伴次郎、都筑邦弘、林荘三郎である。

**実施内容**　十日、世話人により、お札づくり、燈籠づくり、菓子、みかんなどの用意をする。

十一日は、世話人が集まり、神主（林安弘）をたのみ、祝詞奏上、玉串奉奠の神事を行う。参詣に来た人に、供物の菓子、みかんなどをやる。むかしは、赤飯、米の粉のやきもち、繭玉、また、参詣者がもってきた赤飯などをやったこともある。お札は、世話人が毎戸に配る。費用は一戸五〇〇円以上の金を集めた金でまかなわれる。

世話人は夕刻責任者の家で直会をする。

**③名　称**　弥惣左衛門稲荷（本宿集落下組）

**由来伝承**　創祀の年代はわからないが、大正四年（一九一五）の屋根替えの寄附芳名板に、近隣集落までの大勢の名前が書かれ、信仰の広さがうかがえる。祠の中には木像が祀られている。農業守護の神で五穀豊穣、養蚕守護の祈願をした神様である。

弥惣左衛門稲荷

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　弥惣左衛門稲荷神社境内

**組　織**　本宿集落の下組一一戸でお祀りしている。毎年交替の当番制で祭りが行われる。代表者は、倉田七百八、世話人当番は宮内之久。

**実施内容**　世話人当番は、十一日早朝に赤飯をふかしまゆ玉をつくって供え、のぼりを立てる。参詣者に赤飯まゆ玉を供物としてさしあげる。

**④名　称**　清水稲荷（五領集落）

**由来伝承**　清水稲荷のお宮は、元文五庚申（一七四〇）真庭村、安兵衛、下川田村、半兵衛、同、宮甚事、三人にて勤め四月中旬御遷宮された。

費用は八両二分であった。この文書からこの年に勧請されたものと思われる。御神体は、石造の狐の像一体で養蚕守護の神様である。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　清水稲荷神社境内

**組　織**　五領集落の十六歳から四十歳までの男子で

組織する。「共和会」の会長（後藤一）が中心となり、集落の祭り、行事の世話をしている。最近集落全体で行う公民館活動もさかんになってきたので、共和会と公民館と共同でまつりを推進するようになった。

**実施内容**　十日の夜に公民館で「お祓い」づくりをする。十一日、神主（林安弘）をたのみ、祝詞奏上、玉串奉奠などの神事を世話人参列の上行ってから、参詣者に用意した「お祓い」と供物の「繭玉」をあげる。稲荷様は農業の神様で、「お白狐」（小さい狐の像）を一体借りていき、五穀豊穣を祈願する。願いが叶えられると翌年は二体にしてお返しする（以前養蚕のさかんの頃は養蚕の神様として崇敬されていたものである）。

清水稲荷

⑤**名　称**　勤功稲荷大明神（判形集落）

**由来伝承**　宝暦十年（一七六〇）九月二十八日に京都稲荷社から上野伴助の取次ぎによって、京都に出向いて、従五位羽倉摂津守から、正一位勤功稲荷大明神の御神影と証書を受けている。以前から稲荷を祀っていたかは不明だが、この年に新たにこの神社を勧請したものである。代表は後藤作左衛門と小林弥七郎である。弘化四年（一八四七）と昭和二十八年（一九五三）に改修して現在に至っている。

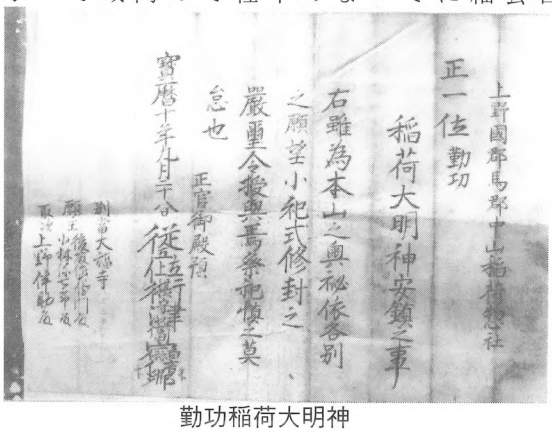
**実施期日**　二月十一日～十二日

**実施場所**　勤功稲荷神社境内

**組　織**　祭典の世話人が四人で祭りを運営する。今年の世話人代表は後藤悦好である。

**実施内容**　十日に世話人が集会所で花（竹を細く割ったものに色づけした紙でつくった花）づくりをする。また神社と参道の清掃をする。十一日朝、花を社殿の前へさしてかざり、今年の五穀豊穣と家内安全そして地域円満を祈願して祭が行われる。

この花は、毎戸一本を持ち帰る。翌十二日は一般の人たちがお祭りにおとずれ、家内安全と五穀豊穣を祈願する。

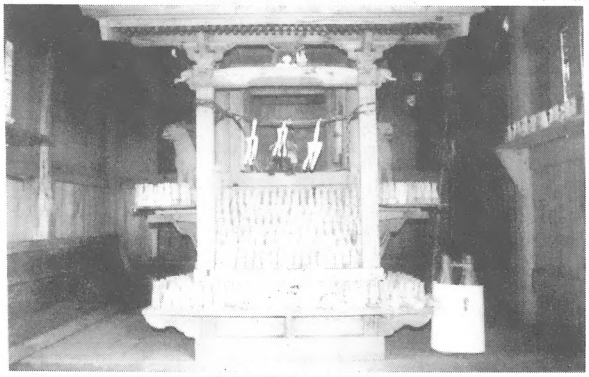


勤功稲荷大明神

⑥**名　称**　金甲稲荷大明神（関田集落）

**由来伝承**　神社の創始はわかっていないが、村の記録の中に、文久四年（一八六四）二月（二月二十日から元治元年）屋根替えをしたことが書かれており、復元をした時山車の棟木に明治二年の墨書銘があった。

昭和四十年（一九六五）頃までは、関田、戸室の二集落の同志会が中心になって祭りをしていたが、それ以後、関田第七区で行うようになり現在に至っている。



金甲稲荷大明神

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　金甲稲荷神社境内・見沢集落

**組　織**　区長を中心にして隣保班の班長によって諸準備が行われ、老人クラブの人たちのつくりもの（花、かさぼこなど）の手伝い、青少年健全育成会（福引き賞品づくり）若妻会（料理づくり、接待等）により行われ、中心になって動くのは主として見沢、鎧々（小集落）地区の人達である。代表者、飯塚六郎　関亜刀美

**実施内容**　準備　隣保班長等はお札、燈籠はり、山車のかざりものなど、老人クラブは、花、カサボコ（竹を細く割ったものに紙でつくった花をつける）など、育成会（会員二〇人）の役員は福引きの賞品づくり。

祭典は神主をたのみ神社で行われる。祝詞奏上、玉串奉奠等。供物は米の粉のやきもち、繭玉、うどん、そば、けんちん汁、お頭つき、果物、水、塩などである。

屋外には「マンドウ」がたてられ、かざりたてた山車が置かれ、テントが張られた中で料理、酒類、のみものがふるまわれる。午前十時頃から、明治時代に作られた山車の復元されたものの巡行が行われ、関田、鎧々、見沢の集落をまわり祭りは、にぎやかに終了する。この金甲稲成大明神とは関係ないかもしれないが、

山車の巡行

この関田に次のような稲荷勧請の証書が残されている。

依懇願移當　御社神影
正一位飯塚稲荷大明神
上甲州群馬郡尻高村
願主　飯塚小左衛門地面ニ
奉勧遷座改正到神璽之旦宜祓除其祠而於奉鎮祭者永
世五穀豊饒家内安全諸願成就可有守護者也
関東廿八ヶ國稲荷總司
妻戀御社
神官觸頭神主
天保七年丙申年正月豊日齋部宿弥守信

**⑦名　称**　役原稲荷

**由来伝承**　いつのころ勧請されたかわかっていない。四十年位前までは、神社の前に太鼓を出し、あかりをつけて、夜遅くまで太鼓をたたいてにぎやかに祭りが行われていた。参道の「のぼり」に「御鎮宅寶宙神社」と見なれないものが立てられている。集落の各家庭が円満であるよう無限の力のある宝の神社であるということであるといわれている。

五穀豊穣、家内安全を願う神社である。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　役原神社と公民館

**組　織**　祭典幹事（世話人）は隣保班の班長（伍長）がつとめる。頭（幹事長）は伍長の推せんできめる。八人が世話人となる。今年の頭は大渕磯次である。

**実施内容**　準備は十日夜世話人が公民館で供物などの用意をする。供え物は、御神酒、頭つき、繭玉、おこわ（赤飯）、水、塩である。

午後一時神主をたのみ、供え物をして、祝辞奏上、玉串奉奠をして終わる。そのあと公民館で直会をする。

役原稲荷

**⑧名　称**　戸室稲荷

**由来伝承**　昭和四年（一九二九）に都筑一族の人達が京都の伏見稲荷に出向いて神影を受けて遷座し、社殿を新築して都筑稲荷として祭りをしてきたが、その後神社を戸室の集落に移管し「戸室稲荷」とし、区の行事の一環として、集落全体の祭りとなったものである。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　戸室稲荷神社、公民館

**組　織**　区長（荒木重雄）隣保班長、公民館長（若月志午）運営委員が中心となり、準備祭典を行う。

**実施内容**　前日十日に世話人が、のぼり立て、お札づくり、燈籠はり（二〇個）、餅つき、福引き（毎戸二〇点以上寄附）あつめ、福引番号づくりなどの準備をする。夜になると燈籠に火をともす。

当十一日は神主をたのみ祭典、祝詞奏上、玉串奉奠をする。参拝者に福引き、甘酒、神酒、おこわ（赤飯）などをふるまう。お札は毎戸に配る。

終了後に、公民館（集会所）で直会（懇親会）をする。

戸室稲荷

**⑨名　称**　北之谷稲荷

**由来伝承**　元禄十五年（一七〇二）午年、向井主税（旗本）が尻高下組を知行所とした時、その繁昌のため、江戸の御屋敷から稲荷様を勧請して祀らせた。社地を見立てたところ「滝の下半兵衛の林の内がしかるべき場所に候に付」として、寄進となってお宮を建てた。松井十平衛の、免租地としての懇願により、正徳四年（一七一四）中田五畝歩を許された。

享保八年（一七二三）御遷宮して今の社が建てられたのである。それ以来、毎年二月初午の日を例祭してきたが、いつ頃かわからないが、二月十一日を初午と定めて祭典を行うようになった。社殿は高山村指定の重要文化財となっている。参道入口に立てる「幟」に明治三十三年第二月穀旦、當所氏子中の墨書がある。

**実施期日**　二月十一日

**実施場所**　大字尻高北之谷稲荷神社、公民館

**組　織**　昭和十二年（一九三七）の寄附帳には、青年団熊野支部が祭りの世話をし運営されていたが、それ以前はわかっていない。太平洋戦争後、熊野新青会が発足して祭りの運営をしたが、昭和三十五年から北之谷の区の行事として祭りが行われている。今年は区長（一場進）、区長代理、隣保班長が世話係となり四十八戸の人が一人ずつ出て行う。

北之谷稲荷

**実施内容**　十日、北之谷の毎戸一人が出て準備をする。午前八時から参道、社殿、境内の清掃が行われ、その後、お札づくり、燈籠はり、カサボコづくり、福引き賞品づくり、神饌品などの準備が行われる。費用は一戸五〇〇円。

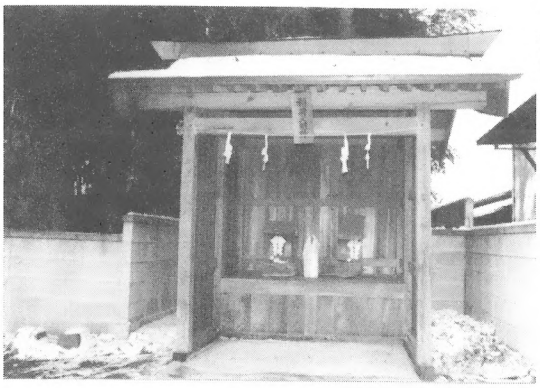
十一日　神主（林安弘）をたのみ、区長をはじめとする役員（世話人）と村長、村議会議員、教育長等の来賓を迎えて神事、祝詞奏上、玉串奉奠が行われる、その後、参詣者に福引き、たくさんの賞品が出される。終了後に公民館（集会所）に集まり、直会がおこなわれる。

**⑩名　称**　元宿稲荷
**由来伝承**　明治の頃にはじめられたといわれるが、さだかのことはわかっていない。中世の頃に山津波があったと伝えられ、この津波で大きな岩が流されてできた「ほら穴」ができて、そこに稲荷様を祀ったのが始まりという。いまでも段丘を掘ると「宝篋印塔」の残がいなど中世のものらしい遺物が出るという。
**実施期日**　二月十一日
**実施場所**　元宿稲荷社前と町田和男家
**組　織**　氏子は、現在一〇戸、以前は火之口集落の人が六軒入っていたが、現在は参加しない。
世話人は、町田和男（永代）町田新太郎、町田久江（この二人は交替）で行っている。
**実施内容**　十日　世話人により、燈籠はり、のぼり立て、神饌品などの諸準備がおこなわれる。
十一日　のぼりを立て、神饌品〔御神酒、頭つき、米、塩、水、ねぎ、繭玉、うどん、すし、おこわ（赤飯）〕を供える。氏子は三三五五お参りに来る。お札は毎戸に配られる。
午後二時頃に世話人だけで直会を町田和男家で行う。午後四時～五時頃に、神饌品、のぼり、燈籠など後片づけをして終わる。

元宿稲荷

長加部稲荷

**⑪名　称**　長加部稲荷（新田集落）
長加部稲荷大明神の幟一対を立て、繭玉の供物をし、近所の人が適宜お参りに行くだけ。
**⑫名　称**　五郎稲荷大明神（本宿集落）
お祭りのようなことは現在していない。田中、横まち（小集落）の稲荷様だが、田中の人たち三～四名の人がお参りに行くだけという。


新田宿稲荷

**⑬名　称**　新田宿稲荷
特別の計画した祭りはしていない。供物をして近くの人たちが参拝にいく。

（奈良秀重）

## 吉祥寺の金甲稲荷祭り

**名　称**　金甲稲荷祭り
**由来伝承**　吉祥寺の守護神として江戸時代より寺の裏山に祀られている稲荷様の祭りである。この稲荷様は江戸時代中期、京都の伏見稲荷より分社された。以降地域の安穏、そして特に養蚕の豊穣を願う利益があるとされ盛んな信仰が寄せられている。
**実施期日**　二月十一日（初午）この日は養蚕の豊穣のため春駒が舞われる。
**実施場所**　利根郡川場村大字門前　吉祥寺境内金甲稲荷社
**組　織**　吉祥寺
**実施内容**　この祭りは吉祥寺の行事として寺が行うものである。参拝者はしたがって主に寺の檀家達であるが、それ以外の、特に養蚕を行う地域の農家の人々も、蚕の豊穣を願ってお札を受けにお拝りをする。
なお、この日は地元門前地区の青年会の行う「春駒」の行事もあり境内を含め、当地区は人々で賑わう。
当日　寺では「金甲稲荷大明神」と書かれた木の札を用意する。札の左右には「家内安全、交通安全、商売繁昌、五穀豊穣」などが書かれる。又クジ引なども行われる。参拝者は白狐を持参する、和紙に「奉納正一位金甲稲荷」と書いた旗

稲荷祭に供えられた繭玉

を立てる、繭玉の形をしただんごを捧げるなどそれぞれ蚕や家の守りを願うためお供え物をする。特に養蚕の当たることを願ってお参りをする。受けた木の札（千円）は神棚へあげて一年間のお守りとする。

（金井竹徳）

## 黒田の稲荷祭り

**名　称**　お稲荷様

**由来伝承**　大願成就、五穀豊穣、郷中安全を祈る。豊川稲荷の系統との説と、金毘羅大権現の説がある。キツネがご眷属である。

**実施期日**　節分後最初の午の日、二月六日

**実施場所**　多野郡万場町　黒田稲荷神社境内

**組　織**　鎮守、丹生神社の総代四人、区長、副区長耕地総代四人計一〇人が世話をする。金は集めない。

**実施内容**　朝九時すぎ、若いし（衆）二人が集会所から大太鼓を太い竹竿で担ぎ出した。太鼓のたたき手が一人後ろに付いてドドン、ドンドンとたたきながら小高い山の上の稲荷様へ歩いて登って行く（今年は特別歩いてもらった）。みなに祭りの始まりを知らせる寄せ太鼓である。太鼓に誘われるようにコウチ（集落）のみんなが神社目指して坂道を行く。おばあさんたちは車で送ってもらい、神社前は賑やかになった。社は間口二間、奥行き三間、高さ一丈、開け放たれて賽銭箱の前に米、塩、ミカンが供えられ、お神酒も上がっている。シメ縄に下げた真っ白なキリハギ（御幣）が祭りらしく神々しい。十時十分、神社総代の黒田早臣氏が社の中で祝詞を上げ、その後みなの頭上をさっ、さっとお払いをして清める。役員から青々としたカシの葉っぱにキリハギをつけた玉串を供え、拍手を打って拝む。カシの葉はサカキの代用という。ご神体の古い鏡があったが盗まれて今はない。城山稲荷神社の祭神は倉稲魂神（うかのみたまのかみ）。「城山稲荷神社、平成十二年二月吉日、神社総代一同」と、真新しい献額にある。社は文化十三（一八一六）年作り替えた。

失せ物をしたとき油揚げを進ぜて拝むと出てくるといわれ、掃除したとき油揚げが上げてあったという。道端の広場では半分に切ったドラム缶で大火を燃やし、五徳の上に大鉄瓶が湯気を立てている。ゴザをすき、長机を二脚置きつまみが並び、酒盛りが始まった。

版木があり、役員は縦三一㌢、横六㌢のお札を、百枚手刷りにして、みんなに配った。「巳のない初午はよくない」といい、節分と初午の間に巳の日が入るほうがいいという。また、三の午まである年は火事が多いともいわれる。今年は各戸で不用品を出し合い、バザーをしたので賑やかな祭りだった。

幸　福　養蚕倍盛
お札　城山稲荷神社　御祈祷真璽
玉　恵　五穀豊穣

黒田の稲荷様

（土屋政江）

## 少林山ダルマ市

**名　称**　少林山ダルマ市
**由来伝承**　正月七日の七草の日が縁日で、宵山に当たる一月六日の夕方から翌日の七日にかけて、目なしの縁起だるまを売る初市が立ち、「起き上がり」（養蚕の休眠から起きること）と「七転び八起き」に通じるところから、養蚕農家で買い求めることでダルマが良く売れるようになった。
**実施期日**　一月六日～七日
**実施場所**　高崎市鼻高町　少林山達磨寺とその周辺
**組　織**　黄檗宗少林山達磨寺、高崎市観光協会、群馬県達磨製造共同組合
**実施内容**

(1)達磨寺の主な沿革

江戸時代碓氷郡鼻高村（現高崎市鼻高町）は安中藩領であった。藩主の板倉勝明が編さんを命じ天保二年（一八三一）から数年以内には完成したとみられる『安中志』には、少林山鳳台院達磨寺について、「此寺は人を葬ることなし、宗旨は禅家に黄檗に曹洞を兼ねたる如く聞ゆ、本尊十一面観世音菩薩行基并作と云。弥勒菩薩并増長、広目、多聞、持国、葦田の五大尊を安置。霊符神、三尊山上の別堂に安置、天湫和尚、霊符神三尊とは太上神仙脇士（抱卦童子、示卦童子や、柳霊符神とは七十三の霊符を持たる神仙にて、即北辰（北斗七星）なり信仰の輩多くして、参詣する者大方たえず。本寺常陸国水戸上町寿畠山祇園寺。開基了無居士、享保庚子年（一七二〇）三月十七日。開山明国沙門心越禅師（東皐心越禅師のこと）は関羽後、国の乱を避けて朱舜水と共に東海に棹さして日本国へ来るを水戸源義公招きて祇園寺を開かせ給ふ）。二世天湫和尚享保二十乙卯年（一七三五）六月晦日、遷化、此禅師ぞ実は開山の如し、文ありて頗才気有しとなん。」とある。つまり、延宝五年（一六七七）に中国からの渡来僧の東皐心越禅師が徳川光圀（水戸藩主）の帰依を受けて開創といい、以後水戸徳川家の保護を得て、享保七年（一七二二）前橋藩主酒井雅楽頭忠知が当寺を修築、享保十一年（一七二六）には水戸宗堯が当寺を永世祈願所とし毎年特使を遣わしたという。本寺は江戸時代は曹洞宗だったが、万延二年（一八六一）二月入寂の十一代補住の黄鶴通楼の代になって臨済宗黄檗派（後に黄檗宗）に属した。

本堂の参詣の賑わい

(2)ダルマ（達磨）との関係

少林山では東皐心越禅師の描いた一筆達磨の座禅像を正月の配り札としていた。付近の家々ではこの配り札を悪疫をはらい、福を招くお守りとして神棚にまつってきた。その後、文化年間になって少林山九代目東嶽和尚という達磨描きの名人がいて、この和尚と懇意で豊岡の山県朋五郎という百姓が、少林山の配り札に描かれた達磨を木像に彫ってもらい、この像に和紙を貼って乾かし抜き取って目無し達磨の像を作ったのが豊岡の張り子達磨の起源であると言われている。その後、大正期になり、「鉄つあん」こと中豊岡の葦名鉄十郎や松本由松らの改良した型彫りによって現在の福だるまになったという。

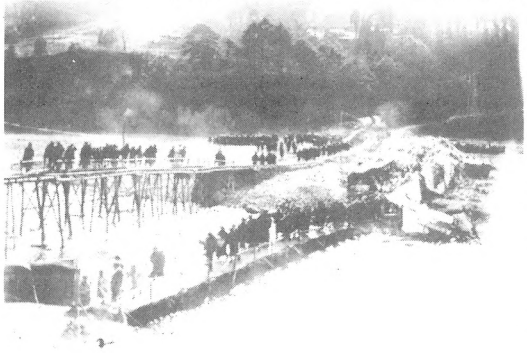
豊岡地区のダルマ生産は農家の副業として発達してきた。秋の収穫期が終わる頃から張り紙の調達（かっては村内に紙すき場があったが、現在は埼玉県小川町製を使用）のあと、木型にふのりを使って張る。天日での乾燥、ダルマの底（へっだ）を粘土で作って乾燥する。木型から背割り後の張り子はニカワで焼き付けたあと、色ぬり（白、赤）、そしてひげや文字（家内安全、商売繁盛、交通安全、特注の文字入り）書き等で仕上げる。なお近年は機械化されて真空型抜きで大量生産化が可能となり、赤の色ぬりも舟の中に入れて瞬間的に処理することが可能になった。

高崎ダルマは全国生産のおよそ八〇％を占め、製造生産個数は年間一七〇万個、年間売り上げ高は約七億円に達する地場産業を誇り、製造業者約八〇軒が、群馬県達磨製造協同組合を組織（昭和四十五年発足、それ以前は任意団体）している。ダルマ市で商うのはもちろん、最近は全国各地での各種選挙の際には必需品として位置を占め「必勝」と大書したダルマが欠かせぬ事務所風景を演出している。

(3)少林山の初市

中山道（国道一八号線）から鼻高の少林山達磨寺へ行くには長さ一八〇メートルの鼻高橋と、九〇メートルの少林山橋（共に木桁橋）があった。（昭和三十年『八幡村誌』）大正・昭和初期の写真をみると正月六日、七日の七草縁日の日には、少林山橋は吊り橋の時と木桁橋の時とがあったが、狭く人出の多い時は危険のため、既設の橋は寺への往きに使い、帰りは仮橋を使用していた。併せて帰りの道端には露店が並んでいた。

戦後自動車時代を迎え、先ず昭和五十六年度に八幡大門付近から鼻高へ通じる新鼻高橋（PC桁鉄筋コンクリート橋）が竣工、さらに同五十七年度には市道乗附・鼻高線が少林


仮設の橋を渡る参詣の人々（昭和初期）

山のすぐ下の碓氷川右岸沿いに開通して、一八号線を通らずに富岡方面へ通じるようになった。

平成十二年一月六日（木）正午から七日（金）午後二時までの七草縁日（だるま市）は、あらかじめ高崎警察署と市当局や関係団体によって協議、交通規制が行われて実施された。主な内容は駐車場の確保（新鼻高橋下部三四〇台、国道一八号線沿いに一七〇台、八幡小付近に二三〇台、群馬八幡駅付近に七〇台、県道藤木線沿いに二一〇台、乗附緑地に二二〇台）、国道一八号線は歩行者横断禁止、駐停車禁止、乗附・鼻高線に乗り入れ禁止となった。新鼻高線から少林山までの参拝道路は一方通行とし、夜間の照明のため東京電力は本部と待機所警備・安全のため境内講堂前に警察の警備本部と消防本部を設けた。このためかっては夜間照明は限度があり相当暗く危険であったが近年は足元まで明るくなった。

参詣人は総門の手前でお焚上げ用の古いダルマを奉納（ふだんは本堂霊符堂へ奉納）したあと、新装の総門をくぐり、大石段を昇る。鳴り続ける鐘楼をくぐり、一たん瑞雲閣（社務所）、講堂の前で息を整えたあと、さらに石段を昇り、最上段の本堂、霊符堂の前へすすみ参詣をする。

家内安全、合格祈願、交通安全などの志で特別奉納する者も多い。

本堂霊符堂、達磨堂の周辺には大小の福だるまをはじめ招きねこが山と積まれ客を待つ。さらに縁起物、運勢占い店などが並ぶ。さらに露店は次の段の観音堂のまわりから瑞雲閣前から延々新鼻高橋周辺、そして国道一八号線北側からJR群馬八幡駅方面へも露店が延びている。商売は大小食堂をはじめ食料品店が圧倒的に多く、縁起物店、植木類店などなど露天の列は約一・五キロにも及ぶ。かっては達磨寺境内を出て寺沢川を渡ったあと下鼻高の集落東側を下って鼻高橋へ通じていたが、近年は寺沢川に沿って南へ昇り立石橋を渡って下鼻高の集落の西側を大きくまわり、下鼻高公民館西側を通って鼻高公民館の上を通って新鼻高橋の橋元へ通じている。この迂回道路の両側に延べ三〇〇軒ほどの店が並んで客を呼ぶ。

福だるまはいかがですか？

露店が境内にも並ぶ

招き猫も豊岡で製造

なお、達磨寺の社務所（瑞雲閣）においても寺札と福だるまの販売をしている。

なお、霊符堂の東側には昭和六十一年の秋に達磨堂が建設され、大阪の大山修氏の収集した全国のダルマコレクションの寄贈を受けて展示している。

(4)県内のダルマ市

一月六・七日の少林山の最大のダルマ市であるが、このあと春先まで県内各地でダルマ市が次々と開催されている。列挙すると次の通りである。一月九日前橋、十日高崎和田多中琴平神社、同日藤岡立石金比羅宮、十一日伊勢崎、十二日渋川、十四日中之条、十五日桐生菱晋門寺・沼田、十八日高崎市南大類の柳原馬頭観音・館林市、九日小泉、二十三日藤岡三夜様、二十五日剛志雷電神社、二十八日室田不動尊、二月二十八日原市、三月一日松井田、同二日安中ひな市、同月第二日曜甘楽町笹森稲荷、三十一日磐戸、四月一日本宿、二日下仁田と、正月から春までの初市、節分会、ひな市、ざる市などの縁日にダルマ市が立っているほか、埼玉、栃木、長野など近県にも店が出ているし、千葉県の成田山新勝寺では一年中高崎ダルマを売る店がある。

主なダルマ市へは組合として共同出荷しており、平成十二年の初市の場合少林山（1／6・7）一三店舗で四九名、前橋（1／9）五五名、金比羅宮（1／12）二四名が出荷、参加した。

（森田秀策）

## 伊勢崎初市

**名　称**　初市天王祭り

**由来伝承**　伊勢崎の本町に一・六の六斉市が開設されたのは、元亀年間の頃と伝えている。また、この市の繁栄を願い、市神として牛頭大王が祀られた。その年時は定かではないが、市の開設と同じ頃に、前橋領天川村（現文京町）に鎮座する天王社（八坂神社）の分霊を勧請したものという。その後、本町の六斉市を分けて、寛政二十年に十一日と二十六日は新町（現大手

町）で、さらに万治二年には、一日と十六日は西町（現三光町）で開催することになった。

この頃、市で扱われていた品物は、農産物などの諸品で、織物のみではなかった。しかし毎年五月から七月頃の季節には、伊勢崎地方の特産物である蚕糸や太織（のちの伊勢崎銘仙）の市と化していたという。明治十三年には、蚕糸・太織生産者によって伊勢崎太織会社（社員三五八名、現在の伊勢崎織物協同組合）が創立され、市場は蚕糸・太織を主体としたものに変貌した。そこで明治十九年六月に蚕糸・太織市場の建物を曲輪町に新築し、これまで本町、新町、西町の路上市に出品していたこれらの品物をここで専門に扱うことになった。つまり新市場が独立したのである。以来、「伊勢崎の市」といえば、この新市場を指すまでに発展した。新市場の建物は、昭和二十年の戦災まで存在し、戦後も再建されたが、現在では織物買継店の店頭で取引が行われている。

また、市日も大正九年から曜日制を採用し、毎週金曜日（本市）となり、さらに火曜日（準日）も加えられたが、その後、休日制に改められ、休日以外は取引が行われるようになって現在に至っている。

現在一月十一日を祭日と定めての、この「初市天王祭り」は、近世の頃の一・六の六斉市の名残りをとどめるもので、明治二十二年を初回とし、今回まで約九〇回の伝統を保つ祭りとなっている。

伊勢崎神社より天王様を奉じ、式典場へ

**実施期日**　一月十一日

**実施場所**　伊勢崎織物協同組合事務所・本町通り

**組　織**　伊勢崎織物協同組合、初市実行委員会（商工会、商店会、伊勢崎神社氏子代表等）

**実施内容**　午前九時頃、伊勢崎織物協同組合の役員が、伊勢崎神社に合祀されている市神天王様の御神体を迎えに行く。当社氏子代表者らの立ち会いのもとに、神官より渡された御神体は協同組合理事長が奉持し、同組合事務所内の式典場に移され式典が行われる。

ここでの式典は織物協同組合が主催役となり、来賓等およそ一五〇名が参列して挙行され、終了後、直会（昼食会）となる。以前は織物市場に天王様の神輿が安置され、式典が行われていたという。

本町通り露店市

天王様を迎えての式典（於　織物組合）

一方、遠く離れた千葉県などの各地から参集した露天商は、本町通りに店を連らねる。正午を知らせる消防署のサイレンを合図に、交通規制が開始されるとともに、これまで待機していた露天商は一斉に店開きをする。ダルマなど縁起ものや植木、またタコヤキなどを扱う商人たちで、その数はおよそ二八〇店という。ダルマは高崎市豊岡地方産出のものである。

午後七時過ぎには「新春神輿出初式」といい、伊勢崎神社の神輿が神輿奉賛会「粋連」の人たちに担がれて、本町通りに繰り出す。この神輿は「伊勢崎神社の本神輿」といわれ、担ぎ手は二十代から四十代の人たちである。特に本町十字路で盛大に揉まれて神社に還御し、午後十時頃、この日の祭りは終了した。

なお、正午からの街頭での行事は、初市実行委員会によって、昭和三十年代から、新しく始められたものという。したがって、市開設の当初から祀られている市神牛頭天王を迎えての伊勢崎織物協同組合での式典が、古くからの伊勢崎の市の名残りを現在にとどめているものとみることができる。また、市で扱われてきた品物が、次第に織物一本と化してきたのも、伊勢崎の市の特徴といえる。

（金子緯一郎）

## 前橋初市

**名　称**　前橋初市まつり

**由来伝承**　伝えによると元和三年（一六一七）、厩橋城主酒井重忠の時に、当地の商人頭木嶋助右衛門によって、本町通りに四・九の六斉市が開かれたが、現在一月九日に行うこの初市まつりは、その伝統を継承するものという。また、市の繁栄と住民の無病息災を願って八坂神社（祭神は、牛頭天王またの名を須佐之男命）も祀られた。当社は現本町二丁目に鎮座する八幡宮に合祀されているが、初市まつりには市神として、その神輿が本所通りに設けられたお仮屋に出御する。

この市は「ダルマ市」とも呼ばれている。ただ、こ

こでダルマが売られるようになったのは、明治の末期からで、高崎の少林山達磨寺のダルマ市の露天商が来るようになってからという。このダルマは「福ダルマ」と呼ばれ、当初から人気を集めて次第に出店する業者も増加し、現在に至っている。

**実施期日**　一月九日

**実施場所**　本町二丁目

**組　織**　本市の商工観光協会関係者、本町二丁目の自治会・初市関係の役員等、およそ七〇名で組織している「初市実施委員会」（会長藤塚賢一氏）が中心となり実施されている。

**実施内容**　午前十時から八幡宮境内で、初市関係者らの参列のもとに式典が行われ、つづいて境内に積まれた夥しい数の、古ダルマのお焚きあげが始まる。古ダルマの供養のためという。十時三十分、八坂神社の神輿（市神様）が出御になる。神輿の担ぎ手は本町二丁目の青年会の人たちである。この神輿は昭和三十六年に新調されたものという。

お仮屋に安置された神輿

出御する市神の神輿

神輿を中心とした行列は、まず八幡宮前のエビス通り（旧称連雀通り）に勢揃いし、露天商が店を連ねている本町の目抜き通りを練り歩く。行列は豪華・華麗なもので、その出しものをいくつかあげると、まず本市の消防署本部隊員のブラスバンドが先頭に立つ。神輿の後には巨大な相生獅子がつづく。この大獅子は旧相生町（明治四十三年、本町二丁目等に編入）のもので、当町内守護のために祀り、初市まつりにも参加してきたが、のちに本町二丁目に引き継がれたものという。骨組みは竹を編んで作られ、その上に御幣をいっぱい張りつけ、さらにその上に紙を張って、朱ウルシを塗ったものという。また地元をはじめ、伊勢崎、渋川、沼田、藤岡、安中、富岡の各市から参じた纏持ちの人たちが、纏の振り舞を演じながら練り歩く。行列の後部からは、市内有志たちによって結成された酢将草（かたばみ）会による華竜太鼓が打ち鳴らされ、祭りの雰囲気をいっそう盛り上げる。

前橋初市全景

一巡した市神様の神輿は、午前十一時半頃、二丁目（東和銀行前）に設置されたお仮屋に安置されて行列は解かれる。ここには参詣者が列を作って絶え間なくつめかける。参詣した人たちは、笹つきの篠竹に「八坂神社　前橋初市」と朱印の押された紙の小旗を結びつけたものを係から貰って持ち帰る。これをシノバタと呼んでいた。

また、本町通りから表町の駅前通りまで店をつらねている露天商は、およそ一三〇〇店といい、北は北海道から南は九州に至るまで、全国から参集しているという。これらの店は、福ダルマをはじめ、各種の縁起ものや、ヤキソバ、タコヤキなどの食べ物類を商っている。昭和の初年頃までは、ガマの油売りの大道芸人やバナナのたたき売りなども見られたと伝えている。

なお、お仮屋に安置された神輿は、この日の午後十時に、出御した時と同じく二丁目の青年会によって担がれ、八幡宮に還御して祭りは終了する。

（金子緯一郎）

## 中之条町の安市

**名　称**　安市

**由来伝承**　中之条町は吾妻川のほとりに、河原町つぎに長岡の地（俗に下の町）に在ったが、洪水などの諸事情により、寛永二年（一六二五）町割りして、道の中央に用水、両側を街道とし、開市を予定して広い通りとした。寛永九年（一六三二）真田信吉は市の新設を許した。これが現在の中之条市の始まりである。

その頃すでに隣の町「原町」にも市が開かれていた

市杭

ので双方の利害の関係から「市出入」（紛争）が起こり、寛永九年（一六三二）から、明治五年（一八七二）紛争が完全に集結するまで二百四十年もの長きに亘っている。

市場の構造は、寛文三年の検地で町を上、中、下の三町にわけ一町は間数一五五間三尺（約一〇三㍍）屋敷数は二五軒、三町合わせた件数は七五軒となる。上中下の三町の市をそれぞれ上市、中市、下市といい、延宝九年八月、三町の争いを機に、各町の境に石の杭を立てた（市杭）（丁切）、上の町には市神をまつる「天王宮」があり、これを祀って月六回の六斉の市を立てた。

市の立つ日は、上の町は十一日・二十六日、中の町は六日・二十一日、下の町は一日・十六日であった。店の張り方は、中央の堰を背にして両側に張った。堰を背にする方を中店、両側の店を前店といった。

市場で扱った商品は、塩、茶、真綿、麻布、木綿、煙草、穀物、そ外、小豆、大豆、荏等であった。

明治五年原町と中之条町との市の紛争はなくなり、自由に商売に打ちこむようになった。

この頃市は隆盛をきわめた。明治十二年戸長役場の事務日誌四月十六日（安市）の様子を「二の日二百十二店の店が張られ、原町警察署から午前六名、翌日午前一時から七時まで六名が立番した」と記録されている。

明治十四年（一八八一）六月、市神、須賀神社が落成した。この年、小池折八の法話の中につぎのように記されている。

「新記の祭りなれば将来繁昌の市となして参詣人大からんことを欲し、十五、十六の両日を祭日とし、十六日には町人商人一般に百貨百物値下げして販売し、見せ物、飾物、その他馳馬（競馬）、浄瑠璃等の典行を添え賑しき祭りとなしたり。当時は塩、茶、綿、油、太物、紙、砂糖の如きは損しても一割以上二割以下の値下げせし故、馬を引いて買物に出る人々は三里五里の遠隔地より来り、市中群集し尓来『二割下け市』と言いはやせり、これが四月十六日の「安市」と言うようになった。

かつては月六回の市であったが、現在一年間に開かれる市は、一月十一日のボク（小正月のかざりものをつくる木）市、四月十六日の安市、八月一日の祇園祭、十二月二十六日の暮市のみとなった。

**実施期日**　毎年四月十六日

**実施場所**　吾妻郡中之条町　市街地五〇〇㍍の間

**組　織**　中之条町中央商店会、会長島村太一郎、副会長富沢積男、飯塚神策、蟻川進、佐藤啓次、会員八五名が中心となり推進する。

**実施内容**　昭和五十四年以前は、道路使用許可もなく商店が適宜に店を張っていたが、歩行者天国にしたり許可がなければ店も出せないので、昭和五十四年の安市から中央商店街が中心となり、吾妻警察署に交渉して許可をもらい安市を開くことになった。安市運営本部を設け、警察官の警備によって行われる。

市の様子

店を出すのは、北毛外商組合の小島守氏が責任者となり、その指導によって店が張られる。店の配置については同業が一ヵ所に集まらないようにする。長年続けて来ている店は毎年同じ所へ出させる。店を出す人は主として群馬県内であるが、埼玉、東京から来る店もある。道路使用料は一店二三〇〇円である。

昔は春の農作業に必要の物が多く、「苗木市」とも云われたように、桑、杉、桧などの苗が多かったが、現在は苗は少なく、花木、花類が多い。農具、家庭用品、たべもの、あそびなどが出店される。三十年から五十年続けて来ている店もある。今年の出店数は七五店で町の常店で出店しているのが三店あった。

午前九時頃から午後七時頃まで商売している。店じまいしてから外商組合、商店会の方々によって清掃が行われて安市も終了となる。

（奈良秀重）

## 日限（ひぎり）地蔵尊縁日

**名　称**　お地蔵さま。桐生日限地蔵尊。

**由来伝承**　即決の祈願成就ではなく、祈願者が努力可能な満願日を定め、毎月二十四日の縁日に継続した月詣りの参詣祈願こそ、お地蔵様の慈悲で成就できる。

**実施時期**　毎月二十四日。一月初地蔵。十二月納地蔵（おさめ）。

**実施場所**　桐生市東二丁目十三・十八　観音院境内及び周辺道路。

**組　織**　真言宗豊山派諏訪山観音院能満寺。

**実施内容**　正規の山院寺号を知る市民は少ないが、お地蔵様を知らない市民もいないほど親しまれている。

西桐生駅からの参詣路沿いでは、人の動きで二十四日がわかるほど上電沿線からの参詣者が顕著である。

日限地蔵尊（ひぎりじぞうそん）御利益の、由緒来歴は複数伝承されているが、大願成就までの特徴的な継続参詣で、他に類例を見ない縁日が構成されている。

人に語れぬ切実な悩みや不安をかかえ、また欲望願望の軽いノリで、即決の御利益期待の場合でも、現代人が神仏の前で、拍手合掌する大多数の人は、真剣で真摯な祈りを自然に行っている。

日限地蔵尊では、願主が自ら目標成就日を定める。つまり一ヵ月であれば毎日、あるいは毎週。一年三年と長期であれば、毎月の縁日に月まいり。真摯な祈願の継続によって大願成就が得られる。お百度まいりの長期版的な参詣手法であり、寺院としては安定した縁日が構築できる。

一月の初地蔵と十二月の納め地蔵は、二万余の参詣者と、七〇から一〇〇に達する露店は縁日の盛大をも

のがたり、月ごとの縁日も一万人の人出と五〇余の露店で賑わう。普段の日も香煙絶えることがない。参詣者は、近隣はもとより、栃木、埼玉、東京、千葉、長野方面からも見えている。

各地の縁日や祭りの状況を把握する露天商が「トゲ抜き地蔵と観光地を除けば、毎月賑わうのはここだけ」と言い切る盛況は、主要駅と参詣路の要所に掲げる幟旗と、定期的な新聞広告。現代人の多様な願意を受け入れる寺院の姿勢と、狭い境内に、参詣者が自然発生的に定めたお参りコースがセットされ、縁日の様相が堪能できる。

ほとんどの参詣者は、「日限地蔵尊」に続いて「水かけ不動尊」で浄い願いとし、なで仏の「びんずるさま」をサスリ、「祢宜師」さまはタマネギ奉納で眼病歯痛に霊験あらたか。良縁子宝安産に「金精大明神」。

列を成しての整然としたお参りは真摯な祈願がうかがえる。

（平塚貞作）

縁日の様子

## 笹森（ささのもり）の市と祭典

**名　称**　笹森稲荷例大祭

**由来伝承**　笹森稲荷神社の境内で行われる祭典と市であるが、笹森稲荷神社は祭神は倉稲魂神・豊城入彦命。地元では笹森稲荷と称し、古墳時代後期の全長六〇（メートル）の前方後円墳の笹森古墳の墳頂部に建立されている。創立期は八二五年と伝えられているが、現在の社殿は明和七年（一七七〇）の再建である。もとは、祭典を三月の初の午の日、二の午の日、三の午の日の三回行っていたが、戦後に、春の例大祭を三月の午の日のみとし、さらに社会情勢の変化を受けて昭和四十三年より、春の例大祭を三月の第二日曜日と決めた。

**実施期日**　三月の第二土曜日が宵宮祭り（御旅所への神幸祭）、第二日曜日春の例大祭（還幸祭）

**実施場所**　甘楽郡甘楽町福島　御旅所と笹森稲荷神社境内

**組　織**　笹森稲荷神社氏子

**実施内容**　笹森の市は三月の初午の日に県内及び、栃木、埼玉、長野、新潟その他関東一円から、業者が来て、戸板や莚を並べて店を開いた。商品は養蚕具、農具、白絹、麻、機械器具、植木、桶、籠等農家で使用する物が中心であった。もとは、神社の近くの氏子の人達が、自家生産の物を売っていたのがこの市の始まりという。その後、参拝客目当ての各地の業者の出店となったと、土地の古老は説明している。ここでの開市はこの地方での最初であるので、この後の祭礼での市の商品の値段を左右するとまいわれている。

笹森稲荷のご神幸祭りが例大祭の前日に行われる。

この日、神社の御神体をお移しした神輿を中心に幣束を背負った神馬、万灯をつけた花馬、楯・鉾・弓矢、稚児などが行列を作り、上町の御旅所まで巡幸する。

ここで、天狗の舞、浦安の舞を奉納。神輿は御旅所で一晩お籠もりをして（神輿番が交替で警護にあたる）、翌朝、御旅所より本社に遷御。祭典の後（ここでも、天狗の舞、浦安の舞を舞う）神楽殿で神楽を奉納。現在一三座を奉納している。笹森稲荷神社伶人会の人達による。

笹森の市の様子

（井田安雄）

## 二八　祇園祭

# 沼田祇園祭

**名　称**　沼田まつり（沼田祇園まつり）
「沼田祇園まつり」が昭和四十六年「沼田まつり」と名称が変った。

**由来伝承**　中町の須賀神社の主神牛頭天王を祀るもので、天正十八年（一五九〇）市（商売）の神として町割の折に、下之町の四ツ角（天王石のある場所）に牛頭天王宮が祀られた頃よりこの祭りは始まったといわれる。牛頭天王はインド祇園精舎の守護神で日本へ垂迹して素戔嗚尊となり、市の神として祀られ、祇園祭りの祭神である。牛頭天王宮はその後、慶長十七年（一六一二）中町（現在地）へ移され須賀神社と改称された。明治十四年以降、この祭りは須賀神社と榛名町にある榛名神社との合同の祭りとなり、沼田の一大祭礼となる。又この祭りは県下三大祇園祭りの一つでもある。（世良田、大間々、沼田）。

**実施期日**　八月三・四・五日
以前は決まっておらず、六月二十三～二十五日、又、年によっては七月～十月の間の三日間など不定期であったが、明治三十八年より現在の祭日となった。

**実施場所**　沼田市中町　須賀神社
沼田市榛名町　榛名神社
神輿の巡行、山車の巡行は旧沼田町全体。

**組　織**　須賀神社、榛名神社、両社の氏子、沼田まつり実行委員会。

**実施内容**　各町内の神輿や山車（沼田ではマンドウと呼んでいる）の巡行が中心であったが近年は迦葉山の大天狗面を神輿に仕立てて渡御する他、各団体等の神輿など巡行に参加する。
神輿の中心は須賀神社神輿と榛名神社神輿で、須賀神社神輿を担ぐのは中町・上之町・下之町・坊新田町・馬喰町・鍛冶町の氏子で、榛名神社神輿は材木町・原新町・高橋場町・柳町・東倉内町・西倉内町・榛名町の氏子である。
山車はマンドウと呼ばれ、各町内が競って人形、幕、提灯、獅子などで飾り付け、鉦・太鼓・笛で囃す。明治四十一年市街地に電線が引かれるまでは一本柱の高い所に人形を掲げて誇らしく大通りを巡行したと言われる。大正の初め四本柱となり山車全体も低めになった。又高欄が上下出来る「すり込み式」、上部のみ回転する回転式など新しい山車が時代の中で導入されてきた。
町内ごと組の名が付けられ、山車、提灯など一目でわかるよう名入れになっている。
町と組名は次の通りである。

東倉内町……ひ組
西倉内町……西組
柳町　……や組
高橋場町……た組
材木町　……さ組
原新町……　は組
上之町……　か組
馬喰町……　む組
中町　……な組
坊新田町……ほ組
下之町　……に組
鍛冶町　……い組
榛名町　……お組
清水町　……よ組
薄根町　……う組

山車に飾られる人形には次のようなものがある。
小鍛冶・暫・鬼若丸・桃太郎・自雷也・牛若丸と弁慶・勧進帳・加藤清正と虎・和藤内・茨木・平知盛…。
昭和三十一年に山車が一一町内より巡行されたが人形については次の通りである。
東倉内町…和唐内　西倉内町…狐忠信
材木町…牛若と弁慶　原新町…暫
上之町…加藤清正と虎　下之町…鏡獅子
中町…猩々　馬喰町…自雷也
坊新田町…幡随院長兵衛　鍛冶町…梅王丸
清水町…勧進帳。
祭り実施内容　八月一日頃に「マンドウ洗い」（沼田では山車をマンドウと言う）と呼ぶ、山車を洗う作業を子供が中心となって行い、大人が仕上げる。三日の午前中までに山車の飾りつけを済ます。
当日の支度は桃色の鉢巻、腹掛け、肉襦袢に猿股、足袋、二枚底の厚さの草履、太鼓用の撥袋を腰に下げる者もいる。氏子は紋付、羽織、袴、白足袋、雪駄。手古舞と呼ばれる山車の先導役は昔は芸者さんなど出たが現在は女の子がなる。男髷に右肌ぬぎ、黒の半纏、黒の裁っ着をはき、手甲、脚絆、足袋、わらじを着け、花笠を背に掛け、鉄棒を左に突き、右手に扇を持ち踊るような動きで先頭を歩く。
お囃子は上州系統「さんてこ囃子」の中、サンテコ・テケテットン・吉原カンラ・篭まわし・麒麟・夜神楽など独特な曲が多い。又締太鼓の音を高く調律させて、バチでたたく時の強弱をハッキリとさせる伝統的な奏法と長尺太笛を中核にし高尚な響きに仕上げ、ゆっくりとしたテンポで優雅なお囃子として知られている。三日は午後一時より中心になる市街地は車両が通行止めとなり、市役所前広場より、マーチング隊の先頭によるオープニングパレードにより祭りは始まる。
飾り付けの済んだ須賀神社、榛名神社の神輿は午前八時より氏子町内の渡御、これは車両にのせ行われる。お旅所と呼ばれる、神輿のお仮屋を出て市街地を一周してくる。各町の大人、子供神輿などもこの例にならって、車輌で町内を午前中に回る所も多い。

山車行列

山車は車両の通行止後に各町内をまず回りそれから巡行が始まる。地区によっては道案内の神である猿田彦大神が先導をする所もある。山車が道をまたぐ電線に当たる時には人形の横にいる鳶人足が木で出来た棒を使って電線を押し上げて人形をくぐらせて進む。

各町の祭典事務所には祭典の役員、婦人会、青年会、育成会などの役員が待機しており、神輿や山車が近づくと迎えて、飲物やお菓子など出して接待をする。

出発とか休憩の合図は責任者が鉦を鳴らして行い役員達はタスキに役名を書いて一目でわかるよう肩にかけて歩く。

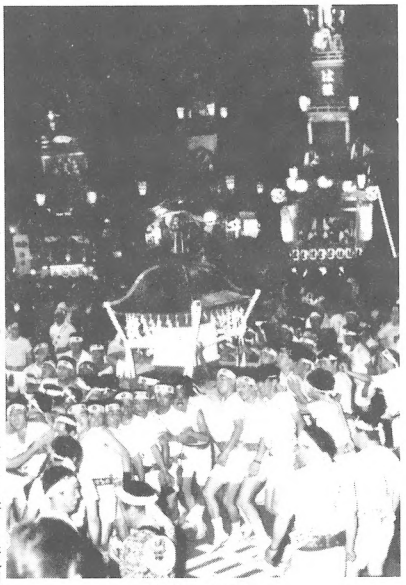
天狗みこしの渡御

三日の夜、七時すぎに各町の山車が市役所に勢揃いをしてその後「マンドウ行列」が市街地の本通りを連なって巡行する。又六時半すぎには天狗神輿の渡御が市役所前より出発する。町神輿の自主運行の他に夕方には婦人会による「千人おどり」の行列とか夕方より夜にかけて祭りは盛り上がり、夜の十時まで続く。

四日もほぼ同じ行事、渡御・巡行が行われる。この日沼田祇園囃子の競演会が中町、中の会駐車場前であり審査が行われ、優勝・準優勝が決められる。

祭りの最終日の五日は沼田まつりのクライマックスで各町の子供神輿、各町の山車の自主渡御、巡行が午後一時半より夜の十時まで続く他、天狗神輿の巡行、そして夕方五時より、須賀神社・榛名神社両社の神輿の渡御が満を持して始まる。見物人は二階より神輿を見下ろしてはいけないとされ、見物する者がいるとその家を神輿が押し込んだということもあったという。

この日の夕方までお旅所に奉安された両社の神輿は、神輿の飾りを取り、胴部にさらし布を巻き渡御されるが、勇猛で荒々しいのが特徴で、以前両社の神輿が激突したこともあった。


神輿の渡御

夜八時頃に両社の神輿が市役所前広場にて競演される。その後、榛名神社神輿は倉内通りを西へ向い榛名坂を下り榛名神社へ、須賀神社神輿はキネマ通り、本町通りと回り須賀神社へ。十時頃より須賀神社の境内では中町、他の山車の祇園囃子の中、須賀神社神輿の最後のネリが一時間ほど続き、ほぼ十一時ぐらいに社殿に納められる。これを機に沼田まつりは終了ということになる。

「蚕あがれば沼田の祇園、つれていくから辛抱しな」古くから近在の農家では夏の農繁期、この沼田祇園まつりを楽しみに、生活暦の一つとしてきた。こんな歌が唄われ続け、人々の間にこの祭りは深く息づいてきた。

（金井竹徳）

## 大間々祇園祭

**名　称**　大間々祇園

**由来伝承**　祇園祭りは祇園牛頭天王に対する信仰であり、本来は防災除厄のための祭りである。ところが、本県では、このほかに、市神としての天王様に対する信仰が厚くみられる。

大間々町は江戸時代において、絹市が開かれ、幕末の「関東市町定日案内」によれば、桐生、前橋に次いで第三位、小結にランクされるほどであった。このために、市神としての八坂神社に対する信仰もさかんで、大間々祇園は、世良田、沼田の祇園とともに、「上州の三大祇園」と呼ばれていた。

この関係で、まず、大間々の絹市について取り上げてみる。大間々の絹市の起源については諸説がある。宝永六年説（『群馬県蚕糸業沿革調査書』）、延宝二年説（「高草木家文書」）、万治元年説（「大間々絹市由来」及「大泉院日記」）、元禄十五年説（「桐生絹市故事」）などがある（『山田郡誌』参照）。このことに関連して、大間々祇園の起源についてみると、『大間々町誌』（「基礎資料X」―「大間々町の民俗Ⅲ」）には、「大泉院日記」を引いて、寛永六年（一六二九）からはじまったとしている。八坂神社、神明宮別当大泉院の「神明宮祭典日記」には、「寛永九年六月二十四日に市を始む。祭祀を始む。」とある。また、万治六年に江戸から神輿を新調したこと、その後、町内を各二丁目ごとに一組として祭礼を分担することにしたとある。（『大間々町の民俗』参照）この後に、元禄年間より、三組で分担した祭礼を、上之町、下之町の二組に分担することとし、一年交代で、上・下を天王町として祭りを主宰することになったという。なお、七丁目は屋台を持たず「割出し」と呼ばれて、長い間上と下で交代で祭礼を主宰してきたのである。それを、昭和十年の「八坂神社祭典申合事項」によって、七区を当番町（天王町）に加えることになった。そのことが具体化したのは、昭和十九年七月一日の総町祭典協議会の席で「八坂神社祭典當番順次に関する件」が可決され「従来乃上之町下之町」乃順を、御社祭典順に改め一丁目より順次七丁目に至り此を繰返す」とすることになった。この結果七丁目は昭和二十一年に当番町を務めることになった。

その後、戦後の混乱期をへて、昭和四十九年から「大間々まつり」の形をとって、八月一、二、三日に実施することになり、この祭りの中に、大間々祇園を組み入れることになった。

大間々祇園の日程は、江戸時代には七月二十四日～二十六日、明治時代には太陽暦の実施によって、新暦の七月二十四日～二十六日、さらに八月一日～三日となり、現在に至っている。

**実施期日**　八月一・二・三日

**実施場所**　山田郡大間々町大間々一丁目～七丁目

**組　織**　大間々まつりの主催は大間々町。八坂祭典は大間々町神明宮崇敬会が主催。

**実施内容**　現在の大間々祇園については、前述のように「大間々まつり」の中に組み込まれて行われている。日程は八月一日から三日までの三日間。国道一二三号線沿線において山車の巡行等が行われている。

ここに古い形の大間々祇園の様子を示す資料として、昭和十年七月一日の「八坂神社祭典申合事項」の内容の大要を紹介する。

当番町は七月二十一日までに仮宮をその町内に設けること。二十二日の朝、神輿を仮宮に奉安する。そこを祭典中の御旅所とする。

七月三十一日までに各町内にしめなわを張ること。

八月一日の午後七時に夜宮祭（宵宮祭か）を執行し当番町の南端より、各町の代表者参列のもとに獅子をまわす。

八月二日を例祭（本祭）の日とし、当番町において午前十時に大真榊を、十一時に神馬を廻すこと。

八月二日の午後、御旅所前にて祭典を執行すること。

そのあと神輿は町内を渡御する。この順番は当番町を先頭にする。一～三丁目が当番町の場合は先頭を北にして上より、四～六丁目が当番町のときは、先頭を南にして、下より神輿が町内を一巡すること。

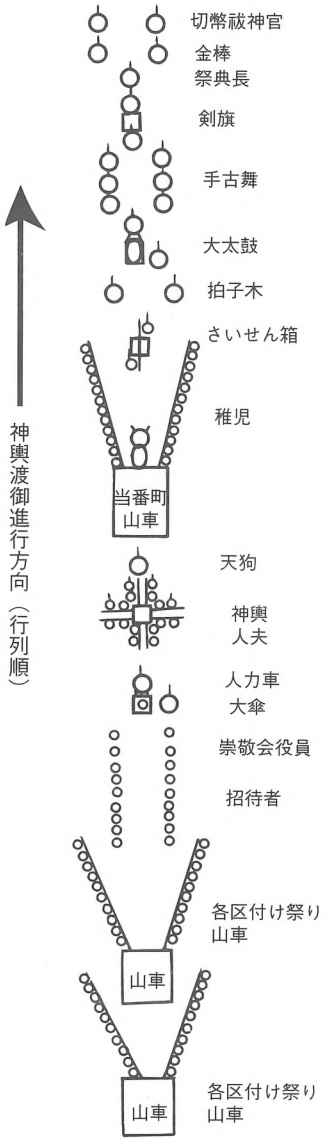
八月三日に神輿の渡御終了後、御旅所前にて渡御終了の手打式を行う。

八月四日には、当番町は神輿、祭器を神庫に格納。獅子は次年度の当番町に送り渡す。

八月五日に当番町は祭典費を集計、各町に割当金額を通知する。各町は祭典費を八月末日迄に当番町に払い込む。

現在の祭典の様子は別図のとおりである。

なお、江戸時代八坂神社（牛頭天王宮）の別当職をつとめた本山派修験大泉院住職の日記（「大泉院日記」）には、天保十三年六月二十五日のところに、「四丁めちさんこ珠之出し二而黒ン坊手踊り」とある。「川越氷川祭礼絵巻」の中にも「黒ンぼふ」の踊りがある。これは江戸歌舞伎系統の出し物という。江戸文化の地方への影響の様子を見ることができるといえよう。



神輿行列図

山車行列（第二街の山車）

| No. | 1丁目 | 2丁目 | 3丁目 | 4丁目 | 5丁目 | 6丁目 | 7丁目 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | かんだばやし | おうま | きりん | おうま | あまだれ | かんだばやし | おうま |
| 2 | きりん | さんてこ | かんだばやし | きりん | きりん | かわちがい | さんてこ |
| 3 | にんば | きりん | おうま | かんだばやし | かんだばやし | さんてこ | きり |
| 4 | さんてこ | にんば | かまくら | さんてこ | さんてこ | にんば | たまぎり |
| 5 | おうま | かわちがい | さんてこ | きり | おうま | きりん | きりん |
| 6 | さんてこだま | かまくら | にんば | たま | にんば | おうま | にんば |
| 7 | にんばぎり | かんだばやし | ばかばやし | にんば | ばかばやし | たま | かわちがい |
| 8 | にんばだま | ばかばやし | | | かわちがい | ばかばやし | かんだばやし |
| 9 | かわちがい | | | | 昇殿（しょうでん） | | |
| 10 | さんてこぎり | | | | かまくら | | |
| 11 | | | | | ねんねん | | |
| 12 | | | | | にんばくずし | | |
| 13 | | | | | かごまわし | | |

各町内の山車のおはやし曲　『大間々町誌　「基礎研究X」　大間々町の民俗Ⅲ』

（井田安雄）

# 世良田祇園祭

**名　称**　世良田祇園

**由来伝承**　尾島町大字世良田に鎮座する八坂神社（旧郷社）の祇園祭である。祭神は素盞嗚尊。明治初年の神仏分離以前は牛頭天王を祀り、新田天王社または新田祇園殿とも称していた。当社の創祀についての明確な記録はないが、永禄八年（一五六五）、世良田長楽寺僧儀哲の記した『永禄日記』の、六月七日の条に「天王祭ヲイタス（以下略）」とみえる。この天王祭りは世良田天王社の祭りと考えられるので、この頃にはすでに当社は勧請されていたとみられてる。また社伝によると、津島天王社（愛知県津島市津島神社）よりの勧請という。

当社の祇園祭は、かつては神田明神と秩父の妙見祭りとならんで、関東三大祭りの一つに数えられていた。ただ、祭りに本格的な構造をもった「引き屋台」の巡行等が行われるようになったのは、当社の縁起書類によると、近世後期以降と推測される。さらに弘化二年（一八四五）に刷られた「上毛世良田略絵図」によると、登場する屋台の台数一一台や巡行する順路等が、近年まで行われてきた世良田祇園祭と全く同様に形成されていたことがわかる。また祭りの主目的は疫病防除を祈念してのものであった。

この祭りも昭和三十二年、新田郡世良田村の東部が同郡尾島町へ、西部が佐波郡境町への分村合併等を機に、従来からの形態を失われ、現在に至っている。その現状は後述するとおりである。

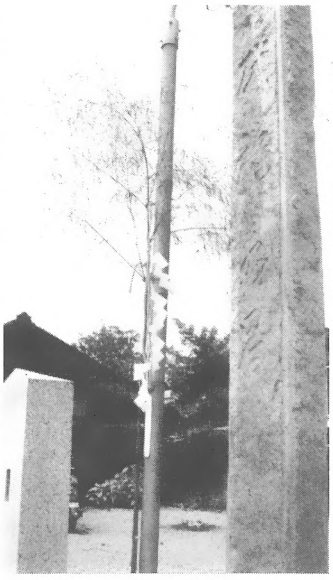
**実施期日**　七月第四土・日曜日（以前は七月二十四日・二十五日。古くは旧暦六月十四日、十五日）

**実施場所**　新田郡尾島町大字世良田　八坂神社

**組　織**　世良田八坂神社氏子

**実施内容**　実施組織　当社宮司（加藤晃氏）・尾島町大字世良田及び粕川より選出されたつぎの役員（大字世良田内は、上町・上新田・今井・大門・新町・南八・下町・下新田・下原の九町より成る）・氏子総代（世良田九町及び粕川より各一名、計一〇名）・行司（上記各地区より四～七名ずつ）・神輿取締り役（九町内より各一名）・神輿番（神輿の担ぎ手。九町内より各若干名）なお、行司以下は祇園祭ごとに一年交代。また、昭和三十二年の分村合併以前は、現境町の大字三ツ木・女塚・境村（栄町）が参加していた。また、この三大字は屋台を一台ずつ持っていた。

祭り行事の次第　七月一日　八丁ジメ張り（立て）　氏子総代により、大字世良田の出入口に当る主要幹線道路の端や八坂神社の入口に当る道路及び大字世良田内の主要道路の交叉点など、およそ一二ヵ所に立てられる。かつての八丁ジメは、道路の両側を跨いで鳥居状に張られた。また、七月十四日に取り片づけて、その材料は天王神輿を安置するお仮屋に使われたという。


八丁ジメ

七月十五日　午後一時三十分頃から、隠居様と呼ばれる天王神輿の渡御がある。渡御の仕方にも変遷があり、現在では「町内持ち」といって、自町内からつぎの町内の神輿番へと、リレー式に担がれている。この神輿は荒れ神輿といわれ、かつては盛んに揉まれたり落とされたりした。

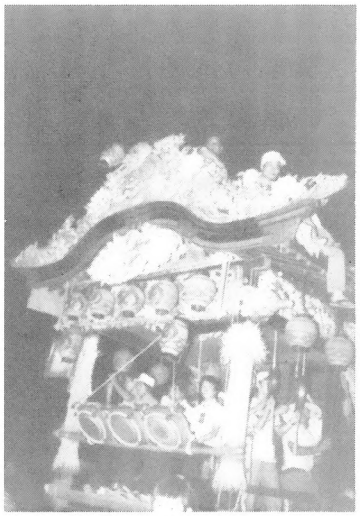
七月二十四日　この夜、屋台の巡行がある。分村以前は全一一台の屋台が、午前零時を期し、「お下り」といって、大字世良田の東端に当る下町区の道路に勢揃いし、明け方まで囃したてた。現在では道路交通法などの関係から、大字世良田の中央を東西に走る国道三五四号線の南北に分れ、午後十時まで、八台の屋台がつぎのように巡行している。

国道北　八坂神社東隣の世良田西公園に大門・上町・上新田・下新田の四台の屋台が集まり、囃したてる（曲名はサンテコなど）。

国道南　他の南八・新町・今井・下町の屋台は自町域のみ囃しながら巡行。

七月二十五日　各町内の屋台は自町域のみ巡行。午後一時、八坂神社より当住様と呼ぶ天王神輿が出御。渡御の仕方は十五日の隠居様と同様である。この神輿が村を一巡して、神社に還御し、神輿内の御神体が社殿内に移されることによって、祇園祭は終了する。以前は、この日の午前十時頃から、前夜に下町地区に集結していた屋台は「お上り」といって、大字世良田西端の上町まで巡行した。途中「屋台芝居」と称し、歌舞伎役者に依頼しての、芝居を演じる屋台もあった。

その他　平成六年頃まで、七月十五日と二十五日には、役員たちによりバクメシ（麦飯）の共食が当社内で行われていた。この時の大麦（ヒキワリ）は、当社の分霊を祀る北群馬郡子持村横堀より納められていたという。また、かつては、氏子たちは天王神輿のお仮屋に、炒った小麦を供えていたと伝える。また七月一日か七日より、祭り終了まで、氏子たちは鮮肉、川魚などを食べないで、精進潔斎の生活をつづけた。こうした精進は、昔ほどきびしくはなくなったが、今でも家によっては守られている。又、キュウリを輪切りにしてはいけない、初ものはかならずは天王様に供えてから食べる、などの禁忌を伝えている。


巡行する屋台

（金子緯一郎）

## 二九　天神待ち

# 丑ヶ渕の天神講・お茶講

**名　称**　天神講とお茶講

**由来伝承**　天神講は子供たちが天神さま（菅原道真）をおまつりする行事で、昔から縁日の二月二十五日の宵まつりとして二十四日に行うことになっていたが、近年はいろいろの都合からその日に近い日、それとも二十四日以前の土曜日の午後やることになっている。

**実施期日**　平成十二年二月十二日

**実施場所**　吾妻郡吾妻町本宿　丑ヶ渕公民館

**実施内容**　天神講は、子供たちの相談から始まる。講には小学生、中学生全員が参加する。宿はほとんどの場合最上級生の家になるのが例であったが、現在は「丑ヶ渕公民館」を使用する。講の日が決まると、会場と青年会へ連絡をとる。それは青年会にお茶講の準備をしてもらうためである。

準備　講の料理は昔から飯、けんちん汁、煮つけ物、羊かんなどが主なものであったが、今は宿の母親を中心に数人の母親達が集まって献立を決め、午前中から調理にかかる。

昔はその春就学する新入児童をお客として招いたが、近年は自分で会食できる子は全部招く。帰宅時間の関係から小・中学生は別々に会食する。

中学生が帰ってくると男子は燈籠を作り、女子は会計の整理をする。燈籠に「奉納天満宮」と文字が書き込まれるとロウソクに火をつけ地区の神社にお参りする。宿にもどり会食する。天神さまの掛軸はない。

お茶講

**由来伝承**　地元では、「お茶講を始めたのは寺子屋の師匠だった橋爪直五郎という人だった」という。直五郎は文化十二年（一八一五）生まれ、寺子屋の師匠であった幕末期頃に伝来過程はわからないが、お茶講が始まったと考えられる。天神さんこと菅原道真は学問の神として信仰され、縁日の二十五日を天神講の日として行事を行っている。当初は「お茶講」そのものを寺子屋学問の一つとして弟子たちにやらせたものとみられるが、後に現在のような若者組そして青年会が主宰する行事に変わってきたのであろう。（本宿地内でも数ヵ所お茶講を行っていたが最近はやめている。）

**実施内容**　お茶講は天神講の宿で夕食後丑ヶ渕公民館の青年会の手で行われている。準備としてお茶少々、障子紙一巻、大小の習字筆、墨汁、半紙、お茶を包んだオヒネリ等を用意する。

宿が公民館なので畳の上に長机を一列に並べ、その上に新聞紙を下敷にして障子紙を長くひろげる。その前に青年全員が座り、筆で一せいに字を書きはじめるが、まずタテ書きに「お茶講」ついで右から左へ一列に「奉納天満天神宮」と書きその後はその年のニュースより文字をひろって書いたりする。

障子紙に漢字・数字を書く

上部の漢字が書きあがると、今度はタテ一行に数字が十個記入される。これには一、一、二、三、客という字を順序を替えて書きならべるが、客という字も数字の一つとしてどこかに入れるが、「テン（天）客」「チ（地）客」と一番上と一番下には書かないきまりがある。例えば平　一客　二―三＝一　二

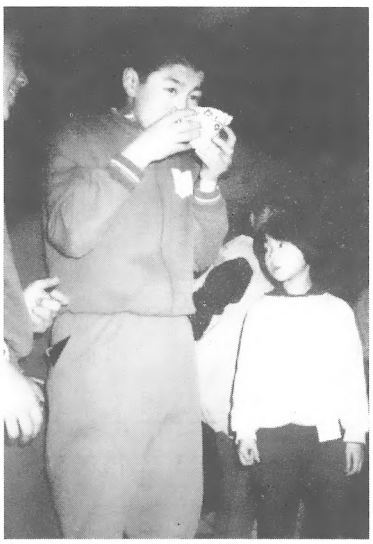
成　＝一　一　二　客―三＝

お茶は日常使用している煎茶を小さくオヒネリにして二つつくる。一つが「白天神」他を「黒天神」の茶とわけて、飯茶碗に入れておく。

用意ができたので書かれた数字の数を確認し、まちかまえていたこどもたちに一行分いくらか金額をきめて売り出される。自分の好きな字のあるものを選んで一行買うものもあれば、一〇行まとめて買うものもある。昭和五十三年来一行は一〇円という。お金を引き替えに各行の下に買ったこどもたちの名前が書きこまれる。お金は本来は天神さんに納めたという。

答合わせは一行の数文字が売りきられると、先に用意しておいた答の短冊を会長が読みあげる。青年たちは各行の数文字を点検し、答のあっているものに印をつけていく。一行分全部黒くぬられたものが黒天神、一行分一つも消えなかったものを白天神という。黒天神、白天神になった者が発表され、前もって茶碗に用意してあったものにお湯がそそがれ、白天神の者から飲む。黒天神の場合も同様で、白天神が多いと縁起がよいという。昔はお茶を半紙に包まず、そのまま茶碗に入れ、飲むときには半紙でふたをして、茶葉を飲みこまないようにした。次の人は半紙をずらして飲んだ。

おわりに、お茶が飲まれている間に、青年たちはお茶講の紙に、白天神の者には白い幹の梅の木や白い梅の花を、黒天神の者には黒い幹に黒い梅の花を描き、公民館の壁面にはり出す。白天神、黒天神のお茶もすみ、天神さまに納めたお金（くじの売上げ金）はこどもたちに戻され、近くの商店から好きな菓子など買ってきて参加者全員でお茶を飲みながらたべる。青年たちは、宿が用意してくれた酒を飲んでから解散する。



お茶を飲む

（丸山不二夫）

## 三〇　お川下げ

# 近戸（ちかと）神社の御川降り

**名　称**　近戸神社御川降神事

**由来伝承**　宮城村三夜沢の赤城神社の近くに「御殿」と呼ばれる場所がある。ここはそのむかし豊城入彦命が居住していたところだという。命は第十代崇神天皇の第一皇子であったが東国治定の命を受けて毛野国に移駐し毛野国を平服したという。

命は七月一日に天地の神々を祀ったが祀りが終了すると、そのことを月田の丸山に屋敷を持っていた長女に報せるため、白く濁った酒（どぶろく）を川に流して祭典の終了を告げたという。

その川を酒の粕を流すことから粕川とよんだという。

この酒を川に流す神事について、享和二年六月に三夜沢の赤城神社の縁起を寺社奉行に提出した文書によると、赤城神社を最初に鎮座した地点から桓武天皇の延暦年間に現在のところに遷宮し、もとのところを元三夜沢とよんだ。

この遷宮のときに富士見村の白い土で土器をつくり神に供えものをした。このとき神酒を醸造したときの酒粕を川に流したので、この川を粕川と言うようになったという。

赤城信仰の一つの方法として現状の荒山を御神体として崇めていたが、その奥宮を近くで拝せるように里宮を近戸に祀った。これは近戸の神と赤城山とのつながりをもつ粕川を伝わって、毎年農耕の神が赤城山から下ってくると考えられていたのではないかという。

その神の里へ下るときに行われていたのがもとの祭りであったのではないかと考えられる。

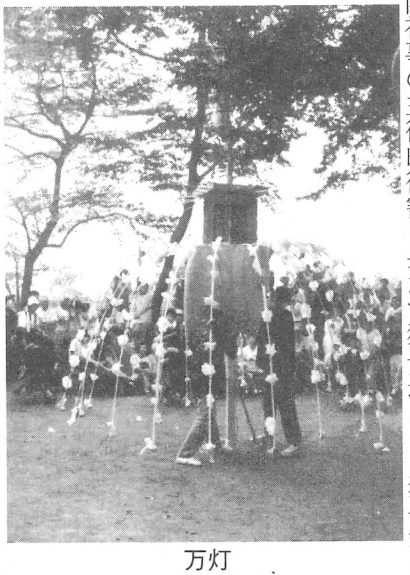
それが近戸神社の神輿が粕川に御神幸になるもとであったと思われるという。またもう一つの見方からすると里宮の神が粕川を伝わって赤城山の奥宮へ神幸するという信仰があったと言えるかもしれない。

**実施期日**　九月一日

**実施場所**　勢多郡粕川村月田　近戸神社

**組　織**　近戸神社氏子　獅子舞保存会

**実施内容**　御川降の神事は九月一日に行われるが、御川降神事の主役的役割を果たす獅子連による獅子舞は近戸神社の祭礼行事として八月二十九日の準備から始まる。



万灯

八月二十九日の準備は近戸神社社掌、区長他役員、獅子舞保存会、舞子連を含めた全員が近戸神社社務所に午前九時に集合し各分担ごとに作業を進める。

万灯作り、花笠の修理等が主な作業である。万灯は頂部に榊の枝を取付けた、およそ一丈三尺の大きさである。

榊の下に一九本の金銀の馬簾を取付けその下に四面四角の提灯を付ける。提灯の正面に「近戸神社」横面に「天下日挟流」裏面に「御祭典」の文字を書き、下に大馬簾二一本、それぞれに五弁の花びら、大水引を取付け心棒には浅黄色の布がまかれ、地付と肩付に白紙がまかれる。

獅子舞

宵祭の八月三十一日は、午後から区長宅で獅子舞の練習成果を披露する。舞は「すり出し」「道行」「後庭」を舞い、獅子連全員が酒肴のもてなしを受ける。

神幸

その後近戸神社へ向かい「道行」を行い、近戸神社で半庭舞い、社掌宅で半庭を舞って宵祭の終了となる。

本祭りの九月一日、まず、社掌宅で「すり出し」「前庭」を舞い、近戸神社で一度舞う。

御川降りの神事は近戸神社本殿で社掌によって神事が行われ、それが終わると神体を神輿に移し、氏子によって担がれ神幸に移る。

神幸の順序は大きな鉾を担ぐ人に次いで、御祓箱、賽銭箱、神輿（四人で担ぐ）、社掌、獅子連、氏子という順序である。

獅子連の順序は、世話役、笛吹き、（六名）歌がかり（四名）カンカチ（二名）、獅子（三名）の構成である。

獅子は獅子頭を被り、上衣は麻襦袢、下衣は麻の武者袴、白足袋に草履ばき、腰太鼓をつけ撥をもつ、氏子総代は紋付きに黒足袋で草履履き、万灯掛りは菅笠をかむり、黒麻羽織を着て麻袴、白足袋に福草履である。

笛吹きは花笠を被り衣装は万灯掛りと同じである。花笠には五弁の飾花と紫の房。社掌は菅笠である。

体勢が整うと笛吹の合図で本殿を七廻り半巡回し南鳥居より村内の神幸に移る。村の西方に位置する粕川の対岸の字大光寺という所に設けられた御旅所に移る。神幸は村内の辻々を巡ってゆくと辻には飲み物を縁台に並べて接待をしている。

神幸の囃子は「登呂里の曲」、「五郎兵衛の曲」、「岡崎」「日挟み」、「撥さばき」、「七ツ拍子」、「大山河原舞」を吹き鳴らしての神事である。

御旅所は方一間、高さ四尺の石垣で、その上に近戸神社の石祠が祀られてあり、神輿をこの上に安置する。

つづいて粕川の流れに行き、酒樽（一升樽）に詰めて持参した神酒をおごそかに流れに注ぐのである。

川に甘酒を注ぐ

御旅所に神輿を安置

この酒は甘酒である。この祭りを一升甘酒祭というのもここからきているのである。これがすむと、待っていた獅子舞連によって一人立ち三頭の獅子舞が演ぜられる。獅子舞は全部行われず、一曲だけしか振られない。

奉納の獅子舞がすむと、供養者に神酒が分けられ、それがすむと神輿はふたたび往路の行列と同じく神社に帰る。

以上で近戸神社の御川降りは終了するが神社では夕刻からまた盛大な獅子舞がはじまる。牡獅子がくしの舞である。「牡獅子がくし」は後庭のすりこみの直後に、笛の誘導で、三頭が争うしぐさを続ける。左、右、左と攻撃を繰り返し、二回ずつ勝利のしぐさをすませて、しゃぎりに移る。

後庭の舞に移り、撥差しをして七ツ拍子、しゃぎり（大山河原）で終る。

（川村勝保）

## 乙父神社のお川下げ

**名　称**　お川下げ

乙父集落の鎮守乙父神社の祭礼には神輿が神流川の川瀬にお川下げ（渡御）して神事を行う。神流川上流域の奥多野山中の村々の鎮守祭りには、神輿のお川下げ神事が各地で行われ地域の特色を示す。

**由来伝承**　奥多野山中は古くは甘楽郡に属し、乙父神社の祭神は富岡市一ノ宮の貫前神社の分神で姉妹の姉神という。乙父五郷の神々を合祀し乙父神社と称するにいたった。

**実施期日**　四月五日　春祭りだけ行う。各コウチ（小字）の小祠では春秋に小祭りをする。

**実施場所**　多野郡上野村乙父字森戸の乙父神社、及び乙父字遠西の神流川の川瀬。

藤岡市街地から約六〇キロ神流川に沿って南西の山中へ入り、上野村乙父の集落から約一〇〇メートルほど北の山腹へ幅約三尺、八九段の石段を登った境内の西側に乙父神社が東面して鎮座する。拝殿は天保十二年建立の平屋造りで間口六間×奥行三間、奥に本殿間口三間×奥行三間が鎮座。拝殿で祭式を行い、神社から下って約五〇〇メートル神流川の上流の川瀬に神輿をお川下げ（渡御）して神事を行う。

**組　織**　神主四人（内地元三人）、祭典委員長一同副委員長二　会計二　計五人（任期三年）、他に氏子総代一〇　伍長六　神輿供奉八　シャギリ一四（カンカノー踊り四　ハヤシ七）

乙父は一二の小字（枝村、コウチと呼ぶ小集落）に計一二五戸ほどが神流川沿岸や谷合いに分布する。

**実施内容**

祭り前々日

四月三日に氏子が出て祭りの準備にかかり神流川の川瀬に川原石を四角に積み笹竹四本を立てシメ縄を張り回し神輿の御台所を作る。伍長は旗立て役で大鳥居の脇にのぼり旗二本を立てる。以前は各コウチでものぼり旗を立てたが、現在は乙父大橋南側に一本立てる。大鳥居には稲ワラをよって大蛇の形のシメ飾りを作り下流（東）に頭を向けて飾り付ける。各班長は各戸を回り祭典費一戸二五〇〇円を集金する。

祭り前日

お供え用の餅つきを行い（以前は村神主相馬悦次家でついたが、現在は社務所）、重ね餅一組や三角餅（直角三角形、厚さ一センチ、底辺四センチ、斜辺五センチ、高さ二・五センチほどに切る）二膳分を作る。オシメ（シメ飾り）を乙父集落の上・下の境の道端に張る。女衆も出て直会用の料理を作る。

祭り当日

本祭りは午後十一時ごろ打上花火を合図に村人が乙父神社に集まって開始される。拝殿の南側に設けられた受付を済ませた参拝者は、接待係の女衆に酒を注がれて身を清め境内に群れて拝殿の祭式を見守る。拝殿内の南側に神主四人が並んで北を向き、北側には神輿供奉八人の若衆が黒紋付羽織袴で相対して座り後方に区役員ら九人が控えて座る。祭典委員長が立って開式を告げ式次第を呼称し、神主が司祭して祭式（典儀）

が厳粛に進められる。

「典儀」修祓・御簾後取・鍵後取・開扉・献饌案後取・献饌・膝敷後取・祝詞後取・斎主祝詞奏上・祝詞後取・膝敷後取・玉串案後取・玉串後取・斎主玉串奉奠・撤饌・神輿神前進・膝敷後取・神霊神輿移・祝詞後取・発輿祝詞奏上・神輿渡御・川瀬・神霊本殿鎮座・膝敷後取・祝詞後取・還幸祝詞奏上・祝詞後取・膝敷後取・閉典

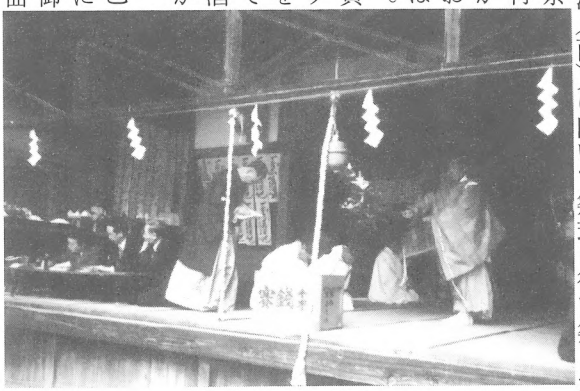
（後取は役のこと）

祭式は神主のお祓い後本殿に献饌・祝詞・玉串奉奠、神輿にご神体を移して渡御に移る。

正午に神輿のお川下げの行列が組まれ、囃子連が先頭に並び笛五　鉦二　大太鼓一　締め（小）太鼓三で賑やかにシャギリ、続いて助神主が清め、総代が神鏡を持ち神主が先導して神輿が八人の若衆に担がれて出発。後ろに神饌を持った伍長や一般参拝者が続く。

オネリの行列は県道に出て西へ向かい、神流川に降りて川瀬の御台所まで約五〇〇メートルを進む。若衆ははだしで川瀬に入り御台所を三回右回りして、神輿を据えると、神主が上流（西）に向いて祭式を行い祭りが頂点に達する。祭式がすむと、再び神輿の行列が神社に還ってお川下げの神事はすべて終了する。神饌を下げ役員が庭に出てオグフウの三角餅を参拝者に配って回り直会の神酒が注がれ和やかな酒宴に移る。

シャギリは乙父神社囃子連によって神輿渡御の道中に一四曲が演奏される。オネリ・カサボコ・オカサギ・ヨセバヤシ（祝詞後に川原で囃す）・ネリカエシ・カンカンノー・カゾエバヤシ・シャギリ・リョウゴクバヤシ・カジヤバヤシ・オカメバヤシ・ツリガネバヤシ・バカバヤシ・オオミヤバヤシ・曲名不詳



神主による祭式

午後二時から境内で余興や酒宴が行われたが、現在は乙父構造センターに会場を移し独特のカンカンノー踊りや地芝居などが上演され、二〇〇人ほどの人々が詰めかけて賑やかに楽しい時を過ごす。

祭り翌日

千秋楽といって後片づけを行いのぼり旗を倒しお祭り勘定をする。

（関口正己）

## 平塚赤城神社のお川入れ

**名　称**　お川入れ

**由来伝承**　当社に安置する懸仏二体（二面）を利根川の川瀬に浸して、洗い浄める神事である。その起源年代は当社の創祀年代と共に定かではないが、懸仏二体（直径約三〇センチ）には「平塚郷赤城大明神　永禄十三庚午年八月十五日」の刻銘がある。享和元年（一八〇一）に新調した懸仏収納木箱には「御神祀毎年七月六日夜丑刻」との墨書があり、当時はこの日時に行われていたと推測されている。

当初、この神事は、赤城山大洞の赤城神社から当地に分霊を勧請したと伝える平塚在住の渋沢家の司祭であったが、のちに氏子衆に引き継がれ、現在に至っているという。渋沢家の祖先は新田氏の家臣で、戦国期には太田金山城の由良氏に仕えていたと伝えている。

**実施期日**　七月七日

**実施場所**　佐波郡境町平塚　赤城神社

**組　織**　氏子総代（六名）と祭り世話人代表（一〇名、年交代）が主体となり実施。

**実施内容**　午後六時（これ以前は同十時）、尾島町世良田八坂神社の加藤宮司（兼任）を迎え、社殿内で式典が行われる。氏子総代と世話人は白装束に身支度を整え、これに参列する。式典が済むと懸仏の入った木箱を頭上に奉持した氏子総代（祭主役）を中心に行列を組み、当社の南方を流れる利根川に設けた祭場に向けて出発する。この祭場は、かって賑わった平塚河岸の跡地に当たる。到着すると、祭主役ほか二名の役員によって、懸仏を川瀬に三度、素早く浸して洗い浄め、木箱に納める。この時、切餅と大量のキュウリが川瀬に流される。かっては、これを拾って食べると、無病息災でいられると信じ、氏子たちは争って求め合ったという。こうして、お川入れが済むと、ふたたび行列を組み、同じ道を通って神社に帰り、直会となる。以前はこの日に、当社末社（現合祀）の大杉社の神輿が平塚の船頭衆に、勇壮に担がれて村内を渡御したという。この大杉社は、近世の中期頃、水難防止を祈念して、当地の水運関係者が勧請したものと伝えている。大杉神輿の渡御は、明治四十一年まで続いていた。

お川入れの神事

（金子緯一郎）

## 土生神社のお川下げ

**名　称**　お川下げ

鎮守の祭典にあたり神輿を神流川の川瀬に渡御して神事を行うので「お川下げ」と呼ぶ。

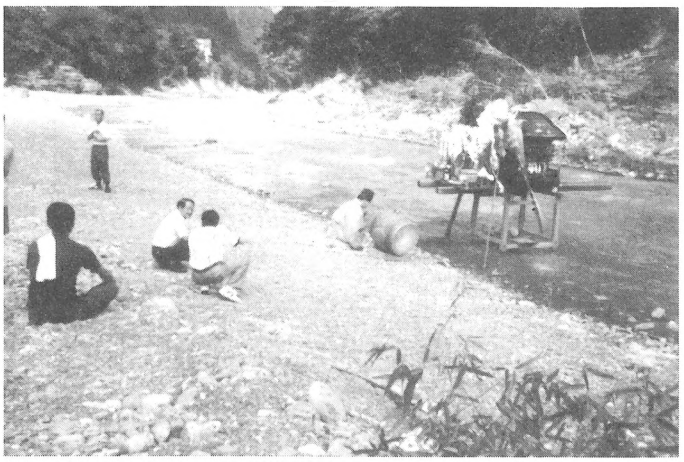
**由来伝承**　土生神社の祭神は埴安姫命、慶長十五年建立の棟札があり、土中から得た奇石（石棒カ）を神体とし土生大明神と称したと伝える。

**実施期日**　九月第一日曜日　例祭日は旧暦八朔（八月一日）で天明五年ごろより神輿のお川下げを行ってきたが、その後新暦九月一日となり、現在は九月第一日曜日。

**実施場所**　多野郡万場町小平字元郷　土生神社及び神流川の川瀬

**組　織**　氏子約六〇戸のうち順番制で役割に就く。「土生神社祭典行列役割」（表）が横長の紙に筆書して拝殿北横側に貼り出され、三四名の役割の氏名と行列順が示される。役割は次の通り。

散米・御刀・御鉾・宝剣・大榊・小榊・宝幣・小幣・御剣・金御幣・御魚・御供花・御神酒・御鏡・五行・三神・二祇神・大麻・銘旗・納鏡（氏子総代）・小剣・御輿（八人）御囃方（五人）、（地元の祢宜が神事を行う）



神輿を御座所に安置し祢宜が岸に座り祭式を行う

**実施内容**

祭り前日

氏子が出て祭りの準備、境内の清掃、のぼり旗二本を立て、神流川にお川原様という御座所を石を積んで設けたが、今は木枠を据える。

祭り当日

午前十時に氏子が神社（東を向く）に集まり、神輿を飾り付け拝殿前に外（東）向きに置く。社務所で幣束・竹ヒゴの花飾り六〇本などを手分けして作り、昼食を取る。

午後一時に奥に本殿のある拝殿に役員一人が座り祢宜により神式を行うと、役割に従い社前に並ぶ。神輿の一行は散米をまきながら社を一回りして出発、神輿はトラックに乗せ一時五十分に川原に到着。神輿を東流する川瀬の御座所に北（岸）向きに据えて、午後二時に祢宜が相対して座り祭式を行う。済むと役員がお櫃の御御供の四角の餅を参拝者に配り、御神酒を注いで回り、大小の太鼓を打ってシャギリ四曲が演奏される。神輿を飾った花飾りが一本ずつ配られる。二時半には帰途につき、神社に戻ると再び社を一回りして、神輿を拝殿内の庫に納め、三時にはのぼり旗を倒し一切を終了すると社務所兼公会堂で直会に移る。

（関口正己）

# 第四章　群馬の祭り・行事一覧表

凡　例

1　本章は、基礎調査票にもとづいて作成した群馬県内の祭り・行事一覧表である。

2　この表には、実地調査報告で取り上げた祭り・行事は載せていない。また、基礎調査表で提出された祭り・行事の中から、事務局の判断で選択した祭り・行事を載せているため、基礎調査表で提出された件数よりかなり少なくなっている。その結果、ほとんど祭り・行事が一覧表にのっていない町村もあるがご理解願いたい。

3　テーマ番号は、第１章であげた、全国共通テーマと群馬県独自テーマの番号に対応する。

4　旧町村名は、基礎調査地区割をした町村に対応する。基本的に明治22年の市制町村制施行時のものであるが、一部の町村ではさらに地区を細かく分けてある。

5　伝承は盛ん・順調・危機・廃絶の４つに区分した。

6　指定の「県」は県指定、「市町村」はそれぞれの市町村指定であることを示している。

# 群馬の祭り・行事一覧表

| 番号 | ﾃｰﾏ | 市町村名 | 旧市町村名 | 行事名 | 所在地 | 行事日 | 組織 | 行事概要 | 伝承 | 指定 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 17 | 片品村 | 片品村 | 十二様 | 村内一円 | 1月12日 | 小字行政単位（28単位） | 山の神に対して、お神酒を上げ五穀豊穣、村人の安全祈願をする。 | | |
| 2 | 8 | 水上町 | 水上町（藤原） | 藤原諏訪祭 | 藤原諏訪神社 | 8月17日（旧7月27日） | 藤原獅子舞保存会 | 五穀豊穣を目的とした祭り。獅子舞及び奉納相撲を行う。 | | |
| 3 | 22 | 川場村 | 川場村 | ドンドン焼き | 谷地スポーツ広場 | 1月15日（1月14日） | 村商工会青年部 | 昭和57年復活、お正月の飾り松等のおたきあげをする行事 | | |
| 4 | 24 | 〃 | 〃 | 念仏講 | 川場湯原太郎大日堂 | 彼岸の中日（彼岸の入りと明け） | 太郎地区住民 | 大日堂内で念仏を唱え、数珠を右回しで送る。 | | |
| 5 | 22 | 白沢村 | 白沢村 | ドンドン焼き | 高平新井橋場道祖神前 | 1月14日 | 高平地区 | 厄年の人が中心となり、各戸の松飾り等をたきあげる。 | | |
| 6 | 17 | 〃 | 〃 | 十二様の例祭 | 高平 | 2月12日、8月12日（毎月12日） | 高平地区 | 高平には8ヶ所の十二様が祀ってあり、2月と8月の12日の日のみ年2回祭る。 | 順調 | |
| 7 | 17 | 〃 | 〃 | 十二山神社春祭り | 岩室十二山神社 | 4月12日 | 岩室地区 | 山の神を祭るもので、塩を供え、地域中の米を集めて赤飯をつくり、参詣者に渡す。 | 順調 | |
| 8 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 高平八坂神社 | 7月（7月23日） | 高平地区 | 萬燈を飾った神輿を出して村中で祭る。 | | |
| 9 | 12 | 〃 | 〃 | エーチョ祭り | 生枝生枝神社 | （9月末） | | 社殿のまわりを供え物を持って「今年もエーチョ、来年もエーチョ」と言いながら3回まわる。 | 廃絶 | |
| 10 | 29 | 〃 | 〃 | 天神様祭り | 高平天神山 | 11月23日（2月） | 高平地区育成会 | 子供たちが村内を寄付集めを行い、天神様を掃除し、くじを引いてもらう。 | 順調 | |
| 11 | 22 | 昭和村 | 糸之瀬村<br>久呂保村 | ドンドン焼き | 村内5ヶ所 | 1月中旬 | 子ども会育成会 | 子供たちが中心となり、正月の松飾り等のおたきあげを行う。 | 順調 | |
| 12 | 24 | 〃 | 糸之瀬村 | なんまいだ（百万遍） | 糸井地区 | 6月下旬 | | 無病息災・害虫駆除の儀式として子供たちが先頭にボンゼン、鉦をかつぎ、その後に大きな数珠をもち行列を組んで各戸をまわる。 | | |
| 13 | 24 | 〃 | 久呂保村 | なんまいだ（百万遍） | 橡久保地区 | 8月下旬 | | 無病息災・害虫駆除の儀式として子供たちが先頭にボンゼン、鉦をかつぎ、その後に大きな数珠をもち行列を組んで各戸をまわる。 | | |
| 14 | 3 | 〃 | 〃 | つっかけまんどう | 川額地区八幡宮 | 9月28日～9月29日 | 子ども会育成会 | 2基のまんどうが、神社に飾られた後、やぐらの周りをぶっつけ合ってまわる。 | 盛ん | |
| 15 | 17 | 沼田市 | 沼田町 | 十二山神まつり | 柳町 | 旧2月12日 | | 町内の十二軒の仲間で講をつくり山の神の信仰を行っているものである。 | 盛ん | |
| 16 | 27 | 〃 | 〃 | お観音様 | 鍛冶町 | 4月28・29日（旧3月18日を中日） | 正覚寺 | 百体観音の祭典でお観音様と呼ばれる。観音堂が開かれ、境内には見世物小屋や出店などが出て、市が開かれる。 | 盛ん | |
| 17 | 15 | 〃 | 〃 | 茅の輪くぐり | 中町須賀神社 | 8月31日～9月1日（旧7月25日） | 須賀神社氏子連 | 須賀神社の祭神須佐之男命が仏教の魔除けの神、蘇民将来と結びつき茅の輪を掛けて疫病から免れた故事にならい、茅の輪をくぐると悪魔除けとなる。 | 盛ん | |
| 18 | 15 | 〃 | 〃 | 原田の火祭り | 高橋場町 | 旧10月15日～16日 | | 祭りが近づくと子供たちが農家をまわり、まき・豆がらなどを集め、それを夜燃やす。この火は悪魔を払い、疫病除けとなる。 | 盛ん | |
| 19 | 23 | 〃 | 利南村 | 富士大権現まつり | 新町 | 消滅 | 富士浅間神社？ | 富士浅間信仰の一つでワラを盛大に燃やし、境内では相撲大会が行われていた。 | 廃絶 | |
| 20 | 15 | 〃 | 池田村 | 獅子神楽 | 岡谷町 | 4月3日 | 岡谷地区 | 獅子頭を使い、悪魔払いのために舞う太々神楽であり、岡谷地域の各家をまわる。 | 順調 | |
| 21 | 24 | 〃 | 薄根村 | 百万遍 | 町内 | 7月7日～7月9日 | | 地区を2つに分け（西と東）、夕方より子供達が鉦や太鼓を鳴らしながら数珠を持って村中の各戸の庭をまわる。 | 盛ん | |
| 22 | 12 | 〃 | 川田村 | 湯の平地蔵春まつり | 岩本町田幸地蔵峠 | 3月21日 | | 地蔵峠の湯の平地蔵が祀られ、この地蔵は子育て、無病、旅人の安全を願うとされ、祭日にはクジなども行われる。 | 順調 | |
| 23 | 17 | 〃 | 〃 | 天狗さま | 上川田町東光寺、鏡山 | 4月1日・10月1日 | | 鏡山（天狗山）はコブトリ天狗と呼ばれ、コブを取ってくれるといわれ、鏡山神社に進ぜられた小石を祭日に借りて来て、患部をなでるとなおる。 | 順調 | |
| 24 | 15 | 〃 | 〃 | マダラ様のまつり | 下川田町十二越 | 4月24日・9月24日 | 下川田地区 | 遷流寺持の摩多利尊を祀るもので、祭日には護摩が焚かれ、のぼり旗が立てられ、お札が配られる。 | 順調 | |
| 25 | 17 | 〃 | 〃 | 高瀬の春まつり | 屋形原高瀬戸の観音堂 | 4月28日 | | 馬の守り神様として知られる観音様で、馬が病気・怪我の時や出かけるときにお参りをして馬の無病息災・旅の安全を祈る。 | 順調 | |
| 26 | 2 | 月夜野町 | 桃野村 | 茂左衛門地蔵尊縁日 | 月夜野千日堂 | 3月21日・9月23日 | 茂左衛門保存委員会 | 領主の悪政から命をかけて領民を救った茂左衛門の故人をしのび刑場近くに地蔵尊、千日堂を建てて春と秋の彼岸を縁日とし、祭る。 | 順調 | |
| 27 | 28 | 〃 | 〃 | 月夜野の祇園祭り | 月夜野町組地区 | 8月1日～3日 | 祇園祭実行委員会 | 沼田藩の2大祭として知られ、祭りは組毎に大幟を立て、町内を神輿の渡御がある。一時中断したが、復活した。 | 順調 | |
| 28 | 8 | 新治村 | 久賀村 | 駒形観音祭 | 須川駒形山 | 旧3月10日、10月10日 | 須川在住信者 | 牛馬の絵馬、お札を受けることができ、御神酒を振舞う。 | | |
| 29 | 25 | 〃 | 〃 | 十二社神社例大祭 | 永井十二神社 | 4月12日 | 保存会 | 獅子舞を奉納後、村内各戸をまわり、悪魔払いを行う。途中2回神楽を行う。 | | |
| 30 | 2 | 〃 | 久賀村<br>湯ノ原村 | 祇園祭 | 須川・湯宿・布施 | 8月1日 | 各地区単位 | 式典後、山車、神輿の巡行。 | | |
| 31 | 8 | 〃 | 久賀村 | 小池祭 | 東峰須川 | 旧11月初午の日 | 関係者 | 小池、本多、綿貫の一族の祭りである。一定の場所でホコラを作り、親戚一同が参加してお参りする。 | 順調 | 県 |
| 32 | 5 | 〃 | 湯ノ原村 | 地蔵まつり | 下新田但馬院 | 11月23日 | 但馬院檀家 | 世話人が地区から白米の寄進をお願いし、集まった白米を製粉して団子を作り上げ、お供えするとともに、団子投げが行われる。 | | |
| 33 | 22 | 高山村 | 中山村 | ドンドン焼き | 本宿5、五領2、判形3 | 1月14日 | 各地区単位 | 子供たちが中心となり、正月の松飾り等のおたきあげを行う。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 34 | 24 | 高山村 | 中山村 | 百万遍 | 中山五領 | 1月27・28日（9月27・28日） | 五領共和会 | 法信寺住職により読経。参詣者により大きな数珠を廻しながら念仏を唱える。 | 危機 | |
| 35 | 17 | 〃 | 〃 | 十二講 | 中山・新田・清水谷 | 2月12日、旧10月12日 | 清水谷組 | 十二神社に供物を捧げ、7戸の構成員が寄り集い食事をとる。 | 順調 | |
| 36 | 8 | 〃 | 〃 | 落岩講 | 中山・新田・清水谷 | 3月15日、旧10月15日 | 清水谷組 | 中山古城（落岩）の城明神の石宮を祀ったものが落岩講である。明治の頃からの伝承だが、現在は7戸の家で石宮に供物を捧げ食事をとる。 | 順調 | |
| 37 | 8 | 〃 | 〃 | 弘法様 | 中山・原・谷地 | 3月21日・9月23日 | 谷地組 | 弘法様舎屋で行われる祭り。昭和初期までは原全体の祭りであったが、戦時中中断され、復活したものの周辺の家11戸のみの祭りとなった。 | 危機 | |
| 38 | 8 | 〃 | 〃 | お天狗様 | 中山・本宿・清水谷 | 4月8日・10月8日 | 2区（本宿）信徒 | 迦葉山講との関連で、天狗大明神が祀られた。法信寺住職による祈祷後、振舞いがある。かつては露天商も出た。 | 順調 | |
| 39 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 中山五領 | 7月下旬の土・日（7月25日） | 五領共和会 | 神事の後、子供・大人の神輿が集落内を練り歩く。 | 順調 | |
| 40 | 19 | 〃 | 〃 | 百八灯 | 中山新田 | 8月16日（9月16日） | | 百八燈は迎え盆に行うのが一般的だが、新田では送り盆に行う。墓から家までの道々に百八本の篠竹に蝋燭を挿し、点す。 | 順調 | |
| 41 | 17 | 〃 | 〃 | お十二様 | 中山判形・向井 | 11月11・12日2月11・12日 | 向井判形組 | 廻り番の宿に山の神の掛軸をかけ、供え物をする。次の日は道具休めで山仕事はしなかった。 | 順調 | |
| 42 | 8 | 〃 | 尻高村 | 不動様祭 | 尻高戸室 | 1月27・28日 | 氏子会 | 10日に不動籠りを数人で行い、当日は不動様を拝んだ後、食事をする。不動様は火ぶせの神なので、火を扱う女性が主に参拝に来る。 | 危機 | |
| 43 | 26 | 〃 | 〃 | 金甲稲荷祭 | 尻高関田 | 2月10・11日（2月初午前日、当日） | 7区（関田） | 関田稲荷神社での神事後、山車に子供がお囃子連としてのり、地区内を引き回す。 | 盛ん | |
| 44 | 26 | 〃 | 〃 | 初午祭 | 尻高北之谷・熊野 | 2月10・11日 | 10区、11区住民 | 北之谷稲荷に供え物をし、福引等を行う。 | 盛ん | |
| 45 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 尻高火の口 | 8月第一日曜（8月1日） | 火の口同会 | 神事の後、神輿をかついで集落内をまわる。 | 順調 | |
| 46 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 尻高北之谷 | 11月1日、5日 | 北之谷地区 | 夕方から、囲炉裏に炭火をおこし、電気のない暗い部屋でローソクを灯し、来客を迎えて食事をする。 | 危機 | |
| 47 | 8 | 中之条町 | 中之条町 | 秋葉さま | 伊勢町只則地内 | 1月7日 | | 祭典幹事だけでお祭りをする。 | | |
| 48 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 西中之条 | 1月14日 | 西中之条講中 | 小正月の行事として、門松を集めて燃やす。 | | |
| 49 | 22 | 〃 | 〃 | 鳥追い祭り | 西中之条 | 1月14日 | 〃 | | | |
| 50 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 伊勢町只則地内 | 1月14日 | 只則講中 | 昔は子供中心で行っていたが、区で行うようになった。 | | |
| 51 | 8 | 〃 | 〃 | 不動祭り | 青山染川宅内不動 | 1月28日 | 世話役4人回り番 | 2寸くらいの石の不動が本尊。婦人が主に参拝し、賽銭として菓子類をもらう。 | | |
| 52 | 17 | 〃 | 〃 | えびす講 | 中之条 | 1月20日・11月20日 | | 今は目だって行われていない。 | | |
| 53 | 17 | 〃 | 〃 | えびす講 | 西中之条 | 1月20日・11月20日 | | 今はあまりやらなくなった。 | | |
| 54 | 26 | 〃 | 〃 | 亀石稲荷祭り | 市城講員の家 | 2月11日 | 六人で講をつくる。 | 宿は持ちまわり、2月9日は供え物つくり。10日は女が稲荷宮の掃除。11日は祭日。夜は庚申講で掛軸を飾る。 | | |
| 55 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷祭り | 青山原の稲荷のお宮 | 2月11日 | 1年交代で世話人 | 参拝者はお賽銭、甘酒を振舞う。宮崎神主が拝む。 | | |
| 56 | 26 | 〃 | 〃 | あさ山大黒天まつり | 西中之条 | 2月11日 | 西中之条講中 | ミニ市がでたり、くじ引きを行う。 | | |
| 57 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷様まつり | 伊勢町 | 2月11日 | 伊勢町講中 | 塚間の稲荷様でお祭りをする。お札・ハタを参拝にきた人にくれる。神主もたのむ。 | | |
| 58 | 8 | 〃 | 〃 | 観音祭り | 青山円通寺跡の観音堂 | 3月下旬の日曜日 | 青山講中 | 宗福寺の和尚が拝む。各戸で福引を出す。 | | |
| 59 | 17 | 〃 | 〃 | 地神講 | 伊勢町 | 春秋の社日の日 | 講中 | 宿に集まり掛軸を掛け、拝んで酒食をともにする。20人ほど。 | | |
| 60 | 17 | 〃 | 〃 | 十二講 | 伊勢町 | 4月第1日曜日 | 講中 | 昔は2月1日であった。神主に来てもらい、宿（回り番）で酒食をともにする。五良明神も一緒にお祭りをする。 | | |
| 61 | 17 | 〃 | 〃 | 太子講 | 伊勢町 | 4月20日頃 | 講中 | 宮は吾妻神社の南、名久田川の崖中。代参の後、全員集まりお札を配り費用を集める。代参の前後におたきあげ。 | | |
| 62 | 28 | 〃 | 〃 | 天王祭り | 青山永井正巳宅 | 7月21日 | 以前は子供たち　青山講中 | かつては、子供たちが宮を担ぎ、各家を回り、太鼓をたたきお払い。現在は地内を回らない。 | | |
| 63 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 中之条 | 8月1日 | 中之条講中 | 昔は6月だったが、農繁期のため8月1日に変更されている。 | | |
| 64 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 伊勢町 | 9月第1土・日曜日 | 伊勢町講中 | | | |
| 65 | 8 | 〃 | 〃 | 二十三夜講 | 伊勢町 | 毎月23日 | 講中（女性） | 以前は太陰暦の23日に宿に集まり歓談して月の待ちで全員で月を拝んで解散。現在は太陽歴。4・10月大祭。 | | |
| 66 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰講 | 伊勢町 | | 講中 | 9戸（上6下6）、代参4人、行く前に古いお札をおたきあげする。帰ってから代参、お家に集まり札を配り、歓談。 | | |
| 67 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉山 | 青山 | 毎月7日、5～8月は農繁期で休 | 5～9人ほどのグループ | 秋葉尊や秋葉神社と記す掛軸を拝み、線香を立てる。飲食や世間話をする。 | | |
| 68 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 横尾名久田・竪丘・長石・長久保 | 1月14日 | 各組単位 | | | |
| 69 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さま | 横尾長久保 | 1月24日頃 | 長久保中 | 神官による社前祭後、厄年の者による清酒等の配付。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 70 | 17 | 中之条町 | 名久田村 | 地神様 | 横尾栃瀬 | 3月と9月の社日 | 有志3戸 | 掛軸を飾り、地神を祭る。 | | |
| 71 | 8 | 〃 | 〃 | 石食稲荷祭り | 横尾山中 | 4月9日頃 | 高津・長久保全域 | 太々神楽奉納、福引。 | | |
| 72 | 8 | 〃 | 〃 | 八幡様 | 横尾八幡神社跡 | 4月15日頃 | 八幡・西久保・上の原中 | 神を祀り、直合を行う。 | | |
| 73 | 8 | 〃 | 〃 | 大日如来まつり | 横尾八幡神社跡 | 4月18日頃 | 栃瀬中 | 五色旗を立て、戦死者供養。輪番宿で掛図を掲げる。 | | |
| 74 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 横尾長久保中 | 4月29日 | 長久保中組 | 大般若の日に代表2名（輪番）が赴きお札を受けて帰り全戸へ配る。 | | |
| 75 | 17 | 〃 | 〃 | 十二講 | 平字妻 | 1月11日 | 字妻有志 | お日待ちにつき11日に行われる。宿は講中各戸巡回。 | | |
| 76 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 平字妻・2区・3区・4区 | 1月14日 | 各地区単位 | | | |
| 77 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰講 | 平字妻 | 1月19日 | 字妻有志 | お日待ち。 | | |
| 78 | 8 | 〃 | 〃 | 不動様 | 平3区・4区 | 1月28日 | 婦人有志 | 長晃山の涌き水へ水貰いに登る。 | | |
| 79 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷様まつり（初午） | 平字妻 | 2月11日 | 字妻中 | 1戸1人が出てかさぼこを作り灯籠をたてる。 | | |
| 80 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷様まつり | 平 | 2月11日 | 世話人8人 | 平稲荷神社例大祭。平の3・4区で祭る。宵に行灯50個を奉納する。幟を立て、太鼓を奏す。 | | |
| 81 | 8 | 〃 | 〃 | 毘沙門天祭り | 平堂の庭 | 春分の日 | 平中・総代及び世話人 | 大般若の後、平獅子舞を奉納。 | | |
| 82 | 8 | 〃 | 〃 | 不動様のまつり | 平字妻 | 3月28日 | 字妻中 | 参拝人に赤飯・酒を呈す。 | | |
| 83 | 8 | 〃 | 〃 | 観音様の祭り | 平字妻・白井沢 | 4月18日 | 白井沢 | 供物を捧げ、参拝者には赤飯を振舞う。 | | |
| 84 | 17 | 〃 | 〃 | 十二神 | 平遠望山山頂 | 9月19日 | 平中 | 供物・赤飯・清酒を捧げ、登山道に添い糸を張る。 | | |
| 85 | 8 | 〃 | 〃 | しょうぼう講 | 平字妻 | 12月5日 | 字妻有志 | 現在講中3名、各戸輪番。毎回膳立てをし、小豆粥を食す。「しょうぼう」の意味は不明。 | | |
| 86 | 8 | 〃 | 〃 | 西向き観音祭り | 大塚西向き観音 | 1月18日 | 大塚の区長、祭り世話人 | 昔は若者が音頭をとる。寄付を出し、くじ引きなどもある。 | | |
| 87 | 8 | 〃 | 〃 | 十二講と祭り | 大塚十二さん参道・境内 | 2月10日昼と宵 | 竹貝戸集落の人 | 以前は毎月宿持ち回り、神楽・相撲をした。今は年一度、2月10日、昼は境内で飲食、夜は参道に行灯を灯す。 | | |
| 88 | 8 | 〃 | 〃 | 越尾不動祭典 | 大塚不動堂境内 | 4月と9月の28日（今は近い日曜日） | 9区区長、班長8人 | 新潟県の菅谷不動を勧請。以前は獅子舞もあり。お経の後、くじ引きや飲食。 | | |
| 89 | 8 | 〃 | 〃 | 八幡神社の祭り | 大塚八幡神社境内 | 10月10日前後の日曜日 | 11区 | 秋の道普請終了後、幟、太鼓。 | | |
| 90 | 8 | 〃 | 〃 | 塩釜さんの講 | 大塚竹貝戸 | 月末の都合の良い日 | 竹貝戸の3軒で講 | 女性の講。以前は隣村尻高の人も参加。茶菓子と雑談。 | | |
| 91 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷様 | 赤坂12区・13区 | 2月11日 | 12区・14区 | 幟を立て、懇談。 | | |
| 92 | 29 | 〃 | 〃 | 天神講 | 赤坂釜渕 | 2月25日 | 釜渕17戸 | 講中17戸より輪番宿に集合、供え物の後、懇親。 | | |
| 93 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 赤坂薬師堂 | 4月8日 | 下赤坂（12区）42戸 | ご馳走持参し、懇談。百万遍の数珠・古文書保存。 | | |
| 94 | 17 | 〃 | 〃 | 十二様 | 赤坂13区 | 4月12日・10月12日 | 13区 | 寄付を募り、供え物をして祭る。福引を行う。 | | |
| 95 | 8 | 〃 | 〃 | お天狗様 | 赤坂12区天狗社前 | 4月15日 | 下赤坂（12区） | 神主を招いて祀る。後、懇親。 | | |
| 96 | 8 | 〃 | 〃 | お日待ち | 赤坂釜渕 | 5月10日 | 釜渕17戸 | 供え物をし、輪番宿に集会し、釜渕の神を祀り、懇親する。 | | |
| 97 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 赤坂中組輪番宿 | 当番宿主にて日時を決める | 中組6戸 | 当番宿にて懇親。 | | |
| 98 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 栃窪前新田・中村・稲荷穴 | 1月14日夜（前新田・中村）<br>15日（稲荷穴） | 前新田4戸・中村8戸・稲荷穴3戸 | | | |
| 99 | 8 | 〃 | 〃 | 十王堂供養 | 栃窪中村 | 1月16日、8月16日 | 世話人 | お堂の清掃と供養のお祈り。 | | |
| 100 | 17 | 〃 | 〃 | 地神様 | 栃窪稲荷穴 | 3月社日、9月社日 | 稲荷穴3戸 | 掛軸を掛け、夜のお祭り。昼間、地蔵に赤飯を供える。 | | |
| 101 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さん・天神さん祭り | 栃窪ハダカヤ山頂 | 4月1日 | 栃窪全戸15戸 | 秋葉山；山頂にボンデン立て、天神さん；福引あり、1戸3点奉納。 | | |
| 102 | 22 | 〃 | 伊勢村 | ドウロクジンまつり | 五反田 | 1月14日 | 各小字ごとの道陸神組 | | 順調 | |
| 103 | 8 | 〃 | 〃 | 観音様まつり | 五反田 | 3月17日（中組）3月18日（上組） | 中組・上組 | | 順調 | |
| 104 | 8 | 〃 | 〃 | 十日夜 | 五反田 | 旧1月10日 | 十日夜 | | | |
| 105 | 8 | 〃 | 〃 | 親都神社のまつり | 五反田親都神社 | 5月5日 | 五反田村中 | 伍長組単位で行う。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 106 | 8 | 中之条町 | 伊参村 | 金神様 | 五反田 | 1月 | 馬込組 | 春の道普請後、ボンデンをたてる。 | | |
| 107 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 五反田 | 11月23日 | 伍長組 | | | |
| 108 | 24 | 〃 | 〃 | 念仏講 | 五反田 | 葬儀の夜 | 伍長組 | | | |
| 109 | 8 | 〃 | 〃 | 不動まつり | 五反田滝山の不動尊 | 春秋2回 | 上組 | 地神講ごとに。 | | |
| 110 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 五反田 | 庚申の日 | 庚申組 | 毎年代参あり。 | | |
| 111 | 17 | 〃 | 〃 | 地神講 | 五反田 | 社日の前日（2回） | | | | |
| 112 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰講 | 五反田 | 4月 | 間か組・大久保組・嵩山組 | | | |
| 113 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さま | 五反田 | 春秋2回 | 馬滑組 | | | |
| 114 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 五反田 | 旧10月10日を中心に7日 | 下組 | | | |
| 115 | 8 | 〃 | 〃 | お日待ち | 五反田 | 春秋2回 | 上組 | | | |
| 116 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 岩本各地区 | 1月14日 | 各区ごと | | | |
| 117 | 8 | 〃 | 〃 | 初不動まつり | 岩本高樋不動さん | 1月28日 | 上之台・高樋計35戸 | 清晃寺の和尚さんにお経をあげてもらう。 | | |
| 118 | 8 | 〃 | 〃 | 子育地蔵のお祭り | 岩本上組地蔵堂 | 2月24日 | 信仰者 | 地蔵堂に集まり十三仏の掛軸を掛け、お経をあげていた。現在は中止。 | | |
| 119 | 24 | 〃 | 〃 | てんどう念仏 | 岩本上組地蔵堂 | 春彼岸中日 | 信仰者 | 地蔵堂に集まり、お経をあげていた。現在は中止。 | | |
| 120 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様の祭り | 岩本寺尾 | 4月8日 | 寺尾全戸8戸 | 現在法印さんはたのまない。 | | |
| 121 | 8 | 〃 | 〃 | オロクブさんの祭り | 岩本胡桃田 | 4月8日 | 下久保 | 福引あり。 | | |
| 122 | 8 | 〃 | 〃 | 御嶽さんの祭り | 岩本高樋地内 | 5月5日 | 上組・下組 | お宮の前で神事とボンデン立て。福引きを上組・下組交代で奉納。 | | |
| 123 | 8 | 〃 | 〃 | 八坂神社・三峰神社祭り | 岩本お天狗やま | 5月5日 | 3区全戸45戸 | 神主による祈祷。以前サンテイサンとも呼ばれ、お産の神として拝んでいた。 | | |
| 124 | 16 | 〃 | 〃 | 石尊さん・お雷電さん祭り | 岩本上組地内山頂 | 8月7日 | 祭幹事と上組有志 | 石尊さんまでの道の草刈とボンデン立て、お衣がえ。 | | |
| 125 | 8 | 〃 | 〃 | 不動さん祭り | 岩本高樋不動さん | 9月28日 | 上之台・高樋計35戸 | 清晃寺の和尚さんによる祈祷。 | | |
| 126 | 8 | 〃 | 〃 | 諏訪神社献穀祭り | 岩本諏訪神社 | 11月27日 | 岩本氏子 | 神事後、上組は個別に米を献穀、中・下組は祭り幹事がまとめて献穀。 | | |
| 127 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 蟻川各地区 | 1月14日 | 各地区単位 | | | |
| 128 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷祭り（初午） | 蟻川大倉岳・池田 | 2月11日 | 行沢・大倉岳・百々・池田 | 拝礼後、境内で福引、各戸5点奉納。 | | |
| 129 | 8 | 〃 | 〃 | ねはん会 | 蟻川倉沢地内 | 2月15日 | 蟻川姓の12戸 | ねはん絵の掛軸を掛け線香を立てて拝む。宿振る舞いで直会、ヤシヤウンマ（コネモチ）を供える。 | | |
| 130 | 8 | 〃 | 〃 | 愛宕さんの祭り | 蟻川倉沢愛宕山 | 2月24日 | 倉沢組19戸 | 祭典と神事。 | | |
| 131 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さん祭り・金毘羅山祭り | 蟻川蟻越・大亀 | 3月10日前後の日曜日 | 大亀組15戸 | 金毘羅山は山の中腹にあるため、若者がごへい・しめをもって山に登る。 | | |
| 132 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さん祭り | 蟻川錦戸 | 3月15日近くの日曜日 | 東二組全戸 | 神事後、福引1戸3点奉納。1年おき。 | | |
| 133 | 8 | 〃 | 〃 | 塩平観音お祭り | 蟻川塩平 | 3月17日に近い日曜日 | 塩平8戸・割石8戸 | お坊さんが来て祈祷。 | | |
| 134 | 8 | 〃 | 〃 | 蚕影さん・お雷電さん祭り | 蟻川宇原野地内 | 3月23日に近い日曜日 | 宇野原16戸 | 蚕影さん；3月23日、お雷電さん；4月25日だったが、現在は一緒に。ボンデンをもって蟻川岳雷電宮に登る。 | | |
| 135 | 17 | 〃 | 〃 | お十二様祭り | 蟻川行沢地内 | 4月12日 | 行沢4戸 | しめ縄・ご幣束を新しくして拝礼。 | | |
| 136 | 8 | 〃 | 〃 | アレーター（荒板）観音さん | 蟻川富士沢 | 4月18日近くの日曜日 | 東二組全戸 | 祈祷後、福引1戸3点奉納。1年おき。 | | |
| 137 | 8 | 〃 | 〃 | 権現さん祭り | 蟻川蟻越 | 11月10日前後の日曜日 | 大亀組 | | | |
| 138 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 蟻川大亀・池田・倉沢 | 11月10日～20前後の日曜日 | 各組 | | | |
| 139 | 8 | 〃 | 〃 | 熊野神社献穀祭 | 蟻川熊野神社 | 11月28日 | 蟻川・大道氏子 | 献穀玄米（ウルチ）1升、全戸164戸。 | | |
| 140 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申祭り | 蟻川宇野原 | 年6回 | 講に入っている家 | 掛軸を掛け、うどんを食べる。 | | |
| 141 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 大道・轟石・行沢 | 1月14日 | 各組単位 | | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 142 | 17 | 中之条町 | 伊参村 | 地神様・社日のお日待ち | 轉石 | 3月の社日 | 轉石全戸7戸 | 3月に社日前夜、宿順番で夕食後掛軸を掛けお祭りをする。 | | |
| 143 | 8 | 〃 | 〃 | 十二講・お日待ち | 大道長坂 | 4月11日 | 長坂全戸3戸 | お十二さんが2体あり。宿は順番でしめ縄を張り（2ヶ所）、お日待ちをする。 | | |
| 144 | 8 | 〃 | 〃 | 八坂神社のお祭りとお日待ち | 大道 | 5月3日 | 大道組 | お日待ちをし、獅子舞を奉納する。 | | |
| 145 | 17 | 〃 | 〃 | 地神講・社日のお日待ち | 大道長坂 | 9月の社日 | 大道16戸・長坂3戸 | 掛軸を掛け、お祭りをする。 | | |
| 146 | 8 | 〃 | 〃 | 天狗講 | 大道 | 12月10日 | 大道全戸16戸 | 石宮2ヶ所にボンデン2本を立てる。ご幣束を新しくして祈祷してもらう。 | | |
| 147 | 17 | 〃 | 沢田村 | 高沼山入り | 山田十二社 | 1月3日 | 高松講中 | 高沼・畑沢十二社参りを行い、山仕事の安全を祈る。 | | |
| 148 | 22 | 〃 | 〃 | 大竹ドンドン焼き・鳥追い祭 | 山田邑中 | 1月14日 | 大竹講中 | 山車を引き、鉦太鼓を打ち村中の厄除けをし、河原堂に集まり打ち上げる。同じ日にドンドン焼きも行う。 | | |
| 149 | 8 | 〃 | 〃 | 高沼火事祭り | 山田 | 1月20日（山田組）12月20日（関組） | 町田組・関組 | 女祭りで、組別に寄り合い火の用心を申し合わせる。 | | |
| 150 | 8 | 〃 | 〃 | 大竹五社祭 | 山田表組・中居・下組 | 2月1日（表組・中組）2月2日（下組） | 祭組 | 各戸年番で賄い（宿振る舞い）、神官を頼んで参拝。 | | |
| 151 | 3 | 〃 | 〃 | 中島天狗祭 | 山田天狗社 | 2月卯日 | 10戸 | 梵天を掲げ祭り、お参りをする。 | | |
| 152 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 山田 | 2月・11月 | 2戸 | 講組が減ったため、年2回のみ行われている。 | | |
| 153 | 16 | 〃 | 〃 | 上の中泉源祭 | 山田下山田年番制宿 | 3月10日 | 祭組14戸 | 泉源様を祭り良質の涌き水あり、流れを神沢と呼ぶ。下流の住民、水を感謝して社建立。当たり日にお祭りを行う。 | | |
| 154 | 8 | 〃 | 〃 | 観音祭 | 山田善福寺境内 | 3月18日 | 檀家全戸 | 納経後、福引あり。 | | |
| 155 | 8 | 〃 | 〃 | 大竹毘沙門天祭 | 山田中島毘沙門堂 | 彼岸 | 祭組29戸 | 当たり日に納経、祭組講員集い酒宴す。春秋彼岸念仏講。戦後は春彼岸のみとなる。 | | |
| 156 | 8 | 〃 | 〃 | 加性薬師様祭 | 山田加性薬師堂 | 彼岸 | 祭組10戸 | 薬師如来木像　永禄3（1560）年3月24日。堂において行われる。 | | |
| 157 | 8 | 〃 | 〃 | 上養天狗祭 | 山田上の山天狗社 | 4月1日 | 祭組12戸 | 昭和4年、天狗社建立。有志12名石社に刻す。当日梵天を掲げ組員集いお参りを行い酒宴を催す。 | | |
| 158 | 8 | 〃 | 〃 | 中の組天狗祭 | 下山田天狗社 | 4月15日 | 祭組6戸 | 祭組年番制で酒肴を調え、家内安全を祈る。 | | |
| 159 | 8 | 〃 | 〃 | 大竹河原堂観音 | 山田大竹河原堂 | 4月18日 | 祭組25戸 | 各組員会費で運営。お参りに際しては供物が振る舞われた。古くは山車を引き馬追いの厄払いが行われた。 | | |
| 160 | 8 | 〃 | 〃 | 高沼大師講 | 山田高沼大師堂 | 4月20日 | 高沼全戸 | 祭り世話人を年番とし、お参りをする。古くは太々神楽の奉納もあった。 | | |
| 161 | 8 | 〃 | 〃 | 麻多利神祭 | 山田下山田旧社跡 | 4月24日前後の日曜日 | 下山田全戸 | 一区民全員集い花見の宴となる。村人の親睦を図るため古くから行われた行事である。 | | |
| 162 | 8 | 〃 | 〃 | 渋沢不動祭 | 山田大竹渋沢不動尊 | 4月28日 | 祭組28戸 | | | |
| 163 | 8 | 〃 | 〃 | 大竹古峰講 | 山田 | 4月下旬 | 講組25戸 | 栃木県古峰神社参り。 | | |
| 164 | 8 | 〃 | 〃 | 弁天祭 | 山田清水弁天堂 | 5月4日 | 清水27戸 | 神官のお祓いを受け、清水集落中の祭り。天明2年建立。全戸集い酒宴あり。 | | |
| 165 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 山田各地区集会所 | 11月23日 | 下山田・大竹・清水・高沼 | 各集落ごとに集合し実施される。 | | |
| 166 | 17 | 〃 | 〃 | 地神講 | 折田 | 3月17日、9月23日 | 7戸、当番制 | 豊作祈願・感謝祭。掛軸。 | | |
| 167 | 24 | 〃 | 〃 | テントウ念仏講 | 折田 | 彼岸中日 | 下折田13戸、各戸年番制 | 日の出より日没まで鉦を打って念仏を唱えてお互いの先祖を供養する行事。 | | |
| 168 | 8 | 〃 | 〃 | 毘沙門さん | 折田 | 4月13日・10月13日前後の日曜日 | 堂境内、祭組65戸 | 納経・参拝。肴を各自持参し、宴会。 | | |
| 169 | 8 | 〃 | 〃 | 成田不動 | 折田 | 4月28日前後の日曜日 | 250戸 | 獅子舞を奉納、家内安全を祈る。4月28日大祭、折田全戸の祭りとなる。福引あり。 | | |
| 170 | 8 | 〃 | 〃 | 天神講・御嶽講 | 折田 | 9月25日 | 中折田講中 | 道路清掃施行後、境内にて懇親会を行う。 | | |
| 171 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 折田 | 11月23日 | 上折田講中 | 豊作感謝の祭りを行う。 | | |
| 172 | 8 | 〃 | 〃 | 森上才日待 | 折田 | 毎月14日 | 才日待組26戸年番制 | 組の親交を深めるため毎月集まり懇談する。 | | |
| 173 | 8 | 〃 | 〃 | 森下才日待 | 折田 | 毎月14日 | 順番制 | 組の親交を深めるため毎月集まり懇談する。 | | |
| 174 | 8 | 〃 | 〃 | 原組庚申講 | 折田 | 隔月庚申日前後の土曜日 | 講組20戸 | | | |
| 175 | 8 | 〃 | 〃 | 永田組庚申講 | 折田 | 講月当日 | 講組5戸 | | | |
| 176 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 折田 | 当たり日 | 5戸 | | | |
| 177 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 下沢渡菅田9区 | 1月14日夜 | 上組・下組・加賀森・新道 | 各地区に分かれて実施。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 178 | 22 | 中之条町 | 沢田村 | ドウロクジンまつり | 下沢渡道祖神の十字路 | 1月14日夜 | 中組（10区） | 道祖神にシメを張り、酒を振る舞う。 | | |
| 179 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 下沢渡金原 | 1月14日夜 | | 金原と沢口に分かれて行う。厄年の人がみかんを配る。 | | |
| 180 | 8 | 〃 | 〃 | 地蔵まつり | 下沢渡金原 | 1月16日、8月16日 | 世話人 | 世話人（祭り世話人）が交代でする。 | | |
| 181 | 27 | 〃 | 〃 | えびす講 | 下沢渡菅田中組 | 1月20日、11月20日 | 菅田（9区）中組（10区） | 各戸で実施。 | | |
| 182 | 8 | 〃 | 〃 | 観音まつり | 下沢渡中組の観音様 | 3月 | 中組（10区） | 村中で赤飯を供える。ヤキマンジュウを子供たちにやる。 | | |
| 183 | 8 | 〃 | 〃 | 観音まつり | 下沢渡菅田千手観音 | 4月17日 | 菅田（9区） | 参詣人に甘酒などで接待。婦人部が中心で出る。 | | |
| 184 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷祭り（初午） | 下沢渡諏訪神社 | 2月11日 | 下沢渡講中 | | | |
| 185 | 8 | 〃 | 〃 | 不動まつり | 下沢渡金原・原口 | 4月28日、9月28日 | 金原・原口講中 | 交通安全不動を祭る。20軒くらいの人が集まり3時より宗本寺の住職が各家をまわる。 | | |
| 186 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 下沢渡中組 | 8月1日 | 中組（10区） | 中之条10区と沢田10区の交流で、中之条祇園祭に子供たちが参加する。 | | |
| 187 | 8 | 〃 | 〃 | 秋祭り | 下沢渡諏訪神社 | 9月第2土曜日 | 下沢渡講中 | 獅子舞をやり、下沢渡中をまわる。 | | |
| 188 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 下沢渡金原 | 11月23日 | 金原組 | 2～30年前までは実施していたが、今はやっていない。 | | |
| 189 | 15 | 〃 | 〃 | 道祖神祭 | 上沢渡沢渡温泉 | 1月14日 | 区内2名祭典係 | 夕方正月松を道祖神前で燃やし、無病息災を祈る。蛇野より太鼓・鉦で各家路を鳥追歌を合唱、家内安全を祈る。 | | |
| 190 | 15 | 〃 | 〃 | 道祖神祭 | 上沢渡久森 | 1月14日 | 久森・前尻16軒 | 門松、ダルマ等を燃やし、無病を祈る。 | | |
| 191 | 8 | 〃 | 〃 | アキヤサン | 上沢渡官舎山秋葉神社 | 1月24日、11月24日 | 6区内祭典係2名 | 早朝秋葉神を参拝、安全を祈る。 | | |
| 192 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師さん | 上沢渡大岩諏訪神社 | 4月7日 | 氏子大岩祭典係 | 夕方祈祷し、安全を祈り茶会をする。 | | |
| 193 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師さん | 上沢渡反下山 | 4月8日・10月8日 | 氏子 | 赤飯を炊き奉納、感謝をする。 | | |
| 194 | 8 | 〃 | 〃 | 沢渡神社春・秋祭 | 上沢渡沢渡神社 | 4月14日、10月20日 | 6区内氏子 | | | |
| 195 | 8 | 〃 | 〃 | おくまんさん | 上沢渡蛇野熊野神社 | 4月14日、9月29日 | 蛇野氏子 | 年2回、五穀豊穣、感謝を祈る。会食・歓談をする。 | | |
| 196 | 8 | 〃 | 〃 | ひめみやさん | 上沢渡牧場姫宮神社 | 4月14日 | 牧場氏子 | 五穀豊穣、感謝をする。 | | |
| 197 | 8 | 〃 | 〃 | 押野講 | 上沢渡大岩諏訪神社 | 4月15日 | 講信徒、大岩祭典係 | 諏訪神社参拝、茶飲・歓談をする。 | | |
| 198 | 8 | 〃 | 〃 | 大岩不動尊 | 上沢渡大岩不動尊 | 4月27日、9月28日 | 大岩区内 | 大岩獅子舞を奉納。会食・歓談をする。 | | |
| 199 | 8 | 〃 | 〃 | 諏訪神社祭 | 上沢渡諏訪神社 | 4月27日、9月28日 | 大岩区内 | 大岩獅子舞を奉納。会食・歓談をする。 | | |
| 200 | 8 | 〃 | 〃 | 大黒天祭 | 上沢渡大岩 | 4月28日 | 大岩祭典係、講信徒 | 大黒天に感謝、祈祷をする。 | | |
| 201 | 16 | 〃 | 〃 | 石尊山 | 上沢渡久森 | 7月28日 | 久森・前尻16軒 | 注連縄を張る。 | | |
| 202 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉山 | 上沢渡久森 | 9月27日 | 久森・前尻16軒 | 注連縄を張る。 | | |
| 203 | 8 | 〃 | 〃 | 諏訪神社 | 上沢渡大岩諏訪神社 | 9月27日 | 氏子 | 五穀豊穣を感謝し、獅子舞を奉納。会食、歓談。 | | |
| 204 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さん | 上沢渡蛇野 | 庚申の日 | 蛇野9軒 | 宿屋で茶飲み会・歓談をする。 | | |
| 205 | 8 | 〃 | 〃 | 甲子まつり | 上沢渡反下 | 甲子の日（年6回） | 反下4軒 | 甲子の日に当番宿で女性が会食・歓談。 | | |
| 206 | 22 | 〃 | 〃 | ドンドン焼き | 四万 | 1月14日夜 | 各地区 | | | |
| 207 | 22 | 〃 | 〃 | 鳥追い | 四万新湯・桐ノ木平 | 1月14日 | 新湯・桐ノ木平組 | 若衆が太鼓をたたいて鳥追いをする。 | | |
| 208 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷祭り | 四万桐ノ木平稲荷社 | 2月10日 | 桐ノ木平講中 | 子供に菓子、大人は新年会を含めて4常会の親睦をかねて行っている。 | | |
| 209 | 8 | 〃 | 〃 | 白岩不動まつり | 四万権現沢 | 4月 | | 水まつりを兼ねて行った。水道の普及で中止。 | | |
| 210 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師まつり | 四万 | 4月8日・10月8日 | 6常会 | | | |
| 211 | 8 | 〃 | 〃 | 地蔵まつり | 四万ガニ沢地蔵の祠 | 4月24日 | 12区 | くじ引する。 | | |
| 212 | 8 | 〃 | 〃 | ハバキヌギ | 四万貫湯平 | 11月23日 | 貫湯平組中 | くじ引する。賞品あり。 | | |
| 213 | 12 | 六合村 | 入山地区 | おぼやしねい | 入山引沼地区長の家 | 旧5月5日 | 引沼地区 | 区長があずき飯をふきの葉っぱにくるんだものを地区の子供たちに振る舞う。山と里の境と辻に供える。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 214 | 17 | 六合村 | 入山地区 | 十二様 | 入山田代原 | 5月8日 | 梨木・晶木・田代原・京塚地区 | 4地区の人が集まり、田代原地区にある十二様のお参りをする。 | | |
| 215 | 4 | 〃 | 〃 | 十日夜 | 入山引沼地区内 | 旧10月10日 | 引沼子ども会 | 地区の小学生が中心となり行う。各家を歌を歌い、わら鉄砲を叩きながら回り、お金をもらう。 | | |
| 216 | 29 | 〃 | 赤岩地区 | 天神講 | 赤岩地区公民館 | 12月25日 | 赤岩子ども会 | 中学生が中心となり、小学生、幼児を地区の公民館に招待して食べ物をご馳走。 | | |
| 217 | 8 | 草津町 | 草津村 | 光泉寺花まつり | 光泉寺 | 5月7～8日 | 光泉寺世話人 | お釈迦様の誕生を祝う。 | | |
| 218 | 20 | 〃 | 〃 | 氷室の節供 | 西の河原公園 | 6月1日 | 氷室の節供実行委員会 | 天狗山の氷室から運んで来た氷でお茶をたて歌会を行う。 | | |
| 219 | 2 | 〃 | 〃 | 白根神社祭 | 町内各地区 | 7月17～18日 | 各地区白根神社氏子 | 神社本神輿や各地区の神輿が町中に繰り出す。町民中心の祭りで、夜は湯畑に神輿が集まる。 | | |
| 220 | 8 | 〃 | 〃 | 草津温泉感謝祭 | 湯畑 | 8月1～3日 | 草津式典保存会 | 丑湯祭りとして始められ、湯畑の温泉汲み上げの儀の後、分湯する。 | | |
| 221 | 8 | 〃 | 〃 | 金毘羅宮祭礼 | 金毘羅神社 | 8月10日 | 氏子 | | | |
| 222 | 7 | 〃 | 〃 | 鬼子母神八助稲荷祭り | 日晃寺 | 8月20日 | 日晃寺総代、世話人 | | | |
| 223 | 17 | 東村 | 東村 | 十二講 | 広場・中組 | 5月2日 | 広場中、下中組全員 | 梵天を立て、飲食する。 | | |
| 224 | 24 | 〃 | 〃 | 高橋平五良の百万遍 | 五町田高橋平五良地区 | 7月19日（旧8月1日） | 高橋平五良地区 | 天正年間の平五良観音設立時より行われ、数珠玉約200個、長さ約15mの輪状にして使用。 | | |
| 225 | 8 | 〃 | 〃 | 地神さん（地神講） | 奥田下組 | 春、秋彼岸社日 | 下組有志5人 | 堅牢地神の掛軸にお供物。宿は回り番。 | | |
| 226 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉さん（お日待） | 奥田下組 | 10～4月17日（かつては毎月） | 下組有志10人 | 秋葉大神の掛軸に供え物。懇談。宿は回り番。 | | |
| 227 | 8 | 〃 | 〃 | あきやさん（秋葉信仰） | 奥田中組下 | 11～3月17日（かつては毎月） | 奥田中組下5戸 | 宿は持ち回り秋葉大神の掛軸を飾り、供え物をして、飲食する。 | | |
| 228 | 28 | 吾妻町 | 原町 | 原町祇園 | 原町地区 | 7月25日・26日 | 原町地区 | 原町の上之町区、下之町区、紺屋町区、新井区の四区で祇園執行。25日宵祭り、26日には神輿巡行。 | | |
| 229 | 29 | 〃 | 岩島村 | 天神講 | 岩島根古屋 | 2月26日・27日 | | 今度、小学生になる児童を集め、一夜中楽しく遊び、天神様を祭る。 | | |
| 230 | 15 | 〃 | 〃 | つぢうだんご | 岩島地区 | 11月30日 | 岩島地区 | 脱穀したとき集めた雑穀類（ツヂウ）を粉にし、団子にしたものを神棚・座敷神等にカヤの先に刺して供える悪魔除け。 | | |
| 231 | 22 | 嬬恋村 | 今井他 | ドンドン焼き | 各地区 | 1月14日・15日 | 各地区 | | | |
| 232 | 22 | 〃 | 〃 | かんじん棒 | 袋倉（上袋倉） | 1月14日 | 子供会 | ワラを編んだ棒状のもので「カンジン、カンジン」と言いながら家の中をたたき悪魔祓いをする。 | | |
| 233 | 22 | 〃 | 〃 | かんじん棒 | 門貝 | 1月15日 | 子供会 | 子供たちが各家庭をまわり、米やお金を集める。 | | |
| 234 | 22 | 〃 | 〃 | 舞い込めとだるま踊り | 袋倉（下袋倉） | 1月15日 | 子供会 | 「福の神舞い込め舞い込め」と子供たちが一戸ずつ回り、だるまの面をかぶり踊り無病息災を願う。 | | |
| 235 | 26 | 〃 | 〃 | 初午祭 | 袋倉 | 2月旧暦の初めの午の日 | 区 | 節分後、初めての午の日に五穀の神としての稲荷明神を祭り豊蚕を祈る。悪魔祓いの獅子舞も行う。 | | |
| 236 | 25 | 〃 | 〃 | 鎌原神社例大祭 | 鎌原鎌原神社 | 4月30日～5月1日 | 鎌原神社氏子 | 獅子舞の奉納及び各戸回りをして悪魔祓いを行う。 | | |
| 237 | 8 | 〃 | 〃 | 天明浅間押し犠牲者の供養祭 | 鎌原鎌原観音堂 | 8月5日 | 奉仕会 | 天明三年の浅間山の噴火による犠牲者477人を弔う供養祭、聖観音前広場にて念仏・和讃が行われる。 | | |
| 238 | 8 | 〃 | 〃 | 十日夜 | 西窪 | 10月10日 | | ワラの芯に「みょうが・いもがら」を入れそれを縄で巻きそれで村中をたたいて回る。モグラを追い払う風習であった。 | | |
| 239 | 11 | 〃 | 大前他 | 舞い込めと筒粥 | 大前 | 1月14日 | 子供会 | 夜半、子供たちが唱和しながら各家庭を回り無病息災を祈る。その時の奉納米で粥を煮て農作物の出来具合いを占う。 | | |
| 240 | 25 | 〃 | 〃 | 大前神社祭 | 大前大前神社 | 5月1・2日 | 大前八十八夜祭典団 | 八十八夜の宵祭りと翌日の本祭りがあり、獅子舞は神社での奉納舞のほか、地区内をまわる。 | | |
| 241 | 25 | 〃 | 〃 | 大笹神社祭 | 大笹大笹神社 | 9月16・17日 | 大笹神社氏子 | 獅子舞を奉納し、各所で本舞を行う。 | | |
| 242 | 24 | 〃 | 〃 | 念仏講・回り念仏 | 各地区 | 農閑期（毎月1～2回） | 老人会等 | 各地区へ老女たちが各戸を回って行う。鎌原区では浅間押しの犠牲者の供養として毎月7日・16日に行う。 | | |
| 243 | 8 | 桐生市 | 桐生町 | 月例祭 | 御嶽神社 | 毎月9日の前の日曜日 | 講 | 供物を供え、講員で御嶽経を唱える。 | | |
| 244 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂祭典（桐生祇園祭） | 八坂神社（本町1～6丁目） | 8月第1金曜日～月曜日 | 惣七町祭典委員会 | 8月第一金曜日から御神輿出御、宵祭り、御神輿渡御、本祭り、祝宴、御神輿還御、お旅所引継ぎ、翁祝いで終了。 | | |
| 245 | 8 | 〃 | 広沢村 | 金毘羅様のおまつり | 広沢5丁目金毘羅宮 | 元旦、4月第2日曜 | 町会 | 新年御例祭、4月のおまつりとも、地区住民が社の前に集合、宮司の代わりを務める住民により祝詞をあげ、拝礼。 | | |
| 246 | 26 | 〃 | 〃 | 初午 | 広沢町7丁目山の稲荷 | 3月の旧初午 | 町会 | 享和の大火が2月の初午の日だったことから、この日の山の稲荷にこもって祈願したのが始まり。 | | |
| 247 | 8 | 〃 | 〃 | 日限地蔵尊 | 寄居日限地蔵尊 | 4・10月の24日に近い日曜日 | 寄居地区住民 | 旗2本を立て、読経の後、参拝者には御姿（地蔵尊を描いた版画）・ごふう（半紙でくるんだお菓子）を配る。 | | |
| 248 | 28 | 〃 | 〃 | 天王祭 | 寄居地区石宮前 | 7月20日に近い日曜日 | 寄居地区住民 | 石宮とその隣に3つある庚申塔の前に斉竹をたて、祝詞をあげ、地区の無病息災を祈願する。 | | |
| 249 | 8 | 〃 | 〃 | 一本木祭り | 広沢町7丁目東澤寺 | 8月23、24日に近い日 | 町会 | 八坂神社のお祭り、東澤寺の地蔵盆を統合。お札を焚き、翌日神輿の渡御。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 250 | 8 | 桐生市 | 広沢村 | 薬師講 | 後谷薬師堂 | 10月15日前後 | 後谷薬師講 | 夕方６時頃、薬師様の御堂に集合し、十三仏を唱えた後、直会。 | | |
| 251 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 宇西 | 12月中旬ころ | 字西地区住民 | 庚申塔に行き、おさご（米）と線香をあげて拝む。宿（当番）に行って掛軸を掲げ、供え物をしてお参りする。 | | |
| 252 | 8 | 〃 | 梅田村 | 観音様まつり | 浅部観音堂 | １月16日、８月16日 | 梅田２丁目の７組合 | ７組合が交代で当番。しのに旗を立て、お供えをする。 | | |
| 253 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 宿 | 庚申の日 | 天神組（組合） | 宿に集まり、庚申の掛軸を掲げ、供え物をしてお参りし、各人願い事をする。２・３年前から中断。 | | |
| 254 | 28 | 〃 | 〃 | 天祭り | 穴切八坂神社 | 3月第１日曜日（以前は7月15日） | 穴切組合 | 宿（当番）が精進料理・一升搗きのお供えをする。八坂神社の石宮に集まり、供物を供える。 | | |
| 255 | 3 | 〃 | 〃 | ぼんでんまつり | 山の石宮 | ３月第１日曜日 | 上ノ原組合 | ぼんでん２本をあらかじめ作っておき、登り口にぼんでんを立てる。石宮の前の木と木の間にシメ縄を張り、拝礼。 | | |
| 256 | 28 | 〃 | 〃 | 天祭り | 大神宮さま | 3月第１日曜日（以前は3月3日） | 前東組合 | 当番が供物を用意し、拝礼。直会。この時供えたおさごを妊婦に配ると、お産が軽く済むという。 | | |
| 257 | 28 | 〃 | 〃 | 天祭り | 皆沢地区 | ３月第２日曜日 | 皆沢組合 | 集会所で宮司に書いてもらった御札を篠に付け、各家の耕地に立てる。 | | |
| 258 | 8 | 〃 | 〃 | 愛宕さまのおまつり | 愛宕神社 | ４月３日（節供） | 梅田町６組合 | ６組合が交代で１年ごとに当番。山に登り、石宮に幣束などの供物を供え、拝礼。 | | |
| 259 | 8 | 〃 | 〃 | 雷電さまのおまつり | 雷電石宮 | ４月10日前後 | 小谷戸（組合） | 石宮にお供えと御幣を供える。 | | |
| 260 | 8 | 〃 | 〃 | 弁天さままつり | 弁天様 | ４月15日 | 弁天様の近所有志 | 供物やろうそくを持って石の祠へ行き、御供えをして拝礼。女の子が健やかに成長するよう祈願する。 | | |
| 261 | 17 | 〃 | 〃 | 山神まつり | 山神神社 | ４月15日に近い日曜日 | 石鴨４組合 | ７軒で行う。根本山神社奥の院や十二社など50社に御幣と御神酒を手分けして供える。 | | |
| 262 | 17 | 〃 | 〃 | おしょうじん（山の神祭り） | 山神神社 | ４月第２日曜日 | 中村（組合） | 7軒で行う。2人づつ組んで、手分けして山神神社19社と庚申塔2か所の計21社に参拝し、御幣、おさご、煮干し、御神酒を供える。 | | |
| 263 | 17 | 〃 | 〃 | 山神さままつり | 忍山、山神の石宮前 | ４月第３日曜日 | 忍山氏子 | お供え（２段のもち）・赤飯等をそなえる。 | | |
| 264 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 上ノ原 | 春（４月下旬）秋（10月中旬） | 上ノ原上組合 | 宿（当番）の人が、庚申塔にうどん・酒・団子などを供える。 | | |
| 265 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 宿 | 年に２回春・秋（以前は年４回） | 東間谷戸組合の有志 | 交代で宿をつとめ、十三仏の掛軸を掛け、御膳に供物を用意し、灯明と線香を用意する。 | | |
| 266 | 8 | 〃 | 〃 | 大黒さまのおまつり | 大黒さま石像と社務所 | 5月第１日曜日（以前は八十八夜） | 金沢組合 | 三峰さまと山の神などの祭り統合。供物を供え、三峰や山の神の石宮まで登り、参拝。 | | |
| 267 | 8 | 〃 | 〃 | 大杉さま | 大杉神社 | 8月第一日曜日（以前は7月23日） | 大杉神社氏子 | 前日に八丁じめ作成。集落の境界に張る。祝詞をあげ、玉串奉奠。疫病除を祈願する。 | | |
| 268 | 8 | 〃 | 〃 | 観音堂まつり | 忍山、観音堂内 | ９月 | | ３～５年毎に行われる。うどん・煮物・御神酒などを供え、お経をあげてもらう。 | | |
| 269 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師ごもり | 馬立集会所（元薬師堂） | 相談して決定（10月～11月）（旧９月９日） | 桐生川の西側集落 | ８時ころ、団子・煮物・花・線香・灯明をあげて除病・健康祈願を行う。 | | |
| 270 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 宿 | 10月か11月の都合の良い日 | 細谷戸 | ７時に集まり、用意された掛軸と御膳にうどんや料理・酒を供え線香を立てる。 | | |
| 271 | 17 | 〃 | 〃 | 山神さまのおまつり | 山神石宮 | 10月10日前後 | 小谷戸（組合） | 石宮にお供えと御幣を供える。 | | |
| 272 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申さま | 宿 | 11月23日（以前は４回） | 中井組合 | 供物をし、拝礼、飲食。 | | |
| 273 | 17 | 〃 | 川内村 | 山神さまのおまつり | 大上組合 | ４月第３日曜日 | 大上組合 | 山神宮の前に参集し、供物を供え、お参り。 | | |
| 274 | 8 | 〃 | 〃 | 阿弥陀さまの供養祭 | 三丁目 | ５月中の日曜日 | 奉讃会 | 弥陀三尊像に上しん粉と白玉粉で作った団子を供える。 | | |
| 275 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師堂祭典 | 勝島薬師堂 | ７月第１日曜日 | 勝島薬師講 | 男性は行灯を用意し、街道沿いに並べ、女性は団子の用意。祈祷後、お詣り、数珠繰りが行われる。 | | |
| 276 | 8 | 〃 | 〃 | 観音さまのおまつり | 駒形子安観音 | ８月17日 | 大上組合 | お堂に集まり、馬頭観音にお詣りをした後、直会。点されたろうそくは安産のお守りとされる。 | | |
| 277 | 8 | 〃 | 〃 | 名久木観音さまのおまつり | 光源寺 | ９月10日が当たり日 | 五丁目第４町会 | 前夜祭では、お経の後、法話。護摩修行の後、直会。 | | |
| 278 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申待 | 五丁目第三町会 | 庚申の日 | 庚申講員 | 青面金剛像の掛軸に供物と線香を供える。飲食、歓談。 | | |
| 279 | 17 | 〃 | 菱村 | 山神さまのまつり | 山神の石宮 | ２月第１日曜日 | 上小友（上・中・下組合） | ボンゼンを作り、仮宮で拝礼し、供物を供える。山の安全・風水害除け・火事除けなどを祈願。 | | |
| 280 | 26 | 〃 | 〃 | 灸天稲荷の初午のおまつり | 灸天稲荷社 | 旧初午に近い日曜日 | 和田・小此木・久保田家 | ３家で会費を出し合い、回り番で当番となって準備。参拝者は一対のオビヤッコ（御白狐？）を奉納し、お参り。 | | |
| 281 | 28 | 〃 | 〃 | 天祭り | 宿 | ３月第１～３の都合の良い日曜日 | 上平下組のうちの元農家12軒 | 小麦粉を５合くらいずつ宿に持ち寄りうどんを作る。床の間に小さな机を置き、供物を供え、床の間に向かい拝礼。 | | |
| 282 | 8 | 〃 | 〃 | 観音様のおまつり | 小雀観音 | 春の彼岸 | 観音近くの７・８軒 | 小雀馬頭観音と書かれた幟旗を２本立てる。供物を供え拝礼。御札と赤飯等を参拝者に配る。 | | |
| 283 | 8 | 〃 | 〃 | 不動さんのおまつり | 不動 | ４月第１日曜日 | 菱町５丁目・梅田２丁目住民 | 供物を供え、読経をする。病気平癒を祈願。 | | |
| 284 | 8 | 〃 | 〃 | 雷電さまのおまつり | 雷電神社 | ４月第１か第２日曜日 | 雷電神社氏子 | 梵天を作り、供物用意。頂上で梵天を松の木に縛り付け、拝礼。その後、直会。 | | |
| 285 | 8 | 〃 | 〃 | 子育て観音のおまつり | 子安観音堂 | ４月第２日曜日 | 茂倉・初谷地区 | 供物が供えられ、読経。子供の健康祈願。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 286 | 8 | 桐生市 | 菱村 | 雷電様のおまつり | 雷電神社 | 4月第3日曜日 | 上小友（3組合） | ボンゼンを作り、山の石宮へ行き、木に縛り付ける。供物を供え、拝礼し直会。 | | |
| 287 | 8 | 〃 | 〃 | お釈迦さまのおまつり | お釈迦のクボ（釈迦の像前） | 5月第2日曜日 | 茂倉・籾谷地区 | 1時間ほど山を登り、釈迦のクボまで行く。供物を供え、全員で拝礼。山仕事の安全祈願、現在は各人の願い事。 | | |
| 288 | 3 | 〃 | 〃 | 横神さまのおまつり | 栲機姫神社 | 7月第1土曜日 | 菱織物協会 | 幟旗2本設置。神事、直会を行い、御札を配る。 | | |
| 289 | 16 | 〃 | 〃 | 石尊さまのおまつり | 石尊神社 | 7月最後の日曜日 | 引田・小松組合 | 八坂神社のお祭りと統合され現在は天王様のお祭り。御幣・梵天を木に縛り付ける。 | | |
| 290 | 8 | 〃 | 〃 | お地蔵さまのおまつり | 地蔵の前 | 8月最後の日曜日 | 上平（上・下組） | 旗を参道の両脇に立て、供物を供える。和讃も行われ、参拝者は拝礼し、数珠繰りを行う。 | | |
| 291 | 8 | 〃 | 〃 | 産土さまのおまつり | 産土組合 | 10月第1日曜日 | 引田組合 | 男性だけ石宮に出向き、拝礼。供物を供え、御神酒で乾杯。後、社務所で女性を含めた全員で拝礼し直会。 | | |
| 292 | 22 | | | 道陸神 | 道陸神 | 10月の日曜、各家の都合の良い日 | 道陸神の近所5・6軒 | 道陸神にお供えをあげ、拝礼する。不自由な足を直すことや健康を祈願。 | | |
| 293 | 17 | 薮塚本町 | 薮塚本町 | 蚕影祭り | 湯之入 | 1月14～16日 | | 1月14日の朝に山から採ってきた山桑の枝にマユダマを木に吊し、神社に奇数個奉納。15・16日の間飾る。 | | |
| 294 | 28 | 〃 | 〃 | 大原祇園祭 | 大原中町 | 7月最後の日曜日 | 大原5区 | 屋台が出てお囃子を演奏。 | | |
| 295 | 8 | 〃 | 〃 | 新海霊神（御嶽様）例祭 | 寺下・杉塚新海霊神 | 11月第1月曜日 | | 春と秋の例祭にひょっとこ踊りを行う。 | | |
| 296 | 3 | 〃 | 〃 | 風の神送り | 湯之入 | 12月31日（12月15日） | 湯ノ入育成会 | ターラベシという俵の蓋をつないで、幣束を立ててその回りを四方旗（風の神）で囲み、風の神送りと唱えながら地区内を一巡する。 | | |
| 297 | 19 | 新田町 | 木崎町 | 地蔵盆祭 | 木崎橋下長命寺門前 | 8月23日 | 色地蔵奉賛会 | 地蔵堂・本尊様の清掃、仮設舞台の設置などを前日に行い、当日午後から供養が行われる。 | | |
| 298 | 8 | 〃 | 〃 | 八幡神社例祭 | 赤堀 | 10月15日 | | 神主・氏子が参拝の後、獅子舞奉納、村内を一周する。 | | |
| 299 | 28 | 〃 | 綿打村 | おぎょんまつり（祇園） | 金井 | 7月25・26日 | 育成会・子供会 | 神輿をかついで回る。獅子頭は3体あるが重くて担げず、神社の前に庭に出して置くのみ。 | | |
| 300 | 8 | 〃 | 〃 | 諏訪祭 | 花香隊 | 8月上旬の日曜日 | 体協・育成会 | 子供会の鼓笛隊とリヤカーに乗せた神輿を引きまわす。お札は諏訪神社真璽を各戸配付。 | | |
| 301 | 11 | 〃 | 〃 | 雨乞い天王様 | 大根大根神社・矢太神沼 | 不定期 | 大根神社氏子 | 日照り続きの時期に真夜中に神輿を担ぎ出し大根神社東方約400mにある矢太神沼へ放りこむ。雨が降ったら沼から引き上げ、村中を担ぎまわす。 | | |
| 302 | 8 | 〃 | 生品村 | 観音講 | 村田4軒 | 1月20日・2月節分・4月20日 | 四軒の曲輪 | 4月20日は大祭で、観音様を祀り、赤飯を炊いて飲食する。 | | |
| 303 | 12 | 〃 | 〃 | 鏑矢祭 | 市野井 | 5月8日 | 氏子総代会 | 以前は市野井の柿塚八幡で行われていた。今は生品神社で新田義貞の鎌倉幕府討伐にちなんで矢を神社で放つ。 | | |
| 304 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 市村神明宮 | 7月後半日曜日 | 神明宮氏子 | 屋台でお囃子をしたり、余興で踊りを行い、最後にくじ引きで景品がもらえる。 | | |
| 305 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 小金井 | 7月28日 | | 御神輿（大人用・子供用）をかつぐ。 | | |
| 306 | 11 | 〃 | 〃 | 雨乞い | 小金井般若高寺川分水地 | 不定期 | | 干天続きの時、八大龍王様と呼ばれた10cm足らずの小さい石片を高寺川の分水の箇所に持って行き水をかけて雨乞いをした。 | | |
| 307 | 11 | 〃 | 〃 | 蓑笠不動 | 村田 | 不定期 | | 日照りが続くと小祠の中に60cm位ある蓑笠不動を呼ばれている像を三角池などに入れて若人がもむ。地区内を担いでまわる。現在廃絶。 | | |
| 308 | 15 | 尾島町 | 尾島町 | 獅子廻し | 押切三柱神社 | 7月1日 | 氏子 | 厄神除けを祈り、獅子頭の入った神輿のムラ回り。各戸の屋敷前に着くと神輿の下を家人がくぐり、お札をもらう。 | | |
| 309 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 尾島須賀神社 | 7月19・20日 | 町内、神社総代他 | 2日間にわたり、各町内会所に町全戸の人が集まる。八ヵ町を大人神輿が渡御する。 | | |
| 310 | 16 | 〃 | 〃 | 水神まつり | 大館子鳴耕地及び同地先河原 | 7月25日前後の日曜日 | 鳴耕地住民 | 大館には河岸があり、発祥は明らかではないが、水神祭と川施餓鬼の一体化した行事。大杉様と水神宮に祈り、川施餓鬼風の行事を行う。 | | |
| 311 | 17 | 〃 | 〃 | 恵比寿講 | 尾島雷電神社 | 11月19・20日 | 神社奉賛会・神社総代 | 神社奉賛会と商店会との合同祭。奉賛会はお参りした人にお札と熊手を配る。 | | |
| 312 | 1 | 〃 | 〃 | 鎮火祭 | 岩松八幡宮 | 12月15日 | 氏子総代 | 秋祭りの奉納の時に奉納された阿久津の獅子舞で使用した消炭を保管しておく。消炭に火をおこしてお札を炙り、各戸に配る。 | | |
| 313 | 3 | 〃 | 世良田村 | 閻魔様 | 世良田閻魔堂 | 1月16日、8月16日 | 南八区民 | 万灯・辻灯を新しく張り替え、立てる。賽銭をあげてせんべいをいただく。 | | |
| 314 | 15 | 〃 | 〃 | ナイダーナイダー | 出塚大和神社（行者堂） | 7月1日 | 出塚木村地区 | 竹縄を数珠に見たてて、円陣を作り、左回りに3回「ナイダー、ナイダー」と唱えながら回す。綱を切り、各戸に配る。 | | |
| 315 | 16 | 〃 | 〃 | 石尊様（アフリ（阿夫利））様 | 世良田下新田会館庭 | 7月25日～8月16日 | 下新田区民 | 八坂神社の祇園祭終了後、アフリ神社に燈篭を立て、燈篭を中心に四隅に若竹を立ててシメ縄を張る。 | | |
| 316 | 8 | 〃 | 〃 | 義貞様 | 世良田総持寺 | 8月1日 | 世良田上町・上新田・今井 | 新田義貞を祀った祭礼である。3地区の行司により義貞様と呼ばれる木像を本堂須弥壇の廊下に据え置き、祈祷。 | | |
| 317 | 16 | 〃 | 〃 | 雨乞い地蔵 | 世良田普門寺（地蔵堂） | 10月第3日曜日 | 下町区民 | 「地蔵尊」の幟を立て、行灯を下げ辻灯を立てる。参拝者に団子を分け、夜になると読経する。 | | |
| 318 | 17 | 〃 | 〃 | 栗がら薬師 | 粕川字本郷地区 | 11月上旬 | 粕川字本郷地区 | 供物を供えた後、読経。以前は一晩中栗がら（今は古材）を燃やし続けたが、今は係りの人がいる間だけ燃やす。 | | |
| 319 | 11 | 太田市 | 太田町 | 御嶽神社御筒粥神事 | 金山町御嶽神社 | 2月9日 | 御嶽神社氏子 | 大鍋に粥をつくり、すだれ状に麻で織られた長さ10cmの中空のヨシガラ33本を二つ折りにして入れ、粥の入り方で農作物の豊凶を占う。 | 順調 | |
| 320 | 12 | 〃 | 九合村 | 伊勢神社弓引き | 内ヶ島町伊勢神社 | 1月7日 | 伊勢神社氏子 | 神社境内にて、4～6歳の男子が弓で矢を1本放ち、的の黒星を射る。子供の成長祈願を祈念して行われる行事。 | 順調 | |
| 321 | 23 | 〃 | 沢野村 | 浅間神社初山参り | 岩瀬川浅間神社 | 7月24日 | 浅間神社氏子 | 子供の無事成長を願い、1歳未満の子供をお参りさせる。参拝した後、額や着物のひもに神社の神印を押してもらう。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 322 | 1 | 太田市 | 沢野村 | 浅間様火祭り | 古戸町長良神社境内 | 8月26日 | 浅間講社 | 境内にしめを張り、薪を中に山積みにして、祈祷の後、火をつけオタキアゲする。火難除けや安産祈願。 | 順調 | |
| 323 | 26 | 〃 | 沢野村 | 冠稲荷神社初午大祭 | 細谷町冠稲荷神社 | 3月第3日曜日 | 冠稲荷神社氏子 | 獅子舞や厄除け稚児行列、稲荷神餅祭（神籤餅、ツジウ繭玉餅奉献、御弓奉射）などが行われる。 | 順調 | |
| 324 | 28 | 〃 | 韮川村 | 祇園祭 | 沖之郷町地区 | 7月第2日曜日 | 沖之郷町地区 | 八坂神社の祇園祭で、式典の後、山車3台を地区内に巡行。祇園囃子を奉納する。 | 順調 | 市 |
| 325 | 1 | 〃 | 韮川村 | 浅間様火祭り | 茂木町御霊神社 | 8月25日 | 御霊神社氏子 | 浅間様の境内にしめを張り、薪を中に積み上げ、祈祷の後オタキアゲをする。火難除けや安産祈願。 | 順調 | |
| 326 | 11 | 大泉町 | 小泉村 | くがたち | 上小泉社日神社 | 3・9月の彼岸に最も近い日曜日 | 社日神社氏子 | 境内に大釜を据え湯をわかして熱湯を作り、笹の小枝を熱湯に浸して全身に振りかけ、人々の健康を祈願する。 | 順調 | 町 |
| 327 | 23 | 〃 | 〃 | 初山 | 下小泉浅間神社 | 6月1日 | | その年に生まれた赤ん坊の額に健康を祈願して朱印を押す。 | 盛ん | |
| 328 | 15 | 〃 | 〃 | 地蔵回し | 間之原地蔵堂 | 旧8月24日 | 地蔵堂年番 | 地区の無病息災を願って地蔵堂に安置される地蔵を軽トラックに乗せて地区を巡る。昔は年番が担いで回った。 | 危機 | |
| 329 | 11 | 〃 | 大川村 | つつがい | 仙石神明宮 | 1月15日 | 神明宮役員 | 茅を編んでスダレを作り、それを小豆がゆの中に入れ、米粒と小豆のつつに入った量で、その年に蒔く種を占う。 | 順調 | |
| 330 | 15 | 〃 | 〃 | ささら | 仙石神明宮 | 年6回実施 | 仙石ささら保存会 | 仙石地区の無病息災や豊作を願って行う獅子舞。年6回行い、うち1回は「村回り」といって地区内の全戸を回る。 | 順調 | 町 |
| 331 | 8 | 邑楽町 | 中野村 | 根本様のお祭り | 中野前瀬戸宿 | 1月7日 | 前瀬戸宿地区 | 供物を根本様に供える。以前は4月15日と11月15日に栃木県の根本神社に参拝に行った。 | | |
| 332 | 24 | 〃 | 〃 | 前谷の百万遍 | 中野前谷地区 | 田植え終了後 | 前谷地区 | 直径5cmくらいの数珠を安置し、念仏を唱えながら数珠を回す。5回数珠が回ると二手に分かれもみ合う。 | 順調 | |
| 333 | 28 | 〃 | 〃 | 天王の祇園祭り | 中野天王元宿 | 7月14・15日 | 天王地区 | 天王様の社殿にある赤・青の2体の獅子が天王地区の家々を回り悪疫退散のおはらいをする。 | 盛ん | |
| 334 | 16 | 〃 | 〃 | 十三坊塚の石尊様 | 中野十三坊塚 | 7月27日 | 十三坊塚地区 | コウチの四辻に石尊様を祭る灯籠立てが行われ、灯明をあげる。疫病除けや精霊迎えをお願いする。 | 盛ん | |
| 335 | 23 | 〃 | 〃 | 浅間様の火祭り | 中野浅間神社境内 | 8月21日 | 浅間神社氏子 | 薪・枯れ枝を境内に集め積み上げる。祈祷の後、点火する。氏子は護符と赤飯、燃えさしを1本取り家の入り口に置く。 | 順調 | |
| 336 | 24 | 〃 | 〃 | 鶉の十六夜念仏 | 中野鶉 | 毎月旧暦16日 | 鶉地区 | 仏画をかけて念仏供養をする。講員がそろうと20人くらい。 | 順調 | |
| 337 | 4 | 〃 | 〃 | 渋沼の花まつり | 石打渋沼阿弥陀堂 | 5月8日前後の日曜日 | 渋沼地区 | 花御堂を阿弥陀様の前に飾り、その中に釈迦の像を供え、甘茶をかけます。 | | |
| 338 | 8 | 〃 | 高島村 | 一本木の庚申講 | 藤川一本木 | 麦まき後 | 一本木地区 | 宿という当番の家に各家庭からもち米を持ち寄り、餅をつき、庚申様に供える。 | 順調 | |
| 339 | 2 | 〃 | 長柄村 | 馬頭観音の祭典 | 狸塚馬頭観音 | 8月19日 | 狸塚地区 | 神輿の渡御、八木節の上演。以前は、農耕馬による競馬や相撲大会などを行っていた。 | 盛ん | |
| 340 | 8 | 館林市 | 郷野村 | 寄居の庚申様 | 寄居町庚申塔 | 11月最後の日曜日 | 庚申講員 | 寄居地区が東と西に分かれて行う。庚申様の掛軸を掛け供物を供え五穀豊穣を祈る。 | 順調 | |
| 341 | 24 | 〃 | 大島村 | 山王金仏様の念仏 | 大島町山王の地蔵堂 | 毎月3日、13日、23日 | 念仏講員 | 山王の地蔵堂に金仏様と呼ばれる延命地蔵があり3のつく日に集まり、念仏を行う。 | 危機 | |
| 342 | 23 | 〃 | 館林町 | 花山町の富士嶽神社初山 | 花山町富士嶽神社 | 4月30日～5月1日 | 富士嶽神社 | 初山を迎える子供が参拝し、額に丸い神印を押してもらう。 | 順調 | |
| 343 | 10 | 〃 | 赤羽村 | 駒形神社の弓取式 | 上赤生田町駒形神社 | 1月25日 | 駒形神社氏子 | 13年に1回、祭礼の当日流鏑馬を奉納する。的を鳥居の所に作り、参加者が弓矢でこれを射る。 | 順調 | |
| 344 | 4 | 〃 | 〃 | 子ノ権現様 | 赤生田町子ノ神社 | 3月15日 | 子ノ神神社 | 足の神様として良く知られ、足が強くなるようにと参拝する。昔は願いがかなった人はわらじを奉納し、今は金のわらじに変わった。 | 順調 | |
| 345 | 15 | 〃 | 〃 | 夏越祭り | 赤生田本町長良神社 | 7月30日 | 長良神社氏子 | 茅の輪を作り、参拝者は輪をくぐる。人形を川に流す。オンベと呼ばれる猿田彦の人形を集会所に立ててお参りする。 | 順調 | |
| 346 | 24 | 〃 | 三野谷村 | 十九夜様の念仏 | 上三林町十九夜堂 | 毎月19日 | 念仏講員 | 女人講として、安産・子育て祈願が多い。縁日の時はお堂の中に集まり念仏をあげた。数年前からやらなくなった。 | 危機 | |
| 347 | 12 | 板倉町 | 西谷田村 | 十九夜様 | 除川 | 3月上旬 | 北尾コウチ内の女性 | コウチ内の嫁や嫁いだ娘たちの安産を祈って行われる。十九夜様の掛軸を掛け、ロウソクと線香を絶やさず行う。 | 順調 | |
| 348 | 22 | 〃 | 大箇野村 | どんど焼 | 全町内 | 1月15日 | 町内の行政区 | 正月飾り、供え物などを地域の子供を中心に集め、燃やし、正月神を送り、無病息災を祈る。 | 順調 | |
| 349 | 4 | 〃 | 〃 | 七夕の飾竹と馬 | 全町内 | 8月7日 | 各家庭 | マコモから七夕馬を作り、吊す。七夕後、馬は子供たちが村落中を引いてから川へ流される。 | 危機 | |
| 350 | 15 | 〃 | 伊奈良村 | 夏越（輪くぐり） | 板倉雷電神社 | 6月30日 | 雷電神社氏子 | 神社の一の鳥居に茅の輪を取り付け、人形を持ってくぐる。翌日に茅の輪を利根川本流に流し、その年の健康を祈る。 | 順調 | |
| 351 | 22 | 明和町 | 佐貫村 | どんど焼 | 矢島大佐貫 | 1月の土・日 | 各行政区 | 正月飾り等を焼き無病息災を祈願。 | 順調 | |
| 352 | 15 | 千代田町 | 永楽村 | 不動尊大祭（疱瘡神様） | 千代田町赤岩光恩寺 | 3月28日 | 不動講 | 疱瘡様（現在も祭祀）の祭りから御本尊不動明王の祭りとして親しまれる。秘仏不動明王開帳、大般若あり。 | 盛ん | |
| 353 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂神社大祭 | 千代田町赤岩 | 7月15日に近い日曜日 | 八幡神社氏子総代 | 十二の社が合祀して、夏祭りは八坂神社の祭り。かつては神輿と山車が出た。 | 順調 | |
| 354 | 17 | 東村（勢多郡） | 東村 | 十二様 | 草木字八沢 | 1月12日 | ツボ（五軒） | オシトギ・アキミスズ・十二様等の旗を作りこれらを奉納し、当番の家で飲食する。 | | |
| 355 | 17 | 〃 | 〃 | 蚕影様 | 沢入字黒坂石 | 4月24・25日に近い土・日 | 6軒 | シメ縄を張り、のぼり旗を立てて、お参りの人に赤飯等を配る。 | | |
| 356 | 17 | 〃 | 〃 | 山の神 | 沢入字東宮 | 5月第1日曜日 | 石材組合 | 東宮神社に供物を供え、神主に拝みお払いをしてもらい、御神酒をいただく。参詣者にぐしもちをくれる。 | | |
| 357 | 15 | 〃 | 〃 | 座間の草鞋 | 〃 | 6月15日頃 | 日枝神社氏子 | 各地区の役員の人が草鞋を作り、日枝神社のお札を付けて座間地区の入り口6ヶ所につける。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 358 | 2 | 東村（勢多郡） | 東村 | 太郎神社祭 | 神戸 | 7月 | 太郎神社氏子 | 赤飯を炊き、子供たちは神輿を担ぎ神戸地区を練り歩く。 | 順調 | |
| 359 | 28 | 〃 | 〃 | 日枝神社夏祭り | 〃 | 7月25日頃 | 〃 | 各坪から男女2人ずつの当番が出て、赤飯を炊き、神前に供物等をして拝む。 | 順調 | |
| 360 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申様 | 沢入字春胴見 | 庚申の日（11月か12月） | ツボ（四軒） | 当番の家に集まり、庚申様の掛軸をかけ、皆で拝んでから飲食する。 | | |
| 361 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申祭 | 座間 | 毎年12月中 | | 5軒の家で開催、現在は各家大人一人ずつ参加。一年を無事過ぎたことを庚申様に感謝し、会食。 | 順調 | |
| 362 | 15 | 黒保根村 | 黒保根村 | 桑ノ代十二山神社祭 | 八木原 | 4月12日 | 十二山神社氏子連 | 以前は講が組まれたが、現在はない。安産子育てを祈願する。 | 順調 | |
| 363 | 17 | 〃 | 〃 | 蚕影様のおまつり | 栗門全戸 | 4月23日 | 栗門全戸 | 石尊山があって、山頂に石祠があり、順番の宿の人が赤飯を炊く。 | | |
| 364 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 高楯 | 旧暦10月16日 | 高楯組 | 床の間に庚申の掛軸を掛け、だんごが16、ご飯、うどん、おかゆを供え、飲食した。 | 危機 | |
| 365 | 22 | 〃 | 〃 | 諏訪神社の奉納子供相撲 | 城 | 8月下旬の日曜日 | 城子ども相撲保存会 | 以前は大人の草相撲として実施、現在は子供会育成会が核となり、子供相撲を行っている。 | 順調 | |
| 366 | 30 | 〃 | 〃 | 荒神まつり | 八木原 | 秋の道普請の後 | 八木原地区 | 地区民はこぞって登山し、神事の後に宮の庭前で祝宴を張る。 | 順調 | |
| 367 | 29 | 新里村 | 新里村 | 武井天竺天神講 | 武井天竺 | 1月5日 | 武井天竺地区 | | | |
| 368 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申待 | 各地 | 春を中心に一部秋行う | | | | |
| 369 | 8 | 〃 | 〃 | 赤城の山開き | 村内各地 | 5月8日 | 板橋・新川地区 | コミネ峠をこえて大洞まで行った。 | | |
| 370 | 28 | 〃 | 〃 | 新川宿天王様（祇園）祭 | 新川八坂神社 | 7月最後の日曜日 | 新川地区 | | | |
| 371 | 28 | 〃 | 〃 | 武井赤城神社祇園 | 武井赤城神社 | 8月1日 | 小林・武井地区 | | | |
| 372 | 8 | 〃 | 〃 | 榎薬師縁日 | 山上西後閑 | 11月12日 | | 目の神様 | | |
| 373 | 11 | 粕川村 | 粕川村 | 筒粥の行事 | 三夜沢赤城神社 | 1月14・15日 | 赤城神社氏子 | 筒の中の粥の入り方を見て作物の収穫を占う。 | 順調 | |
| 374 | 15 | 〃 | 〃 | 大祓い | 市之関住吉神社 | 6月30日、12月31日 | 市之関住吉神社氏子 | カヤで輪を作り、鳥居の下に吊るし、拝殿にお参りを3回繰り返す。（6／30のみ） | 順調 | |
| 375 | | 宮城村 | 宮城村 | 筒粥の行事 | 三夜沢赤城神社 | 1月14日・15日 | 神主・氏子 | ゴンネギによって執り行われるもので、神主・氏子総代立ち会いのもと、ヨシを開き中に入っている米の量でその年の農作物の出来を占う。 | | |
| 376 | | 〃 | 〃 | 御神幸祭 | 三夜沢赤城神社 | 4月・11月の最初の辰の日 | 神主・氏子 | 二宮赤城神社と三夜沢赤城神社の間を神輿が往復するという行事。途中の近戸神社と宮城村柏倉御輿処で小休止する。 | | |
| 377 | | 〃 | 〃 | 大祓い | 市之関住吉神社 | 6月30日・12月31日 | 氏子 | 和紙で人形をつくり、体の悪い部分をさすって川へ流すと体が良くなるという。 | | |
| 378 | 28 | 大胡町 | 大胡村 | 八坂神社例大祭 | 大胡八坂神社 | 7月最終土・日 | 大胡町青年会 | 神輿を出し、町内を練り歩く「天王様」と獅子を担ぎ、練り歩く「あばれ獅子」の2行事がある。 | 盛ん | |
| 379 | 22 | 富士見村 | 富士見村 | どんどん焼き | 梶谷 | 1月14・15日 | 子供会等 | だるま・正月の松飾等を焼く。 | 盛ん | |
| 380 | 8 | 〃 | 〃 | 山開き例大祭 | 大洞赤城神社 | 5月8日 | | 赤城山の山開きの行事。 | 順調 | |
| 381 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂神社のまつり | 横室八坂神社 | 7月15日 | 八坂神社氏子 | 4台の山車が村内を練り歩く。 | 盛ん | |
| 382 | 24 | 〃 | 〃 | 土用念仏 | 高松 | 7月20日 | 高松区 | 数珠は12m位の輪に、玉が2㎝直径のものでできており、長老が鉦・太鼓を鳴らし、村中の子供が数珠を廻す。 | 順調 | |
| 383 | 22 | 北橘村 | 北橘村 | どんどん焼き | 八崎 | 1月14日 | 育成会 | 前日の13日に新しくついた餅を長い竹串にさして焼き、無病息災を祈って食べる。 | 順調 | |
| 384 | 24 | 〃 | 〃 | 念仏講 | 八崎 | 春彼岸の中日 | 八崎1区長寿会 | 十三仏の掛軸の前で太鼓と鉦をたたきながら念仏を唱え、数珠まわしをする。 | 順調 | |
| 385 | 15 | 〃 | 〃 | 八丁じめ・人形流し | 下箱田木曽三社神社 | 7月25日、12月25日 | 各区区長 | 各区の区長が三社神社で大祓をし、村の出入り口の三本辻に八丁じめを立てる。人形を下箱田区長が利根川に流す。 | 順調 | |
| 386 | 8 | 赤城村 | 赤城村 | 三原田西の堂縁日 | 三原田 | 1月10日 | 長岡一族（20軒） | 通称「長岡の観音様」と呼ばれ、長岡一族（20軒）により祀られている。 | 順調 | |
| 387 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰講 | 津久田 | 1月17日 | 講員 | 講の代表者2名が、埼玉県の三峰神社に参詣し、代表が帰宅すると講員はその年の安全を祈願する。 | 順調 | |
| 388 | 8 | 〃 | 〃 | 八ツ沢観音祭り | 樽 | 春彼岸の中日 | 角田・石田の両族（11軒） | 八ツ沢観音堂は樽の角田・石田の両族11軒で祀っている。祭礼は二人一組の当番が一年交替で当たる | 順調 | |
| 389 | 8 | 〃 | 〃 | 古峯原講 | 津久田 | 5月8日 | 講員 | 講の代表者が栃木県の古峯原神社に参籠し、お札を受けて帰る。代表が帰宅すると講員は当番の家に参集してその年の安全祈願をする。 | 順調 | |
| 390 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 敷島 | 7月25日 | | 明治22年敷島村が発足した時から記念として山車を作り祇園祭りに全地域を運行している。 | 盛ん | |
| 391 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 深山金山八幡宮 | 8月1日 | | 行政8組ごとに花まんどを作成し、八幡宮神社に担いで奉納し、祭典を行う。 | 順調 | |
| 392 | 22 | 〃 | 〃 | 地蔵かつぎ | 上三原田日向 | 8月1日～8月12日 | 日向組管理部 | 上三原田日向地域の中央に薬師堂があり、その中の地蔵尊を奉侍し、ナンマイダンボと唱えながら巡行する。 | 順調 | |
| 393 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭 | 溝呂木 | 8月27日 | 区役員と若連幹部 | 神輿を担ぎ練り歩く。昔は「あばれみこし」の異名をとるほど多数の若者衆の熱気に包まれた。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 394 | 8 | 赤城村 | 赤城村 | 三峰講 | 持柏木 | 10月第2日曜日 | 持柏木西組三峰講 | 講の代表3名が埼玉県の三峰神社に参籠し、お札を拝受し、お仮屋で供物を供え祈願する。 | 危機 | |
| 395 | 8 | 赤堀町 | 赤堀村 | 摩利支天尊 | 香林火雷神社境内 | 元旦 | 火雷神社氏子 | 願いが成就すると木刀をお礼に供えることになっている。 | 順調 | |
| 396 | 24 | 〃 | 〃 | 観音供養会 | 今井宝珠寺 | 3月18日 | 今井地区 | 二体あった観音様のうち一体を売却した後、異変が起きたので、宝珠時に安置し、観音供養としてお経をあげる。 | 順調 | |
| 397 | 24 | 〃 | 〃 | お念仏 | 香林下 | 4月8日 | 香林地区 | お釈迦様の誕生日を春の祭典として芸能等の行事を行い、老人会は堂内にて念仏を合唱する。 | 順調 | |
| 398 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂神社祭典 | 堀下字宿 | 4月12日 | 八坂神社氏子 | 神主の神事終了後、近くの宿組会議所にて集まり、飲食する。 | 順調 | |
| 399 | 17 | 〃 | 〃 | 蚕影山祭 | 今井南区 | 5月2日 | 農事組合 | 養蚕村であったため、行われていたが、養蚕のなくなった現在でも引き継がれて家内・交通安全祈願を行う。 | 順調 | |
| 400 | 17 | 〃 | 〃 | 葉端庚申様八十八夜のお祭り | 間野谷 | 5月八十八夜 | | 葉端又は一本杉庚申様が祀られており、初夏の八十八夜に蚕・五穀豊穣・家内安全祈願を行う。 | 順調 | |
| 401 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様祭り | 下触八坂神社 | 7月16日 | 下触地区 | シメ縄を張り、供物を供え、飲食する。 | 順調 | |
| 402 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様祭り | 五目牛 | 7月20日 | 五目牛地区 | 天明の飢饉の時に疫病がはやり、天王様を祀り、疫病が終息した。その後、現在まで、幟を立て、供物を供え祈願。 | 順調 | |
| 403 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂神社祭 | 今井沖今井神社 | 7月末の日曜 | 今井仲地区 | 今井神社に合祀した八坂神社の石宮鳥居にしめ縄を張り、御神燈を立て、供物を捧げ拝礼。家族の無病息災祈願。 | 順調 | |
| 404 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様 | 西久保 | 7月末の日曜 | 祭典委員会 | 明治初期から行われていたお祭りで神輿を出し練り歩いた。現在はリヤカーで廻り、要所で担ぐ。 | 順調 | |
| 405 | 15 | 〃 | 〃 | 七夕灯籠祭り | 西久保 | 盆前の土日 | 健全育成会 | 中央を通る大通りの両側に燈籠を立て、難病の流入を防ぎ、併せて亡くなった人達への供養を行う。 | 順調 | |
| 406 | 15 | 〃 | 〃 | 地蔵様祭り | 五目牛 | 8月23日 | 子育地蔵保存会 | 明治初年にエンガで掘り当てた地蔵が疫病の時祈願して効験があったので、以後、子育地蔵として供物を供え祈願。 | 順調 | |
| 407 | 15 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 香林 | 10月22日 | 香林地区 | 中原地区に祠が以前よりあり、目の守り神として信仰の対象となる。縁日には燈籠を立て、飲食歓談する。 | 順調 | |
| 408 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉権現祭 | 今井・西原 | 12月16日 | 今井・西原地区 | 防災・防火の神として火伏の信仰により、家内安全五穀豊穣を祈願する。 | 順調 | |
| 409 | 8 | 境町 | 釆女村 | 地神講 | 下渕名 | 2～3月彼岸までの雨か雪の日かその翌日 | 下渕名字東横町9軒 | 元治元年（1864）から始まっていたと推測される講。夕刻、宿の家に集まり地神様の掛軸を拝み、豊作を祈念する。 | 順調 | |
| 410 | 8 | 〃 | 境町 | 毘沙門様祭り | 平塚天人寺 | 4月8日 | 毘沙門講 | 平塚・米岡・境地区を主体とした約250人の講員と一般の信仰者により祭りが執り行われる。 | 順調 | |
| 411 | 8 | 〃 | 〃 | 観音様祭り | 米岡隅谷家の観音堂 | 4月9日 | 隅谷一家7軒 | 隅谷家墓地の西に隣接した観音堂に納められる観音様を同族集団の講組織で祀る。 | 順調 | |
| 412 | 15 | 〃 | 〃 | 大祓と八丁注連 | 平塚赤城神社 | 6月30日、12月30日 | 赤城神社氏子 | 大祓いの神事後、村の出入り口に当たる主要道路6ヶ所に八丁注連が立てられる。 | 順調 | |
| 413 | 28 | 〃 | 〃 | 境町の祇園祭 | 境 | 8月第1土・日 | 八坂神社氏子 | 瑳珂比神社の境内にある石宮であるが、祭りは盛大に行われる。 | 順調 | |
| 414 | 8 | 〃 | 〃 | 瑳珂比弁財天祭り | 境 | 8月21日に近い日曜 | 瑳珂比弁財天奉賛会 | 境公園沼の祠堂に安置された弁財天前に幟を立て、本尊の開帳と供物が捧げられる。 | 順調 | |
| 415 | 19 | 〃 | 〃 | 川施餓鬼 | 境佐波新田用水路 | 9月第1土曜 | ヤングスズラン会 | 大正12年の関東大震災の殉難者供養から開始した行事で、燈籠流しを行い、お経の掛軸が掲げられる。 | 順調 | |
| 416 | 15 | 〃 | 剛志村 | 小此木の石尊様祭り | 小此木 | 7月28日 | 小此木地区 | 石尊様を祀る石燈籠（安政6年（1859）建立銘）にシメ縄を張り、供物を捧げ拝礼。この日より1ヶ月間夕方世話人が燈籠に灯明を灯す。 | 順調 | |
| 417 | 8 | 伊勢崎市 | 伊勢崎町 | 御嶽様 | 華蔵寺町 | 4月2日 | 華蔵寺町民 | 宵祭りは幟を立て、灯籠も50ほど出る。祭典では昔は踊りをお寺の境内でやった。 | 順調 | |
| 418 | 8 | 〃 | 〃 | 寿町天王様 | 寿町天王宮石宮前 | 4月3日・10月17日 | 寿町区 | 役員、組長代表・子供達が集まり、一同揃って参拝後、お神酒・お菓子が配られる。 | 順調 | |
| 419 | 8 | 〃 | 〃 | 節分会 | 大手町 | 節分の日 | 大手町三区 | 区民挙げて、昼は抽選会・子供用ダルマ菓子配り等を行い、夜は宴会（節分会）を催します。 | 順調 | |
| 420 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 大手町 | 毎年最後の申の日 | 大手町三区庚申講 | 年間大勢の庚申様参りにくる方々と町内で信仰している方々とで、毎年最後の申の日に庚申信仰を一夜にして過ごす。 | 順調 | |
| 421 | 4 | 〃 | 茂呂村 | 茂呂の灯籠流し | 美茂呂町水神宮 | 7月31日夜 | 美茂呂町祭典委員会 | 水難防止・雨水の恵み祈念しての祭り。明治末からは水難者の慰霊を込めて広瀬川に浮かべる灯籠流しを行う。現在は花火の打ち上げも行う。 | 順調 | |
| 422 | 22 | 〃 | 〃 | 秋葉神社奉納子供相撲 | 茂呂町秋葉神社 | 11月23日 | 子供育成会 | かつては、親戚、縁者を招待しての町内上げた祭りであったが、最近は相撲を取る人が少なくなり、子供育成会を中心に行う。 | 順調 | |
| 423 | 22 | 〃 | 殖蓮村 | どんどん焼き | 東本町 | 1月中旬日曜 | 東本町親和会 | 正月飾り等を一ヶ所に集めて燃やす行事である。 | 盛ん | |
| 424 | 8 | 〃 | 〃 | 三峯講 | 東本町西・中・東組 | 4月中旬（日） | 東本町三峰講 | 西組・中組・東組の3グループの講が別々にお宮を祀り、活動している。 | 危機 | |
| 425 | 8 | 〃 | 〃 | 十日夜 | 殖蓮全域 | 旧暦10月10日 | | わら鉄砲で大地をたたきながら大声で騒ぐ。 | 順調 | |
| 426 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉様のお祭り | 宮前町 | 11月23日 | | 秋葉神社は火伏せの神であり、各地毎に相撲大会が行われている。 | 順調 | |
| 427 | 10 | 〃 | 三郷村 | 玄蕃広場相撲大会 | 波志江町 | 3月15日 | 間ノ山区 | 江戸期に上岡玄蕃が税負担に苦しむ農民の窮状を領主に直訴した結果、斬刑に処せられ。相撲好きであった玄蕃の供養のために相撲が行われた。 | 危機 | |
| 428 | 15 | 〃 | 〃 | 神楽廻し | 波志江町 | 3月15日・8月22日 | 八坂区 | 幣束を作り、太鼓を先頭にお祓いし、続いて神楽（獅子）が頭を軽く噛み、無病息災を願う。平成10年より復活。 | 順調 | |
| 429 | 28 | 〃 | 〃 | 波志江祇園祭り | 波志江町 | 10月17日 | | 毎年行う訳ではないが、最近では、平成2年、平成12年にそれぞれ行われた。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 430 | 8 | 伊勢崎市 | 三郷村 | 稲岡組の秋葉祭り | 波志江町稲岡組 | 11月23日 | 稲岡組 | 行政役員が中心となり、石宮に参詣、飲食する。 | 盛ん | |
| 431 | 8 | 〃 | 宮郷村 | 社日講 | 宮郷町 | 年2回（3月・10月の土日） | 宮郷地区 | 当番の家に集まり飲食、談笑。 | 危機 | |
| 432 | 8 | 〃 | 名和村 | おくんち | 堀口町 | 10月19日 | 飯玉神社氏子 | 昔は花馬を出したり、各町内にノボリを立てた。現在は、神社より様々な衣装を着て町内を練り歩くのみ。御神講といい1年置きにやっている。 | 順調 | |
| 433 | 17 | 〃 | 〃 | 八十八夜 | 柴町泉龍寺 | 5月2日又は3日 | 氏子 | 稲合様の祭りで蚕・米の豊作等も祈願。稲合様より奥の院までシメ縄を張りそこに幣をつけその幣を蚕につけておくと良い繭がとれる。 | 順調 | |
| 434 | 4 | 〃 | 〃 | 本妙寺鬼子母神祭 | 山王町 | 11月第4土・日 | 本名寺檀家 | 山王町各町内で万灯を作り、それを引いて鬼子母神様に奉納する。翌日、稚児行列があり、鬼子母神様参拝。 | 危機 | |
| 435 | 15 | 〃 | 豊受村 | お手長講 | 下道寺町 | 正月元旦朝 | 下道寺町区お手長講 | 講の当番が年末に埼玉県大里郡寄居町の壱岐天手長男神社に参詣してお札を貰い受け、元旦の朝、講中の家々に順に廻し、水をかけることで、火事を防ぐことができると信じられている。 | 順調 | |
| 436 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜待 | 馬見塚清水町 | 毎月旧暦22日 | 清水町区 | 婦人達の集まりで毎月旧暦22日になると回り番の宿で二夜様の掛軸を床の間に飾り拝み、飲食する。 | 順調 | |
| 437 | 22 | 玉村町 | 玉村町 | どんどん焼き | 南玉 | 1月15日に近い日曜 | 南玉子供会 | 竹と藁で組み立てた道祖神や正月の飾り等を焼く祭りである。 | 盛ん | |
| 438 | 28 | 〃 | 〃 | 角渕の祇園祭 | 角渕 | 7月14・15日に近い土・日曜 | 角渕区 | 八坂神社は堀西と堀東の二ヶ所にあり、各組が1台ずつ屋台を所有する。屋台を引き廻す。 | 危機 | 町 |
| 439 | 15 | 〃 | 上陽村 | 悪魔払い | 飯塚 | 7月24日 | 飯玉神社氏子 | 飯玉神社境内の八坂神社の悪魔退散の祭り。俵藁を利用した獅子頭を作り、獅子が各家々を廻る。 | 順調 | 町 |
| 440 | 25 | 前橋市 | 上陽村 | 東善の神楽獅子 | 東善町内 | 1月15日・7月25日 | 保存会 | 面を被った子供達が家内安全・五穀豊穣・病魔退散を唱え各戸訪問後、獅子を被った大人が続いて家庭訪問する。 | 順調 | 町 |
| 441 | 25 | 〃 | 〃 | 西善の神楽廻し | 西善町内 | 1月最終日曜日 | 年番 | 全町内毎年悪魔祓いをして廻る。 | | |
| 442 | 15 | 〃 | 〃 | 中内町の天王祭り | 中内町内 | 7月23日 | 町内小学生 | 小学生男子が神輿を繰り出し、全戸家内安全、無病息災を祈願し、悪魔祓いを行う。 | | |
| 443 | 15 | 〃 | 〃 | 西善の天王様 | 上両家明神様 | 7月24・25日 | 年番 | 悪魔祓いの神様を祀る。 | | |
| 444 | 24 | 〃 | 〃 | 中内町の天道念仏 | 中内町公民館 | 農休みの中日 | 老人会 | 聞き伝えによるが、村の長老が無病息災、家内・交通安全と五穀豊穣等を祈願する。 | | |
| 445 | 8 | 〃 | 〃 | 東善のお不動様 | 東善町公民館 | 8月27・28日 | 保存会 | 2日間のうちに公民館に安置してあるお不動様までの道筋に子供が絵を描きいれた灯籠にローソクを灯す。 | | |
| 446 | 27 | 前橋市 | 前橋町 | おとり様 | 熊野神社 | 11月の酉の市 | 前橋市観光協会 | 熊野神社の参道や立川町商店街に露店が立ち並び、熊手やその他の縁起物が売られる。 | | |
| 447 | 3 | 〃 | 上川淵村 | 後閑町の梵天祭 | 後閑町飯玉神社 | 1月15日 | 祭り世話人 | 飯玉神社境内の一番高い木に梵天を掲げる。竹の棒の先に巻藁を付け、それに神々のお札を付けたものである。 | 順調 | |
| 448 | 28 | 〃 | 〃 | 後閑町の天王様 | 後閑町八坂神社 | 7月24・25日 | 八坂神社氏子 | 大正初期より八坂神社の余興として山車、又はマンドウを出して夜祭りで賑わい、現在、氏子会による樽神輿で一巡する。 | | |
| 449 | 22 | 〃 | 〃 | 亀里のどんどん焼き | 亀里町 | 1月15日 | 自治会青年部 | あらかじめ作っておいた小屋に、シメ縄飾り、達磨などを集め、燃やす。 | | |
| 450 | 25 | 〃 | 〃 | 下河内のお獅子様 | 下河内町八坂神社 | 3月15日 | 自治会 | 新田郡世良田の八坂神社に代参人を送り、祈祷祈願し、お札を配り御幣を先頭に太鼓をたたいて町内各戸にお祓いに行く。 | | |
| 451 | 24 | 〃 | 〃 | 房丸町の百万遍 | 房丸町 | 7月20日 | 自治会 | 直径2m位の数珠を使って、念仏を唱えながら家内安全の御札とお供物を各戸へ配る。 | | |
| 452 | 24 | 〃 | 〃 | 下河内の天道念仏 | 下河内町霊光寺 | 7月22日 | 自治会 | 7月土用の3日めの日の出から日の入りまで鉦や太鼓をたたいて休むことなく日光菩薩の掛軸に念仏を唱える。 | | |
| 453 | 28 | 〃 | 〃 | 八坂神社祭礼（天王祭り） | 八坂神社 | 7月24・25日 | 八坂神社氏子 | 石宮にシメ縄を張り、長い竹竿の先に梵天を掲げ、桜の木に結びつける。参加者全員でお祓いをする。 | | |
| 454 | 16 | 〃 | 〃 | さんげさんげ | 阿夫利神社 | 7月26日～8月17日 | 阿夫利神社氏子 | 26日の午後、用水路にシメ縄を張る。阿夫利神社と書いた灯籠も立て、川に御神酒を注ぎ、その後全員お祓いする。 | | |
| 455 | 28 | 〃 | 〃 | 力丸町の天王祭（祇園祭） | 力丸町飯玉神社 | 7月25日 | 子供会 | 獅子頭を先頭に各家庭を巡回する。安政末期に大火災があり、疫病が流行しこの時に獅子頭を奉納、悪魔祓いを行ったという。 | | |
| 456 | 8 | 〃 | 桂萱村 | 下沖の秋葉講 | 下沖町 | 1月17日 | 秋葉講中 | 当番の家集合、秋葉大明神掛軸を全員で拝み、会食。火に対する感謝と敬虔の年を養い、防火の意識を高める。 | | |
| 457 | 8 | 〃 | 〃 | 江木の薬師女人講 | 江木町 | 3月8日 | 氏子 | 第二次世界大戦で途絶えたが、昭和48年再開。1日中民謡踊りなどをして祈る。 | | |
| 458 | 22 | 〃 | 〃 | 三俣町の灯籠祭 | 三俣町 | 7月第1日曜 | 子供育成会 | 子供会主催で灯籠に自分の好きな絵を書き、灯を入れ道路に飾る。 | | |
| 459 | 15 | 〃 | 〃 | 堤町の獅子舞 | 堤町熊野神社 | 7月20日 | 子供会 | 無病息災、家内安全を願って町内全戸を獅子が廻る。 | | |
| 460 | 22 | 〃 | 〃 | 幸塚町の薬師様灯籠祭り | 幸塚町薬師様 | 7月23日 | 薬師様世話人会 | 灯籠を点灯し、薬師様の参道及び付近の道路端に飾る。灯籠に小中学生が絵を張り、大人の年番が指導し、実施。 | | |
| 461 | 8 | 〃 | 〃 | 亀泉の地蔵様 | 亀泉町758 | 7月27日 | 亀泉町地区 | 子育て厄除けの地蔵尊として、土地の人々の信仰を集め、夕方より本堂において護摩を焚き、多くの人々が参拝。 | | |
| 462 | 16 | 〃 | 〃 | 西片貝の大山講 | 西片貝町3丁目 | 7月27日 | 西片貝町町民有志 | 農家の人々が田植え後、雨乞いをして水不足を祈る会である。川にシメ縄を張り、水をかけ、お祈りする。大山は神奈川の阿夫利神社である。 | | |
| 463 | 25 | 〃 | 〃 | 疫病祓い悪魔祓い | 八坂神社 | 8月7日 | 八坂神社氏子 | 八坂神社を起点に、町内全戸を若衆50名が大獅子神楽を担ぎ、疫病退治に暴れ回る。 | | |
| 464 | 8 | 〃 | 〃 | 亀泉の薬師様 | 亀泉町316-9 | 8月28日 | 亀泉町地区 | 如意寺のお坊さんが来て、薬師堂で読経する。目によいといわれている。 | | |
| 465 | 15 | 〃 | 〃 | 下沖の道祖神祭り | 下沖町金井地区 | 8月1日 | 道祖神講中 | 石碑が土中に入り、一時中断したが、石碑が再発見され復活。夕刻石碑の前に集まり供物を供え、会食をする。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 466 | 16 | 前橋市 | 桂萱村 | 荻窪の石尊祭 | 荻窪町 | 8月1日 | 西荻窪上組 | 江戸末期に起源。昭和40年頃までは赤城鍋割山頂を参拝。現在では登山はせず、当番が毎夜灯籠をあげる。 | | |
| 467 | 3 | 〃 | 〃 | 幸塚の観音堂灯籠祭り | 幸塚町観音堂 | 8月1日 | 観音堂世話人会 | 灯籠を点灯し、観音堂付近の道路端に約50個飾る。灯籠に小中学生の絵を張り、大人の年番が指導し、実施。 | | |
| 468 | 18 | 〃 | 〃 | 上沖町のきのえね | 上沖町大国主神社 | きのえねの日 | 大国主神社氏子 | 年度初のきのえねの日を初甲子として盛大に祀り、参拝客で賑わう。 | | |
| 469 | 22 | 〃 | 芳賀村 | 勝沢のどんどん焼き | 勝沢町 | 1月15日 | 東昭会 | だるま・正月の松飾・お札等を焼却する。 | | |
| 470 | 24 | 〃 | 〃 | 勝沢の百万遍 | 勝沢町公民館 | 7月25日 | 自治会 | 長寿会・氏子会・自治会役員で無病息災を願い念仏を唱える行事。 | | |
| 471 | 22 | 〃 | 〃 | 小坂子の地蔵尊祭 | 小坂子町地蔵尊会館 | 8月22・23日 | 祭実施委員会 | 享保21年に地蔵尊を製作以来、小坂子の宝物としてお祭りを続けている。現在は子供神輿、舞踊等が行われる。 | | |
| 472 | 22 | 〃 | 〃 | 五代の木福様 | 五代町木福明神 | 旧暦10月14日 | 町区 | 町内全戸が境内に参集、子供達が中心に金銭を投げ、それを子供達が拾う。昔はお赤飯の団子を作り奉納。 | | |
| 473 | 11 | 〃 | 元総社村 | 総社神社水的の式 | 元総社町総社神社 | 1月6日 | 総社神社氏子 | 宮司が竹で作った弓で2本の矢を的に向かい射る。的に対する遠近により、降雨の多少を占う。 | | |
| 474 | 15 | 〃 | 〃 | 鳥羽の道祖神祭 | 鳥羽町東部公民館 | 1月13日 | 鳥羽町東部子供会自治会 | 町内の厄除け、安全を祈願して公園で行われている。 | | |
| 475 | 11 | 〃 | 〃 | 総社神社筒粥の神事 | 元総社町総社神社 | 1月15日 | 総社神社氏子 | 米の粉を入れた鍋に、藁で縛った12cmの筒を2つの束にしてよく煮て、中に入っている粥の量の多寡で豊凶を占う。 | | 市 |
| 476 | 11 | 〃 | 〃 | 総社神社置炭式 | 元総社町総社神社 | 1月15日 | 総社神社氏子 | 筒粥神事の際に、21cmの木炭12本を火の中に入れ、真っ赤な炭が黒くなった部分の多少により降雨を占う。 | | 市 |
| 477 | 15 | 〃 | 〃 | 大友神社道祖神祭り（どんど焼き） | 大友町さくら会館 | 1月15日 | 大友町自治会 | 松飾等を14日に道祖神子供が集め、小屋造りをする。翌朝、小屋に点火し、ミカンと甘酒が来た人に振る舞われる。 | | |
| 478 | 8 | 〃 | 〃 | 総社神社節分祭 | 元総社町総社神社 | 2月3日 | 総社神社氏子 | 千数百人もの参加申し込みがあり、豆撒（厄払い）を行う。 | | |
| 479 | 8 | 〃 | 〃 | 元総社二区二十二夜講 | 元総社町宿主宅 | 2月22日 | 各女人講 | 女講中の人達が町内の宿宅へ集まり、二夜様の掛軸を掛け、供え物をし、会食、和讃の詠唱を行う。 | | |
| 480 | 24 | 〃 | 〃 | 下石倉の念仏講 | 下石倉町二十二夜塔 | 3月18日・7月24日 | 下石倉町婦人念仏会 | 文政7年に二十二夜塔（如意輪観音菩薩）を建立し、以来今日まで、念仏講として長く続いている。 | | |
| 481 | 8 | 〃 | 〃 | 大友町二十二夜講 | 大友町大友公民館 | 3月22日 | 女人講 | 女性だけの祭り（女人講）や如意輪観音に対する信仰で、現在は昼間公民館に集まり、飲食し賑やかに過ごす。 | | |
| 482 | 8 | 〃 | 〃 | 鳥羽の二十二夜講 | 鳥羽町東部公民館 | 4月3日 | 女人講 | 江戸時代初期から始まった講の一つで安産や女性の病気などの厄除けを願う女人講である。 | | |
| 483 | 22 | 〃 | 〃 | 薬師灯籠祭 | 鳥羽町嘗原神社 | 7月14日・8月9日 | 鳥羽町東部子供会自治会 | 目の神様で、子供達が思い思いの時世の絵を描いて、灯籠にローソクを灯し、夏の夜を楽しむ。 | | |
| 484 | 24 | 〃 | 〃 | 元総社町殿小路辻念仏 | 元総社町殿小路町公民館 | 7月16日 | 殿小路町町内会 | 13仏の掛軸を掛け、大数珠で円陣を作り念仏を唱える。終了後、隣接町の境に八坂神社の厄除けのお札をたてる八丁じめを行う。 | | |
| 485 | 24 | 〃 | 〃 | 阿弥陀寺町百万遍念仏 | 元総社町阿弥陀寺町公会堂 | 7月16日 | 阿弥陀寺町町内会 | 13仏の掛軸を掛け、大数珠で円陣を作り念仏を唱える。終了後、隣接町の境に総社神社の厄除けのお札をたてる八丁じめを行う。 | | |
| 486 | 28 | 〃 | 〃 | 殿小路の天王様 | 元総社町殿小路町公民館 | 7月21日 | 殿小路町町内会 | 八坂神社の分社から祭神をお迎えして、飲食し、屋台の飾り幕等の虫干しも併せて行う。 | | |
| 487 | 15 | 〃 | 総社町 | 立石道祖神祭 | 町内空地 | 1月15日 | 子供会・育成会・諏訪会他 | 午後3時半頃から子供達が唄を歌いながら町内を練り歩き、午後6時頃道祖神に点火する。 | | |
| 488 | 21 | 〃 | 〃 | 立石鳥追い祭り | 町内一円 | 〃 | 子ども会・育成会 | 子供達が南天の枝に神札を付けて各家庭を廻り悪魔祓いをする。 | | |
| 489 | 15 | 〃 | 〃 | 山王の道祖神祭り | 町内空地 | 〃 | 自治会・子供会 | 子供達が唄を歌いながら町内を練り歩き、道祖神に点火する。 | | |
| 490 | 21 | 〃 | 〃 | 山王の鳥追い祭り | 町内一円 | 〃 | 〃 | どんどん焼きを済ませた後、小学生が繰り出し、樫の木の御幣束を持った子供達が唄を歌い、太鼓をならしながら行う。 | | |
| 491 | 15 | 〃 | 〃 | 高井の道祖神祭り | 総社町道祖神場 | 〃 | 自治会 | 正月の門松、昨年購入したダルマ、正月のお札を当日焚く。 | | |
| 492 | 15 | 〃 | 〃 | 巣鳥の道祖神祭り | 総社町石橋公園 | 〃 | 自治会・青年会・子供会 | 15日早朝、太鼓に合わせて子供達が呼び声で町内を一周し、どんどん焼きを行う。 | | |
| 493 | 15 | 〃 | 〃 | 大屋敷の道祖神 | 町内空地 | 〃 | 自治会 | 正月飾りを村内から集め、三角小屋を造り焼いた。 | | |
| 494 | 26 | 〃 | 〃 | 初午祭り（丁間稲荷祭典） | 総社町丁間稲荷神社 | 2月節分以後の初午の日 | 丁間稲荷神社氏子 | 慶長7年に秋元長朝が天狗岩用水開発起点の丁間台を祈り、伏見稲荷を勧請して以来、家内・交通安全、合格祈願を行う。 | | |
| 495 | 8 | 〃 | 〃 | 涅槃会（寝釈迦様） | 総社町巣鳥公民館 | 2月15日 | 老人クラブ寿会 | 江戸中期頃の涅槃絵の掛図を飾り、手作りの料理を供えて供養。 | | |
| 496 | 8 | 〃 | 〃 | 灌仏会（花まつり） | 〃 | 4月8日 | 〃 | 水盤に12cmほどのお釈迦様（誕生仏）を立て、小さな柄杓で甘茶を注ぎ祝福し、手料理を供える。 | | |
| 497 | 24 | 〃 | 〃 | 大屋敷の百万遍 | 総社町八坂神社 | 7月15日 | 子供会 | 古くは青年会を中心に神社前にて数珠を引き合い悪魔祓いをした。現在は子供を中心に鉦と太鼓で念仏を唱え、数珠玉を廻す。 | | |
| 498 | 24 | 〃 | 〃 | 巣鳥の百万遍 | 総社町巣鳥公民館 | 7月16日 | 生涯学習連絡協議会 | 戦後中断するも、昭和53年に復活。鉦・太鼓に合わせて念仏を唱えて数珠を廻す。無病息災・家内安全を祈願する。 | | |
| 499 | 8 | 〃 | 〃 | 光厳寺の薬師祭り | 総社町光厳寺 | 8月22日 | 町会 | 無数の疾病を治すという如来様であり、昔は目の病を治す神様として信仰されてきた。 | | |
| 500 | 24 | 〃 | 〃 | 栗島の百万遍 | 総社町光厳寺及び町内一円 | 8月22日 | 町会及び子供会 | 光厳寺内で百万遍を済ませて、子供神輿は町内を練り歩く。町内の厄を払い、福を招く行事である。 | | |
| 501 | 8 | 〃 | 〃 | 出口子育て地蔵尊祭 | 総社町鍛冶町 | 8月23日 | 青年会 | 祭典は地蔵盆の8月24日でその宵祭りの23日が盛大であり、古くは市もたった。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 502 | 2 | 前橋市 | 総社町 | 植野稲荷神社渡御行列 | 総社町植野稲荷神社 | 隔年10月初旬 | 植野稲荷神社氏子自治会 | 行列は道案内・御神旗・猿田彦大神・神官等・太鼓の順で進む。その後に一般の氏子や子供神輿が続く。 | | |
| 503 | 8 | 〃 | 〃 | 巣鳥の秋葉講 | 総社町巣鳥公民館 | 10月17日 | 青年会 | 火伏せの神の掛図を飾り、町内を火災から守ってくれたことに感謝する。 | | |
| 504 | 22 | 〃 | 東村 | 西箱田のどんど焼き | 西箱田町町内荒廃田 | 1月15日 | 自治会・子供育成会 | 約1週間前から、関係者と子供で小屋立てを行い、当日は町内一円で無病息災を祈願。 | | |
| 505 | 15 | 〃 | 〃 | 前箱田の道祖神 | 前箱田町稲荷神社 | 〃 | 自治会・親睦会・子供会 | 正月のしめ飾り・門松・お札等を燃やし、無病息災を祈願する。 | | |
| 506 | 22 | 〃 | 〃 | 川曲の道祖神（どんどん焼き） | 川曲町公園広場 | 〃 | 自治会 | お正月飾り等を焼き、お清めをする。 | | |
| 507 | 15 | 〃 | 〃 | 上新田の道祖神祭 | 上新田町農地 | 〃 | 子供育成会 | 昭和30年頃まで続くが、中断、平成元年に復活し、現在200名あまりの参加となる。 | | |
| 508 | 15 | 〃 | 〃 | 小相木の道祖神祭 | 小相木町 | 〃 | 祭典実行委員会 | 平成元年に20年ぶりに復活。その時、1月14日より15日に日程変更。 | | |
| 509 | 22 | 〃 | 〃 | 古市のどんど焼き | 古市町公園 | 〃 | 自治会 | 1週間前より竹や松枝で、高さ3mほどの円錐形の小屋を作り、当日松飾りやだるま等を加え、午前7時半に点火。 | | |
| 510 | 8 | 〃 | 〃 | 前箱田の二十二夜様 | 前箱田町一丁目公民館 | 2月22日 | 二十二夜様保存会 | 女人講として安産信仰で如意輪観音に供え物をする。 | | |
| 511 | 8 | 〃 | 〃 | 江田の二十二夜様 | 江田町如意輪観音石像前 | 2月22日 | 二十二夜様保存会 | 約250年前の如意輪観音像の掛字が伝承されており、特に婦人の信仰が厚く、石像の前で和讃を奉納する。 | | |
| 512 | 8 | 〃 | 〃 | 古市の二十二夜講 | 古市町公民館 | 3月13日 | 二十二夜講中 | 文政の頃から安産の神を信仰する女性の講があった。縁日は3月13日だが、現在月2回、和讃を唱える。 | | |
| 513 | 24 | 〃 | 〃 | 古市の天道念仏講 | 〃 | 春秋彼岸の中日 | 天道念仏講中 | 男性のみの念仏講で会員15名で構成。日の出から日の入りまで念仏を唱え続ける。 | | |
| 514 | 15 | 〃 | 〃 | 小相木の八丁じめ | 小相木町町内8ヶ所 | 7月10日 | 自治会 | 寺にて祈祷を受けた札を、町境8ヶ所に立て疫病神への防ぎとともに町内の平和祈願。平成元年に復活。 | | |
| 515 | 15 | 〃 | 〃 | 古市の八丁じめ | 古市町外周の辻々 | 7月13日 | 自治会 | 大徳寺の住職に祈願してもらった「オンベロ」を3mほどの竹に付け、町境の辻13ヶ所に立て、疫病の侵入を防ぐ。 | | |
| 516 | 12 | 〃 | 〃 | 子育て地蔵尊祭 | 小相木町大徳寺 | 7月最終日曜 | 自治会・子供育成会 | 生まれた子供の健康・成長願い、氏名・生年月日を三角布団に記し、奉納。和讃を唱え地蔵神輿とともに町内巡行。平成元年、30年ぶりに復活。 | | |
| 517 | 27 | 〃 | 南橘村 | 青柳大師縁日 | 青柳町青柳山竜蔵寺 | 1月3日 | 竜蔵寺檀家他 | 天明の浅間大噴火の折に多くの人々の救済にあらわれたとして、信仰を集める。厄除大師にお参りしてお札を求める。 | | |
| 518 | 22 | 〃 | 〃 | 川原町のどんどん焼き | 川原町広場 | 1月15日 | 育成会 | お正月のお飾りやだるま等を各家庭から集めて焼き、残り火で餅やお正月の供物を焼いて食べ、健康を祈る。 | | |
| 519 | 22 | 〃 | 〃 | 上小出どんどん焼き | 上小出町国体公園 | 1月15日 | 子供育成会・みこし会 | 一時中止していたが、昭和57年より正月の縁起物や松などを子供の厄払も兼ねて焼き、豚汁などを振る舞う。 | | |
| 520 | 22 | 〃 | 〃 | 青柳のどんどん焼き | 青柳町白川河原 | 1月15日 | 青柳町自治会 | 古いだるま、お札類を焼く。 | | |
| 521 | 25 | 〃 | 〃 | 御獅子祭り | 上細井町新田地区 | 旧2月15日（現在2月第二日曜） | 自治会 | 150年前に、桐の根っこを材料として彫った白木の獅子頭を神棚にあげたところ、足の痛みがなおり、その後、この獅子に霊力があるとして悪魔祓いを行う。 | | |
| 522 | 8 | 〃 | 〃 | 北代田の若宮八幡様 | 北代田町若宮八幡宮 | 3月15日・9月15日 | 西曲輪地区 | ムラの鎮守様、同族神、屋敷神がウジガミとして祀られるようになったもので、地区の人が参道にのぼりを立て、お供物をあげる。 | | |
| 523 | 8 | 〃 | 〃 | 北代田のアキヤ様 | 北代田町神社前 | 3月16・17日、9月16・17日 | 地区 | 正しくは秋葉様。火伏せの神として祀られ、世話人が中心となって各家からお賽銭を集めお祭りを継続している。 | | |
| 524 | 12 | 〃 | 〃 | 上細井子育地蔵尊 | 上細井町新田地区 | 3月22日・8月22日 | 長寿会 | 児童を救済する子育地蔵尊として信仰。年間赤いお掛け、赤い帽子が着せられ、祭りは線香を焚き、全戸にお札等を配付。 | | |
| 525 | 24 | 〃 | 〃 | 日輪寺祭り（ナンマイダボ） | 日輪寺町菅原神社・公民館 | 8月1日 | 自治会 | 桐の棒を5cm程に切り、数珠のように108繋いだものを輪にして唄を唱えながら観音堂前や家々を練り歩く。 | | |
| 526 | 28 | 〃 | 〃 | 青柳町祇園祭 | 青柳町一円 | 8月7・8日 | 青柳町自治会 | 町内を上・下・西の3組に分け、それぞれに山車がお囃子を演奏し組内巡行。その後三台の山車が合同の町内一円の巡行を行う。 | | |
| 527 | 8 | 〃 | 〃 | 北代田の目薬師 | 北代田町目薬師前 | 9月8日 | 沼地区 | 高さ60cm程で赤い帽子に赤いお掛け。胸の前に両手で薬箱を支える。地区の人達はごちそうを作り、お参りをする。 | | |
| 528 | 29 | 〃 | 清里村 | 青梨子の天神待 | 青梨子町 | 2月24日 | 子供会 | 集会所に集まり、習字を書いた後、食事をする。 | | |
| 529 | 8 | 〃 | 〃 | 上青梨子町の庚申待ち | 上青梨子町集会所 | 3月第1日曜日 | 自治会 | 庚申塚を清掃し、参拝し、会食会を行う。 | | |
| 530 | 8 | 〃 | 〃 | 北内出町の庚申祭 | 北内井町内 | 3月か4月の申の日 | 地区 | 当番の家に集まり、掛軸を掛けて、祝い、酒食をともにする。 | | |
| 531 | 22 | 〃 | 〃 | 上青梨子町の百万遍 | 上青梨子町集会所 | 10月第1日曜日 | 自治会 | 数珠玉を老人、子供が囲んで念仏を唱えて廻す。 | | |
| 532 | 8 | 〃 | 木瀬村 | 上大島節分会 | 上大島町百番観音堂 | 2月3日 | 観音様親交会 | 約50名ほどの参加で豆まき、お札の配付を行う。 | | |
| 533 | 22 | 〃 | 〃 | 東上野天道念仏 | 東上野町内各戸 | 4月15日に近い日曜日 | 東上町自治会 | 「ナンマーハイドーカンボー」と集まった人が唱える。 | | |
| 534 | 28 | 〃 | 〃 | 駒形上町の祇園 | 駒形町会議所・小学校 | 7月最終土日曜 | 駒形町自治会 | 前田公の江戸屋敷の「鬼門除け」であった雌雄一対の獅子頭を貰い受け、祇園祭の御神体として会議所に安置し、祭が行われる。 | | |
| 535 | 8 | 〃 | 〃 | 上大島十日夜 | 上大島町百番観音堂 | 旧暦10月10日 | 観音様親交会 | 五穀豊穣の感謝祭で午前、午後3時間程かけて行う。 | | |
| 536 | 15 | 〃 | 〃 | 野中町庚申講 | 野中町当番各戸 | 毎年12月申の日 | 庚申講 | 庚申を祭る講で江戸時代から伝統を継続している。 | | |
| 537 | 22 | 〃 | 〃 | 上増田の天道念仏 | 上増田町大塚田公民館 | 3月18日 | 大塚田組 | 組住民を4等分して1組が年1回行う。以前は日の出から日の入りまで鉦を叩いたが、今は10時から3時頃で終了。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 538 | 8 | 前橋市 | 荒砥村 | 笂井三峯講 | 笂井日待廻り番 | 4月19日 | 講中 | 三峯神社代参5名で、お札を受けてきて、日待ちの家で赤飯で会食し、お札を分ける。 | | |
| 539 | 15 | 〃 | 〃 | 笂井水神祭 | 笂井町桃木川 | 7月24日 | 笂井町自治会 | 組長以上全員、川に入って、川上に向かって両手で水を汲み上げ、唱えながら水難除けを祈願。 | | |
| 540 | 15 | 〃 | 〃 | 二宮赤城神社夏越の祭り | 二宮町二宮赤城神社 | 7月31日 | 赤城神社氏子 | 午後2時過ぎ、神事後老若男女の人達が茅の輪をくぐり、無病息災を願う。 | | |
| 541 | 8 | 〃 | 〃 | 二子山由来和讃 | 西大室町最善寺 | 随時 | 東・西大室個人 | 明治11年、前二子古墳より立派な副葬品が多数発見されたことにより、発見時の様子や由来を後世に残すために作成。昭和51年より復活。 | | |
| 542 | 22 | 吉岡町 | 駒寄明治村 | どんど焼き | 各地区の田 | 1月14日 | 子供会 | 竹や松かざり等で三角錐状に組み上げ焼く。 | | |
| 543 | 8 | 〃 | 駒寄村 | 古峯講 | 下野田地区古峯神社 | 5月連休頃 | 北部・中部の各講 | 栃木県鹿沼市の古峯神社（火伏せの神）を崇拝する人々が講を作り毎年代参人が参詣しお札を配る。 | | |
| 544 | 26 | 榛東村 | 相馬村 | 宿稲荷神社の獅子舞 | 広馬場宿稲荷神社 | 2月初午 | 宿稲荷神社氏子 | 現在は2月の初午のみ開催され、近郷近在から参詣者で賑わう。また獅子舞の奉納もある。 | | |
| 545 | 22 | 〃 | 〃 | 下の前地蔵祭り | 広馬場下の前地区内 | 8月14・15日 | 親睦会 | 観音堂と地蔵堂の間を子供たちで巡行し、和讃を唱える。「下の前地蔵尊」の印の入った護符を配る。 | | 村 |
| 546 | 19 | 〃 | 〃 | 広馬場13区の地蔵祭り | 広馬場13区内 | 8月15日 | 親睦会 | 食料不足や飢饉を乗り越えて子供が健やかに育つよう地蔵尊（18世紀後半）を立てたのがはじまり。11種類の和讃を唱えながら新盆宅を巡回する。 | | 県 |
| 547 | 15 | 渋川市 | 古巻村 | みそぎ流し | 半田利根川坂東橋下 | 7月31日 | 地区 | 利根川の坂東橋下で行われる。身の汚れを流し、水難除けとなる。茅の輪をくぐり、人形を流す。 | | |
| 548 | 17 | 子持村 | 白郷井村 | 十二講 | 上白井 | 1月12日 | 講中 | 十二山神社（石祠か藁で作成）を拝み、当番宅に集まり飲食。 | | |
| 549 | 29 | 〃 | 〃 | 天神待ち | 上白井 | 1月24・25日 | 地区 | 小学生の3年以上が参加する。オヤカタの家で醤油飯などを煮てくれる。習字をし、そのまま皆で寝る。 | | |
| 550 | 8 | 〃 | 〃 | 櫃山開き | 上白井櫃山の頂上 | 5月8日 | 地区 | 櫃山（665m）の崩れを防ぐために富士浅間を勧請した。4地区より氏子総代・世話人が出ておみごくとお札を登山者に配る。 | | |
| 551 | 28 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 上白井 | 7月下旬の日曜 | 育成会 | 子供のみこし祭りとして行われている。 | | |
| 552 | 22 | 〃 | 〃 | 地蔵まわし（地蔵様） | 中郷 | 8月1日～13日 | 育成会 | 期間中の早朝、旗、地蔵みこし、鳴らしものの順で行列を組み「ナンマイダー」などと唱え各戸を廻り、奉賀を集める。 | | |
| 553 | 22 | 〃 | 長尾村 | どんど焼き | 北牧河原 | 1月15日 | 育成会 | 門松やシメ縄飾り等を焼く。 | | |
| 554 | 26 | 〃 | 〃 | 稲荷祭り | 北牧西稲荷地区 | 2月の初午 | 稲荷地区の氏子 | 幕末、島田新左衛門の屋敷稲荷を共同化して氏子が祭典をするようになった。五穀豊穣を祈願する。 | | |
| 555 | 8 | 〃 | 〃 | 弁天様祭典 | 鯉沢 | 4月14・15日・10月14・15日 | 鯉沢自治会 | 木版で弁天様を刷り、供物を供え式典後、各家庭にお札と餅を配付する。 | | |
| 556 | 22 | 小野上村 | 小野上村 | どんど焼き | 村上堀の内、田島の空田 | 1月14～16日のいずれか1日 | 堀の内地区 | 子供達と竹を切り、松等を集め建て、古くなったダルマや祈祷札などを一緒に燃やす。 | 順調 | |
| 557 | 29 | 〃 | 〃 | 天神待ち | 小野子程久保地区 | 1月25日 | 程久保地区 | 菅原神社で行う。福引きを行う程度で、現在は参拝も少ない。 | | |
| 558 | 26 | 〃 | 〃 | お稲荷さん | 小野子木の間地区 | 2月11日 | 金甲稲荷神社氏子 | 木の間地区を中心とした祭典の場所で古くから初午の日に年番世話人が中心となって行われる。 | 順調 | |
| 559 | 22 | 〃 | 〃 | 観音様祭り | 村上中尾地区 | 3月後半中日 | 上・下中尾保存会 | 若者が中心となって、神輿を担いで上・下中尾地区を一軒一軒廻り、地区内の人々の無病息災を祈願する。 | 順調 | |
| 560 | 15 | 〃 | 〃 | 荒神様 | 村上田島地区 | 3月27日 | 田島地内氏子 | かまど・火の神として、荒神は三面六臂の木像で三宝荒神社屋に納められている。供え物をして飲食する。 | 順調 | |
| 561 | 8 | 〃 | 〃 | 金毘羅様のお祭り | 村上中尾地区 | 4月第1日曜 | 中尾青年会 | 五穀豊穣・氏子繁昌を祈念し、獅子舞を奉納。福引も出して盛大に行われる。 | 順調 | |
| 562 | 23 | 〃 | 〃 | 浅間神社の祭典 | 村上浅間神社境内 | 4月13日 | | 子授け、安産の神として信仰される。かつては太々神楽・獅子舞の奉納もあったが現在は無く、お札配付と福引のみである。 | 順調 | |
| 563 | 22 | 〃 | 〃 | 延命地蔵尊祭り | 村上堀の内平地区 | 7月24日 | 平地区 | トラックの荷台に地蔵様の神輿を乗せて子供達の無病息災を願い行われている。 | 順調 | |
| 564 | 8 | 〃 | 〃 | 藤巻観音様 | 小野子昭和地区 | 7月末の日曜 | 昭和地区 | 地区全戸が御堂に集まり、僧侶読経の後、念仏を唱え数珠を廻す。お供物・お札を参詣者に配る。 | 順調 | |
| 565 | 16 | 〃 | 〃 | 根利本明神日待 | 小野子西部地区 | 八十八夜、二百十日の前夜 | 西部地区 | 100年以上続いているもので、春は遅霜が降りない様、秋は台風が来ない様御神酒をお供えして拝む。 | 順調 | |
| 566 | 17 | 〃 | 〃 | 十二様のお祭り | 村上上中野地区 | 9月29日 | 上中尾地区 | 地区の人が裏山に登り、御神酒、赤飯を供えお祭りをする。山の中腹と頂上に石宮がある。 | 順調 | |
| 567 | 15 | 群馬町 | 金古町 | 道祖神 | 金古足門 | 1月14日（15日） | 子ども組・青年会 | 各大字界に3～4本、多いところで7本程の八丁じめを行う。 | | |
| 568 | 26 | 〃 | 〃 | 甲州稲荷 | 本光寺 | 2月初午 | 中・下宿地区 | 本光寺境内にあり、養蚕信仰の一つとしてまゆ玉の倍返しなどがあった。現在は会食中心の簡単なものとなる。 | | |
| 569 | 26 | 〃 | 〃 | 桃山稲荷 | 金古桃山稲荷 | 初午（以前は八十八夜） | 下宿・上組講 | 養蚕や農・商業の神として信仰され、大勢の参詣者があった。現在は初午の日に行われる。 | | |
| 570 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 金古上宿 | 4月8日・10月18日 | 女人講 | 如意輪観音像の掛軸を掛け、和讃、会食。 | | |
| 571 | 8 | 〃 | 〃 | 観音様 | 内金古観音堂 | 4月8日 | 女人講 | 子育観音。念仏を唱え、歳の数だけ甘茶をかける。 | | |
| 572 | 8 | 〃 | 〃 | 妙義様 | 木戸際妙義社 | 4月9日・9月9日 | 土組 | 火伏せの神として祀られる。灯籠をたてる。 | | |
| 573 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様 | 足門八坂神社 | 4月15日・7月14日 | 八坂神社氏子 | オギヨン厄除け・病虫害除けを行う。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 574 | 8 | 群馬町 | 金古町 | 庚申講 | 金古　諏訪 | 4月庚申日 | 講中 | 五人組・七人組などを中心に行われている。宿は輪番制で、場所によっては「食いごろしん」など月待ち行事をする。 | | |
| 575 | 15 | 〃 | 〃 | 愛宕様 | 愛宕 | 7月24日 | 地区 | 雨乞い、火難・盗難を防ぐとして信仰される。 | | |
| 576 | 17 | 〃 | 〃 | 十二様 | 金古 | 10月12日 | 地区 | 沢の十二山お宮にオンベロ赤飯・塩・魚（オコゼ）・煮干し・秋刀魚・酒 | | |
| 577 | 8 | 〃 | 〃 | 太子講 | 金古　諏訪神社前 | 毎月21日（1月21日） | 職人講 | 五職講（大工・左官・鳶職・建具・畳）掛軸を掛け、供え物をし、会食を行う。 | | |
| 578 | 15 | 〃 | 国府村 | 道祖神 | 国府内の各大字ごと | 1月14日 | 区民・道祖神子 | 小屋造り（7日）を行い、松飾り等を燃やす。 | | |
| 579 | 8 | 〃 | 〃 | 福守様 | 後疋間　諏訪神社 | 1月22日・4月12日・7月22日・10月9日 | 地区 | 祭神は木之花咲夜昆売命で、男根を奉納、子供の生まれない人やしもの病の人等が願かけに来る。 | | |
| 580 | 8 | 〃 | 〃 | 武州御嶽講 | 西国分　新田 | 3月～4月 | 講中 | 講員15～16人、代参を行い、お犬様の掛軸を掛け、「オヒマチ」を行う。 | | |
| 581 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 西国分　後疋間他 | 4月庚申日 | 庚申組 | シメ縄を用意し、赤飯・うどん等で会食する。 | | |
| 582 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様 | 西国分　三ツ屋 | 7月15日 | 地区 | 赤飯を上げ、参詣。 | | |
| 583 | 24 | 〃 | 〃 | 地蔵祭り | 西国分　地蔵堂内 | 7月16日 | 地区 | 鉦と太鼓に合わせて念仏を唱和し、大数珠を廻す。 | 順調 | |
| 584 | 8 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 引間　後疋間 | 9月8日 | 男子組・若者組 | 染谷川をはさみ、薬師様の取り合い。一把線香とロウソクをあげる。 | | |
| 585 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜様 | 西国分 | 毎月22日 | 女人講 | 掛軸を掛け、和讃を唱え食事。 | | |
| 586 | 15 | 〃 | 堤ヶ岡村 | 道祖神 | 堤ヶ岡各地区 | 1月14日 | 青年会地区 | 小屋作り及びドンド焼きを行う。 | | |
| 587 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 菅谷浄眼寺 | 3月・10月22日 | 女人講 | 和讃を唱える。 | | |
| 588 | 15 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 観音寺棟高 | 春秋庚申日 | 地区 | ぼた餅を供え、会食。 | | |
| 589 | 15 | 〃 | 〃 | 〃 | 菅谷三ツ寺 | 4月の庚申日 | 全戸順番制 | シメ縄を用意し、アンコロ餅を供え、五目飯を会食。 | | |
| 590 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜様 | 棟高公会堂 | 4月・10月22日 | 女人講 | 和讃を唱える。 | | |
| 591 | 8 | 〃 | 〃 | 虎薬師 | 菅谷石塚古墳 | 9月8日 | 地区 | 眼病・腰・膝の病の平癒。 | | |
| 592 | 8 | 〃 | 〃 | 秋葉講（火わたり） | 中里公会堂 | 4月17日 | 講中 | 行者が中心となる祭りで、祈祷の後、無病息災・五穀豊穣を祈願し火わたりを行い、一般の人たちもわたる。 | | |
| 593 | 8 | 〃 | 上郊村 | 薬師様 | 保渡田両光寺 | 9月8日 | 地区 | 薬師堂があり、眼病治癒の効験あり。「め」札配付。 | | |
| 594 | 22 | 箕郷町 | 箕輪村 | 道祖神祭り（どんどん焼き） | 矢原原中 | 1月7日～15日 | 地区 | 各家の門松・正月飾り等を集め、道祖神小屋を造り、小屋に火をつける。 | 順調 | |
| 595 | 27 | 〃 | 〃 | 箕輪市 | 上芝 | 2月28日、12月28日 | 露天商 | 年に2度あり、節供用品を売る2月28日の雛市、正月の飾り物を扱う暮の市がある。 | 順調 | |
| 596 | 19 | 〃 | 〃 | 今宮地蔵尊 | 柏木沢今宮地区 | 8月13～16日 | 地区 | 江戸時代中頃より開始した。子供の無病息災祈願で、神輿を中心に燈籠で囲み、太鼓・鉦に合わせて和讃を唱えながら練り歩く。 | 順調 | 町 |
| 597 | 22 | 〃 | 車郷村 | 道祖神祭り（どんどん焼き） | 白川 | 1月7日～15日 | 地区 | 各家の門松・正月飾り等を集め、道祖神小屋を造り、小屋に火をつける。 | 順調 | |
| 598 | 16 | 〃 | 〃 | 九頭竜待 | 白川宿地区 | 4月第2日曜 | 宿地区 | 明治43年に起きた榛名白川の大水害以降開始。信州戸隠神社で九頭龍神の御札をもらい、石宮にお参りし、会食する。 | 順調 | |
| 599 | 22 | 榛名町 | 久留馬村 | 道祖神祭（どんど焼き） | 久留馬 | 1月15日前後の日曜 | 各地区 | 各地区で、青竹とワラを組み合わせた円錐形の道祖神小屋を作り、正月の松飾りや注連縄などと一緒に燃やす。 | 順調 | |
| 600 | 8 | 〃 | 〃 | 百庚申 | 久留馬 | 4月20日 | 本郷・新井下長地区 | 本郷・新井下長地区で、庚申塔が数多く建立されている百庚申に対する祭りで、穢れの祓い及び無病息災を祈願。 | 順調 | |
| 601 | 19 | 〃 | 〃 | 地蔵盆 | 久留馬 | 8月14日 | 白岩新田地区 | 子供たちがあらかじめ準備しておいた神輿に地蔵尊を乗せ、地区内を廻る。 | 順調 | |
| 602 | 22 | 〃 | 室田村 | 道祖神祭（どんど焼き） | 室田 | 1月15日前後の日曜 | 各地区 | 各地区で、青竹とワラを組み合わせた円錐形の道祖神小屋を作り、正月の松飾りやシメ縄などと一緒に燃やす。 | 危機 | |
| 603 | 28 | 〃 | 〃 | 天王さま | 室田 | 7月21日 | 室田地区 | 掛声とともに、子供たちが神輿を担いでねりだし、各戸をお祓いする。 | 順調 | |
| 604 | 22 | 〃 | 里見村 | 道祖神祭（どんど焼き） | 里見 | 1月15日前後の日曜 | 各地区 | 各地区で、青竹とワラを組み合わせた円錐形の道祖神小屋を作り、正月の松飾りやシメ縄などと一緒に燃やす。 | | |
| 605 | 8 | 〃 | 〃 | 涅槃会 | 里見 | 2月15日 | 上大島地区 | 地区の女性が、会場となる公民館に集まり、涅槃図を掛け、供物を供え、お経を唱え、懇談する。 | 順調 | |
| 606 | 29 | 〃 | 〃 | 天神講 | 里見 | 1月最終日曜 | 神山地区 | もとは子供たちだけが集まり、天満宮にお参りした後、飲食したが、現在は育成会の役員と一緒に行う。 | 危機 | |
| 607 | 24 | 倉淵村 | 倉田村 | 念仏講 | 陣田 | 3月彼岸の中日 | 陣田地区 | 仏像に念仏玉を入れて、鉦と太鼓を叩き、念仏を唱え、計13回繰り返す。 | 危機 | |
| 608 | 8 | 〃 | 〃 | 産泰講 | 三ノ倉暖井 | 3月内適宜 | 暖井地区 | 若い嫁が身軽で出席し、産泰様に供物をし拝んだ後、温泉や料理屋に行き会食。 | | |
| 609 | 24 | 〃 | 〃 | 百万遍 | 綱取 | 8月1日 | 綱取地区 | 観音堂に集まり、鉦・太鼓を叩きながら、念仏を繰り返し唱え、終了後はお札を持ちかえる。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 610 | 29 | 倉淵村 | 倉田村 | 天神講 | 各地区 | 12月25日 | 長井地区他 | 小学生から中学生が主体で実施し、天神様にのぼりを立て、お参りした後、宿で飲食し、一夜を過ごす。 | | |
| 611 | 8 | 〃 | 鳥淵村 | 水沼観音縁日 | 水沼 | 1月16・17日、8月16・17日 | 蓮華院 | 蓮華院境内で1月には初市を、8月に夏の縁日がたつ。現在も30軒程の露店が並ぶ。 | 順調 | |
| 612 | 8 | 〃 | 〃 | 産泰講 | 中尾、他各地区 | 4月28・29日 | 各地区 | 産泰神社にお参りをし、温泉・保養施設に会場を借り、掛軸を下げ、拝礼して会食。 | | |
| 613 | 29 | 〃 | 〃 | 天神講 | 外道、他各地区 | 12月25日 | 各地区 | 男女一緒で、公会堂を会場として半紙に各人の願いを書き入れ、まとめて天神様の祠に納め、会食、歓談。 | | |
| 614 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 岩永 | 冬季 | 各組 | 岩永には3組の庚申講があり、現在は食堂に3組とも掛軸を掛け、会食をする。 | | |
| 615 | 22 | 高崎市 | 片岡村 | 道祖神焼き | 寺尾町館 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とワラで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 616 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 〃 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | | |
| 617 | 22 | 〃 | 六郷村 | 道祖神焼き | 下豊岡町十二社 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 618 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 上小塙町 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | | |
| 619 | 28 | 〃 | 〃 | 天王様 | 上小塙町字東原 | 7月15日 | 地区 | 天王様は厄除けの神様で、お祓いをした後、天王様の前で飲食し、花火をする。 | | |
| 620 | 24 | 〃 | 〃 | 百万遍 | 上小塙町 | 7月17日・22日・23日など | 各地区 | 子供達が大きな数珠を持って村中を一巡し、各家々の庭先や土間で唱えながら回り、数珠をたたきつける。 | | |
| 621 | 22 | 〃 | 川間村 | 道祖神焼き | 八幡町 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 622 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 〃 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | 順調 | |
| 623 | 8 | 〃 | 〃 | 城峯様（三峯講） | 藤塚町下藤塚花見堂 | 2月初め・4月8日・4月末～5月初 | 各地区 | 代表数人で埼玉の城峯様へ行き、お札を受けて、お仮屋に納め、宿に戻り講員に配り、飲食する。 | | |
| 624 | 24 | 〃 | 〃 | 百万遍 | 藤塚町道久保 | 7月17日・22日・23日など | 各地区 | 子供達が大きな数珠を持って村中を一巡し、各家々の庭先や土間で唱えながら回り、数珠をたたきつける。 | | |
| 625 | 19 | 〃 | 〃 | 地蔵祭り | 八幡町 | 8月下旬 | 各地区 | 子供のお祭りで、地蔵尊の前に燈籠を並べちょうちんを吊す。地蔵をお参りに来た人に果物を売り、代金と賽銭を子供達で分ける。 | | |
| 626 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 〃 | 毎月22日・年2回・正月22日など | 各地区 | 安産・子育ての神として、女人講で祀る。掛軸を掛け、供物を供え、和讃を唱えて、会食する。 | | |
| 627 | 22 | 〃 | 豊岡村 | 道祖神焼き | 下豊岡町十二社 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 628 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 上豊岡町 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | | |
| 629 | 19 | 〃 | 〃 | 地蔵祭り | 上豊岡町・中豊岡町 | 8月下旬 | 各地区 | 子供のお祭りで、地蔵尊の前に燈籠を並べちょうちんを吊す。地蔵をお参りに来た人に果物を売り、代金と賽銭を子供達で分ける。 | | |
| 630 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 上豊岡町前村 | 毎月22日・年2回・正月22日など | 各地区 | 安産・子育ての神として、女人講で祀る。掛軸を掛け、供物を供え、和讃を唱えて、会食する。 | | |
| 631 | 22 | 〃 | 大類村 | 道祖神焼き | 南大類町・下大類町 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 632 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 南大類町 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | | |
| 633 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 上大類町淵ノ上 | 毎月22日・年2回・正月22日など | 各地区 | 安産・子育ての神として、女人講で祀る。掛軸を掛け、供物を供え、和讃を唱えて、会食する。 | | |
| 634 | 8 | 〃 | 八幡村 | 城峯様（三峯講） | 山名町天水 | 2月初め・4月8日・4月末～5月初 | 各地区 | 代表数人で埼玉の城峯様へ行き、お札を受けて、お仮屋に納め、宿に戻り講員に配り、飲食する。 | | |
| 635 | 19 | 〃 | 〃 | 地蔵祭り | 山名町字山ノ上 | 8月下旬 | 各地区 | 子供のお祭りで、地蔵尊の前に燈籠を並べちょうちんを吊す。地蔵をお参りに来た人に果物を売り、代金と賽銭を子供達で分ける。 | | |
| 636 | 22 | 〃 | 倉賀野町 | 道祖神焼き | 倉賀野町内全域 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 637 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 〃　下町 | 春・秋・12月の申の日・10月など | 各地区 | 青面金剛の掛軸を飾り、宿に集まり飲食・歓談する。 | | |
| 638 | 17 | 〃 | 〃 | 太子講 | 〃　字下樋越 | 1月から2月の都合の良い日 | 高崎職工組合 | 大工・鳶・ブリキ屋・石屋・瓦屋が1月15日に祀っていたが、最近は年番の人の都合で日にちを決める。養報寺よりお札を受け、餅を奉納する。 | 順調 | |
| 639 | 8 | 〃 | 滝川村 | 道祖神焼き | 上滝町中島・下斎田町八幡原町 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 640 | 22 | 〃 | 京ヶ島村 | 道祖神焼き | 大沢町・萩原町西島町・西横手町 | 1月14日か15日 | 各地区 | 子供が主体となり、正月のお飾りを子供達が集め、竹とわらで作った道祖神小屋と一緒に燃やす。 | | |
| 641 | 8 | 〃 | 〃 | 二十二夜講 | 大沢町・京目町西島町・元島名町 | 毎月22日・年2回・正月22日など | 各地区 | 安産・子育ての神として、女人講で祀る。掛軸を掛け、供物を供え、和讃を唱えて、会食する。 | | |
| 642 | 22 | 安中市 | 各町村 | どんどん焼き | 各地 | 1月15日 | 子ども育成会 | 7日に竹や篠を集めて道祖神小屋を作り、15日の朝に燃やし、繭玉やスルメを焼いて食べる。 | | |
| 643 | 21 | 〃 | 磯部村 | 鳥追い祭 | 下磯部馬場地区 | 1月14日 | 地区 | 中学3年生が親方になり、リヤカーに太鼓を固定し、太鼓を叩き歌いながら村中の道路を廻る。 | | |
| 644 | 21 | 〃 | 東横野村 | 鳥追い祭 | 鷲宮字宮本咲前神社 | 1月14日 | 東横野8区（宮本地区） | 道祖神の旗を待ち、太鼓を鳴らし、鳥追い歌を歌いながら、宮本の中を行進し、村境で、道祖神の旗を集めて火をつける。 | | |
| 645 | 22 | 富岡市 | 富岡町 | ドンド焼き | 富岡 | 1月14日 | 8区（公園組） | 道祖神を祀った後、当番が廃材などを燃やし、近所の人々が来て、それぞれ正月飾りや繭玉飾りを持って焼く。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 646 | 15 | 富岡市 | 黒岩村 | オカグラ | 黒川 | 1月15日 | 上黒川・下黒川地区 | 子供達が、太鼓と獅子頭を持って各戸をまわり、獅子が家人の頭を噛み、木製の箱を家人の頭にかざし、無病息災を祈る。 | | |
| 647 | 17 | 〃 | 〃 | 餅投げ | 黒川 | 2月8日ころ | 上黒川各地区 | 雨宮神社の西裏に山の神を祀る祠があり、この屋根の上にのぼって餅を投げることが行われる。 | | |
| 648 | 2 | 〃 | 一ノ宮町 | 道祖神祭 | 一ノ宮 | 1月15日（隔年） | 一ノ宮各組 | 花や人形を飾った5台の屋台が各組内を巡行し、貫前神社に集合する。屋台は紙で作った花で飾り、各組で趣向をこらした人形を付ける。 | | |
| 649 | 19 | 〃 | 〃 | 百八灯 | 神農原 | 8月16日 | 神農原百八燈保存会 | 上信越自動車道の側道沿いに108つの灯りを灯す。現在は缶に石油を浸した布を入れて燃やしている。 | | |
| 650 | 19 | 〃 | 高瀬村 | 大島火祭り | 大島 | 8月16日 | 大島火祭り保存会 | 大島地区の各世帯から1名ずつ集まり、城山の中腹に火文字をつくる。文字はその年に因んだこと等から決める。 | | |
| 651 | 3 | 〃 | 吉田村 | 石尊講 | 南蛇井 | 9月1日 | 小倉・梅沢・千平地区 | 鍬柄岳山頂にボンデンを奉納。ボンデンは計3本立てられる。参拝者は新しいオタチ（木製刀）をオコモリヤに供え、納めてあるオタチを借りて神棚や玄関に置き、家内安全・五穀豊穣を祈願する。 | | |
| 652 | 15 | 〃 | 丹生村 | 道餐祭り | 下丹生 | 7月20日 | 打越地区 | 竹にお札と縄をつけて、集落境に立てる。疫病除けだという。お札は妙義神社から貰う。 | | |
| 653 | 22 | 〃 | 〃 | ナイダ | 下丹生 | 夏休み初日 | 下丹生東区 | 小1から中2までの男子が、数珠と太鼓を持ち、地区内の各戸をまわり、疫病除けを祈願する。 | | |
| 654 | 16 | 〃 | 〃 | 石尊講 | 上丹生 | 7月下旬 | 上丹生八幡 | 丹生川に降りてボンテンと小さな棒にオンベロを挟んだものを立て、「犬山権現」といいながらオンベロに水を掛ける。 | | |
| 655 | 19 | 〃 | 〃 | 百八灯 | 上丹生 | 8月16日 | 上丹生八幡 | 悪魔除けの行事で、城山へのぼり、百八つの灯りを灯し、平坦地にカンテラを下げ、花火を打ち上げる。 | | |
| 656 | 4 | 〃 | 〃 | 灯籠祭り | 上丹生 | 8月27日 | 上丹生菅原 | 疫病鎮めのために、菅原富岡線沿いと、鳴沢不動までの道沿いに灯籠を立てる。灯籠には思い思いの絵を描く。 | | |
| 657 | 8 | 〃 | 福島町 | 庚申講 | 原田様 | 4月第2日曜 | 各組・講中単位 | 庚申様の場所を掃除し、シメ縄を張り、オタキアゲをし、酒を供えて豊作を祈願し、飲食をする。 | | |
| 658 | 24 | 〃 | 〃 | オショウジン | 田篠 | 7月下旬 | 田篠地区 | 7月に行われる川原掃除の時に、竹にお札を付けて集落内の辻々に立てる。 | | |
| 659 | 2 | 甘楽町 | 小幡町 | 小幡八幡宮大祭 | 小幡 | 4月10日（5年に1度） | 第1区 | 小幡八幡宮の例祭で横町・上町・中町・下町の各町で1台づつ保有し、飾り人形を備え、屋台はやしがある。 | 順調 | |
| 660 | 19 | 〃 | 新屋村 | 百八灯（ナンマイダ） | 白倉 | 8月15日 | 本村育成会（子供会） | 天王様の石製の祠のまわりや石積の間に108本のローソクを灯し、念仏を唱えながら数珠を回して無病息災を願う。 | 危機 | |
| 661 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申待ち | 天引 | 2月の当番の都合の良い日 | 25区7組 | 午前10時に当番（組長）の家に集まり、猿田彦大神の掛軸を掛け、礼拝し、飲食が始まり、当番組長の引き継ぎが行われる。 | 順調 | |
| 662 | 15 | 〃 | 〃 | お天狗様の祓 | 白倉・造石 | 7月第4日曜日 | 白倉神社氏子 | 人形と麻入りの紙吹雪で各目を清める。その後、各組への進入路に1～2m程の若竹をたて、木製で神社名等を墨書きした数十cmの太刀を若竹に取りつけ、悪霊等の進入を防ぐ行事で明治初期から開始された。 | 順調 | |
| 663 | 17 | 〃 | 秋畑村 | 太子講 | 秋畑 | 1月～3月の間の日曜日 | 地区職人連合 | 建設・製材・電気・水道施設・大工・左官業等の参加者で、太子像の掛図に供物を供え、飲食懇談し、餅を持ち帰る。 | 順調 | |
| 664 | 2 | 松井田町 | 松井田町 | 八坂神社例祭 | 仲町公会堂 | 1月第3日曜日 | 仲町氏子 | 神輿を出し、神輿愛好保存会の応援を得て、街中を練り歩く。 | | |
| 665 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰講 | 南町公会堂 | 4月15日・11月15日 | 南町区民講中 | 三峰神社まで火除等の御札を代表者が戴きに参り、線香をたいて祈祷する。 | | |
| 666 | 8 | 〃 | 〃 | 城峰講 | 新田公会堂 | 4月末～5月 | 新田講中 | 埼玉の城峰より火伏の御札を戴き、掛軸を室内にかけて参拝する。 | | |
| 667 | 28 | 〃 | 〃 | 天王尊 | 中宿公民館 | 7月24日 | 中宿区民 | 疫病除の神を石宮に祀る。太鼓を鳴らし、年番班が寄合い、飲食する。御札を各戸へ。 | | |
| 668 | 2 | 〃 | 〃 | 八幡宮例祭 | 八幡宮 | 10月15日 | 八幡宮氏子 | 獅子頭が新田に3、仲町に2あり、例祭の際に先導を務める。山車が区別に4台あり、街中を練り歩く。 | 順調 | 町（屋台） |
| 669 | 8 | 〃 | 〃 | 犬念仏 | 森崎 | 10月か11月の戌の日 | 区内女性 | 当番家の座敷に12匹の犬の描かれた掛軸を吊し、ついた餅を食して、夜中12時に三叉辻まで送る。 | 危機 | |
| 670 | 22 | 〃 | 坂本町 | どんどんやき | 北野牧字狐萱 | 1月14日夜 | 地区 | 正月飾等を集めて燃やす。ヌルデの木で作った太刀やマユダマを燃やす。太刀は1本は道祖神に供え、1本は家へ持ち帰り神棚に上げる。 | 危機 | |
| 671 | 15 | 〃 | 〃 | 道祖神の火事見舞 | 〃 | 2月8日ころ | 狐萱邑中 | 疫病神を自分の小屋を焼くことで、村人を護った道祖神に感謝し、火事見舞いをする。道祖神に礼を述べ、道祖神の体中にほたもちを塗りつける。 | 危機 | |
| 672 | 17 | 〃 | 〃 | 山の神の祭り | 〃 | 3月16日 | 山ノ神の狐萱講中 | 上座に山の神の掛軸を掛け、その前に供物を捧げる。山仕事の安全祈願をした後、会食、歓談する。 | 危機 | |
| 673 | 16 | 〃 | 〃 | イナムラサン（石尊様） | 〃 | 7月28日 | 石尊講中 | 稲村山頂に登り、石祠のわきに梵天を立て、供物を供えシメ縄を張り替える。大山阿夫利神社の主神の降雨の神としての石尊様に対する信仰である。 | 危機 | |
| 674 | 2 | 〃 | 〃 | 八幡宮秋祭り | 坂本 | 9月中旬の土・日 | 八幡宮祭典委員会 | 神前で御祈祷の後、山車が青年団や子供達によりひかれ、上宿・中宿・下宿の順に宿内往還を練る。 | 順調 | |
| 675 | 2 | 〃 | 細野村 | 天神講 | 上増田熊の谷地区 | 2月11日 | 熊の谷地区 | 熊宮三社の天満宮石祠にお供え、お参りをした後、年番の家で天神様の掛軸を掛け、学業成績向上の祈願をする。 | 危機 | |
| 676 | 8 | 〃 | 〃 | 碓谷戸のおくまんさん | 碓谷戸おくま大明神 | 3月15日 | 新井西見地区 | 女衆だけの祭りで、おくま大明神にお供えをし、安全と繁栄祈願。その後、会食、懇談する。 | | |
| 677 | 8 | 〃 | 〃 | 御嶽講 | 上増田熊の谷、木馬瀬 | 3月17日・4月16日 | 地区 | 2地区別個に、高戸谷山頂の御嶽神社で地区の繁栄を祈願する。石祠を清め、飲食、歓談する。 | | |
| 678 | 8 | 〃 | 〃 | 千ヶ滝の祭り | 土塩 | 3月28日に近い日曜日 | 地区 | 世話人の準備のもと、不動明王はじめ多くの神仏、宮が清められ、当日は出店も出て賑やかな祭りとなる。 | 危機 | |
| 679 | 8 | 〃 | 〃 | 産泰講 | 上増田熊の谷地区 | 4月10日 | 地区 | 産泰大神宮の掛軸を掲げ、女衆が集まり、子供の健やかな成長を祈願し、飲食、歓談する。 | | |
| 680 | 16 | 〃 | 〃 | 精進講（石尊講） | 上増田八区西・東 | 7月2日 | 各地区 | 「雨ごい」行事。年番代表が河で身を清め、山の石宮にお供物等をして祈願。その後、飲食、歓談する。 | | |
| 681 | 8 | 松井田町 | 細野村 | 秋葉さん（あきやさん） | 新井西見地区 | 12月17日 | 地区 | 秋葉神社にお参りし、供物を供え、安全を祈願。夜、当番の家に集まり飲食、歓談する。 | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 682 | 22 | 〃 | 九十九村 | どんどん焼き | 下増田・百国・小日向地区 | 1月15日 | 各地区子供育成会 | 地域の小・中学生を集め、竹の周囲に杉の枝でピラミッド状のやぐらを組み、お札・ダルマなどとともに燃やし、マユ玉を焼いて食べる。 | 盛ん | |
| 683 | 22 | 〃 | 〃 | 天神講 | 下増田 | 1月末の日曜日 | 地区の小学生 | 子供達が中心に集まり、五目ご飯を作り、手にのせ、神社のまわりを1周する間に食べ、お神酒をあげる。 | | |
| 684 | 24 | 〃 | 〃 | 先祖祭り（念仏講） | 春彼岸 | 春彼岸 | 念仏仲間（女性） | 地区の女性だけが長老を中心に集まり、13仏の掛軸を掛け念仏を唱えた後、墓参りし、その後全員で料理を食べる。 | 順調 | |
| 685 | 29 | 〃 | 〃 | 天神まつり | 下増田 | 3月25日・4月26日・10月15日 | 氏子団体 | 氏子が中心となり、春秋2回まつりを行う。春には養蚕用具を中心とした市がたつ。 | | |
| 686 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申待ち | 高梨 | 11月の申の日 | 講中 | 年番の家に集まり、十三仏の掛軸を掛け、供物を供え、会食する。 | 順調 | |
| 687 | 22 | 〃 | 臼井村 | どんど焼き | 横川・西尾 | 1月14日 | 子ども育成会 | 門松や古いお札を燃やして、おまい玉を焼いて食べる。 | | |
| 688 | 8 | 〃 | 〃 | 六夜様 | 横川字二階 | 3月26日 | 龍洞寺元檀家 | 明治4年、新堀の金剛寺に合併された龍洞寺の檀徒が当時を偲び、年とは関係なく元檀徒が集まって行う。 | 順調 | |
| 689 | 8 | 〃 | 〃 | 三峰山の横川講 | 横川 | 4月15日 | 講員 | 三峰神社本山のお札は郵便代参とするが、講員の家を順番に宿として家内安全・健康長寿を祈願し、会食歓談する。 | 順調 | |
| 690 | 19 | 〃 | 〃 | 矢の沢の子育て地蔵まつり | 横川宮ノ前地区 | 8月23・24日 | 宮ノ前地区 | 古くから信仰の厚い子育て地蔵で、明治43年の流出後、新しく建立さらに昭和59年にも新しく地蔵を加え祀る。 | 順調 | |
| 691 | 8 | 〃 | 〃 | 平の庚申講 | 五料字平 | 11・12月の庚申の日 | 講中 | 講員（8軒）の家を宿として順番に廻り、青面金剛絵像を掲げ、供え物をして、健康長寿を祈り、皆で会食歓談する。 | 順調 | |
| 692 | 21 | 〃 | 西横野村 | 鳥追い | 上人見・高野谷戸・二軒在野・鳥留 | 1月14日 | 子ども育成会・子ども | リヤカーに太鼓を乗せ太鼓を叩きながらかけ声をかけながら地区内を廻る。全部で4地区で鳥追いを行っている。 | 順調 | |
| 693 | 22 | 〃 | 〃 | どんど焼き | 八城 | 1月15日 | 子ども育成会 | 竹・杉等を利用して円錐形のやぐらを作り、正月飾り等を燃やし、まゆ玉を焼いて食べる。 | 危機 | |
| 694 | 5 | 〃 | 〃 | 先祖祭り | 大王寺 | 2月21日に近い日曜日 | 須藤一家 | 須藤姓の家（25軒）で、一族による先祖まつりである。宿を毎年順番にまわし、掛軸を2本掛け、祈祷後、会食。 | 危機 | |
| 695 | 8 | 〃 | 〃 | 庚申講 | 行田 | 11月の庚申の日 | 講中 | 行田地区（9軒）で行われる庚申講で、掛軸を掛け、供物を供え、拝礼し、会食する。 | 順調 | |
| 696 | 8 | 妙義町 | 妙義町 | 天神講 | 各地区 | 2月15・24日、3月24日 | 講中 | 女性の講であり、毎年宿を決めて集まり餅やけんちん汁を作って会食歓談する。 | | |
| 697 | 15 | 〃 | 〃 | 行沢の北向き観音 | 行沢 | 1月18日 | 行沢地区 | 北向観音堂にて厄除札を配付し、参道に旗を10数本立て、地区の各入り口に八丁ジメを作る。 | 順調 | |
| 698 | 15 | 〃 | 〃 | 行沢の石尊講 | 行沢 | 7月後半の日曜日 | 行沢地区 | 二つ岩の深い渕（精進場）で大山石尊を祀る。岩に張ったオシメの紙が落ちるまで水をかけて祝う。ヒトガタで身体を撫でて川に流すと、災厄が流れるという。 | 順調 | |
| 699 | 2 | 下仁田町 | 下仁田町 | 諏訪神社例大祭 | 下仁田 | 10月中旬の土日 | 祭典委員会 | 神輿及び山車6台で悪病や災害の退散を祈願し、町内を巡行する。 | 順調 | |
| 700 | 5 | 〃 | 〃 | 鬼子母神祭り | 東野牧 | 11月中旬土日 | 鬼子母神社氏子 | 明治13年、山梨県から鬼子母神の分霊として御幣束を受けてきて祀っている。 | 順調 | |
| 701 | 22 | 南牧村 | 村内各地区 | どんどん焼き | 磐戸村・月形村・尾沢村 | 1月14日 | 各地区 | 正月で使用した飾り物などを焼き、その火でまゆ玉を焼いて食べて、1年の無病息災を祈願する。 | 順調 | |
| 702 | 1 | 〃 | 月形村 | 大日向の火とばし | 大字大日向 | 8月14日・15日 | 大日向区 | 盆の行事として行われ、夕刻太鼓の合図により火とぼし山から点火された麦わらをうちふりつつ山を下り、大日向橋等では、鼓状に束ねた麦わらに火を移し縄をつけてぐるぐる振り回す。 | 盛ん | 県 |
| 703 | 4 | 〃 | 尾沢村 | 御柱のお祭り | | 7年ごと4月（前回平成10年） | 諏訪神社氏子 | 大木を七角に削り、その七面に七色の色を塗り、柱には御幣をつけシメを巻き、四方に竹を立て、御神木として建てる。 | 順調 | |
| 704 | 22 | 吉井町 | 各地 | どんどん焼き | 星尾 | 1月14日近辺の休日 | 育成会他 | 松・竹を三角形に立てかけたものを早朝燃やす。 | 順調 | |
| 705 | 28 | 〃 | 吉井町 | 祇園祭り | 町内各所 | 7月21・22日の近くの土日 | 第1区・2区 | 山車・神輿が出る。 | 順調 | |
| 706 | 15 | 〃 | 多胡村 | みそぎ流し | 神保辛料神社 | 7月31日 | 辛料神社氏子 | 茅の輪くぐりを行う。 | 順調 | |
| 707 | 2 | 新町 | 新町 | ふるさと祭り | 新町 | 8月1日 | 地区 | 午前中に地元の各区を廻り、夕方から中山道などを行進する。各区により色々な山車の種類がある。 | 順調 | |
| 708 | 15 | 藤岡市 | 藤岡町 | 人形流し | 藤岡 | 6月30日・12月31日 | 富士浅間神社氏子 | 大祓の人形で身体を撫でた人形を集め大祓の式を行い、北の川まで行き、拝みながら人形を流す。 | 順調 | |
| 709 | 2 | 〃 | 〃 | 祇園祭り | 〃 | 7月下旬 | 各町 | 計13台の屋台が引き出され、当番の町内を先頭にお囃子を演奏しながら引き回し、最終日の夜13台の屋台がシャギリの競演を行う。 | 順調 | |
| 710 | 8 | 〃 | 〃 | 道祖神祭り | 〃 | 11月15日 | 各町 | 悪病除けの祭式で、道祖神碑の前に供物を供え、オミゴク（菓子類）を参詣人に配り、お札を各戸に配る。 | 順調 | |
| 711 | 8 | 〃 | 神流村 | 二夜様念仏 | 岡之郷 | 2月22日 | 各地区婦人会 | 二夜様（如意輪観音）の掛軸を掛け、供え物をして短くなったロウソクを安産を願う女性に分ける。お産の時にこのロウソクを使うと安産できる。 | 順調 | |
| 712 | 22 | 〃 | 小野村 | 天王様 | 中上郷 | 7月24日 | 北・黒田組西・前組 | 2台の子供神輿を、両組が1年交替で担ぐ。神社を振りだしに氏子の家々を順に練り回る。 | 順調 | |
| 713 | 8 | 〃 | 美土里村 | 百万遍念仏 | 上落合 | 1月16日・7月16日 | 長津地区 | 村に疫病がはやらないように、20人位の女衆が輪になり鉦を叩く音に合わせて、大数珠を念仏を唱えながら廻す。回数に決まりは無い。 | 順調 | |
| 714 | 8 | 〃 | 美九里村 | お手長様 | 本郷風久保 | 2月初午 | 地区 | 手長神社の石宮は火伏せの神で、普段火を扱う女衆が、二月初午に集まり料理を作って賑やかに祀る。 | 順調 | |
| 715 | 11 | 〃 | 〃 | 神田雨乞い獅子 | 神田浅間神社 | 日照りの後 | 神田獅子舞保存会 | 榛名神社に向かい御神水を貰いうけて戻る間に獅子舞が神流川の中に入って獅子舞を奉納。その後、浅間神社の北にある井戸に御神水を注いで雨を祈る。 | 危機 | |
| 716 | 1 | 〃 | 平井村 | 北原の花火 | 白石字北原 | 8月5日 | 北原地区 | 村に悪いことが起こらないように、北原の鎮守様の十二天様に花火を上げる。200年も続いている。 | 順調 | |
| 717 | 8 | 〃 | 〃 | 三嶋様の夜祭り | 西平井三嶋神社 | 11月14日 | 三嶋神社氏子 | 神社の秋季大祭。下の宮から、御神体を神輿に移して上の宮に渡御し、翌早朝上の宮から下の宮に渡御する。 | 順調 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 718 | 11 | 藤岡市 | 日野村 | 辛科八幡のお的 | 上日野字田本 | 1月3日 | 辛料八幡社氏子 | 正月七草に弓取り・矢取りの子供を中心にしてお的を射て、今年の月ごとの天候を占う。 | 順調 | |
| 719 | 4 | 〃 | 〃 | 大日精進 | 下日野字鈩沢大日山 | 7月の初丑の日の前後の日曜日 | 鈩沢地区 | 大日様を守護仏として、百八灯を上げて祀る。麦ワラ束で作った梵天の上に御神木という幣束を立てたものを大日山山頂の杉の御神木にくくりつける。 | 順調 | |
| 720 | 8 | 〃 | 〃 | ワカレ塔婆 | 上日野字鹿島 | 2月～5月と9月～12月の月1回 | 念仏講 | 順番の宿の家の都合の良い日に、毎月（2～5月と9～11月）1回、各組ごとに女衆が集まって念仏を唱える。 | 順調 | |
| 721 | 8 | 〃 | 〃 | 鬼子母神祭り | 下日野字大平 | 4月15日前後の日曜 | 大平地区 | 観音堂に女衆が集まり、念仏を唱えて祭った後、飲食する。子供のない女性が祈願すると子宝に恵まれるという。 | 順調 | |
| 722 | 8 | 〃 | 〃 | 精進 | 下日野字芝平 | 7月の第一日曜日 | 地区 | 公会堂に各戸一人ずつ男子が出て、アンビンやうどんを作り、お精進様に供物を捧げ、一晩中飲食する。 | 順調 | |
| 723 | 2 | 〃 | 〃 | 鹿島神社例祭 | 上日野字鹿島 | 10月10日 | 鹿島組 | 鹿島神社の祭りに屋台が出て、大人が引きまわす。 | 順調 | |
| 724 | 8 | 〃 | 〃 | 犬様念仏 | 〃 | 10月の初戌の日 | 鹿島組 | 水田が無い鹿島では、畑に麦を栽培して主食にしたが、犬と麦との関係について伝説があり、戌の日に麦蒔きをしないで「犬の念仏」が女衆によって唱えられる。 | 順調 | |
| 725 | 2 | 鬼石町 | 鬼石町 | 鬼石祇園祭 | 鬼石 | 7月14・15日以降の土日 | 各町 | 江戸後期から始められた祭りで、現在、全町5台の山車が揃い、盛大に行われている。 | 盛ん | |
| 726 | 30 | 中里村 | 中里村 | 中山神社お川下げ | 魚尾 | 4月15日に近い日曜日 | 中山神社氏子 | 午後、祝詞奏上後、御神体は神輿に移され、若衆に担がれて神流川に設けられた神座へと運ばれ、みそぎの神事が行われる。 | | |
| 727 | 18 | 上野村 | 上野村 | 初絵売り | 川和 | 元旦 | 子供会 | 元旦の朝に子供達が「宝船」「金のなる木」「恵比寿」「大黒」などの絵を三枚で千円程で売る。 | 順調 | |
| 728 | 22 | 〃 | 〃 | どんどん焼き | 乙父 | 1月15日 | 乙父地区 | 3基ほどの「ハデ」を作り燃やす。道祖神のご神体の「オキンマラ」を火中に投じ、災厄を焼き払う。また、ヌルデの木で作った「ワキザシ」を焦がし、それを持ち帰り、玄関などに立てかけて魔除けとする。 | 順調 | |
| 729 | 4 | 〃 | 〃 | 薬師様 | 野栗沢奥名郷 | 旧暦の2月7日 | 奥名郷、所の沢地区 | 眼の神様として、薬師堂に供物を供えて、お参りしてから宿になった家に寄り御馳走になる。 | 危機 | |
| 730 | 8 | 〃 | 〃 | 七日の祭り | 乙父字石神 | 9月27日前の土・日曜日 | 石神組合 | 石祠の御諏訪様に供物を供え参拝した後、宿で飲食する。 | 盛ん | |
| 731 | 22 | 〃 | 〃 | 十日夜 | 乙母 | 旧暦10月10日 | 子供会 | 晩に「ワラデッポー」を手にした子供たちが各家庭を廻りながら大声で怒鳴りながれ庭に土を思いっきり叩き、家の者が子供達に300円程払う。 | 順調 | |
| 732 | 8 | 〃 | 〃 | ゼンキ様 | 野栗 | 12月～4月までの各月の12日 | 野栗6組 | 各月の12日に順番で宿になり、古峰神社の掛軸を掛け、供物を供え拝礼し、飲食歓談する。 | 危機 | |
| 733 | 29 | 〃 | 〃 | 天神様 | 楢原 | 4月20日前後の日 | 楢原神社氏子 | 神事、直会を行う。昔は、芝居、舞踊など余興もあった。 | 順調 | |
| 734 | 1 | 〃 | 〃 | 火あげ | 勝山 | 8月14日 | 地区 | 山の中腹に鳥居を作り麦わらを置いて火をつける。 | | |

群馬県の祭り・行事

群馬県祭り・行事調査報告書

平成十三年三月発行

編集・発行　群馬県教育委員会